
バニシング・ツイン

なしか 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バニシング・ツイン

【Nコード】

N6168P

【作者名】

なしか 空

【あらすじ】

一覽性双生児の姉・明美は、些細なことから妹の宵美からイカ焼きの竹串で心臓めがけて一突きされ、危うく死ぬとこだったけど、幸い内蔵反転で心臓が逆に付いていたから助かる。

両親はいさかいの絶えない二人を引き離すため、妹の宵美を遠くに養子に出して、名前も変えて居所もわからないようにする。

成人した二人は拘置所で出会うことになる、明美は検事、宵美は殺人犯として。

ある種の鳥において、先に孵化した雛が、兄弟の卵を巣から蹴り出

す習性がある、親を、そして、エサを独占するための本能として。同じことが双子にも起こる、母親の胎内で、あるいは出産後にも、それをバニシング・ツインという。

プロローグ（前書き）

この小説は拙著「続・テミスの像」（連載中）との姉妹作であり、双方の登場人物が入り乱れて同じ事件を追い駆けることになったりします。

双方とも一覽性双生児を題材にして、二律背反した世界の葛藤を描こうとした筆者渾身の野心作であります。

プロローグ

- 二〇〇九年 平成二十二年 八月三日。
東京拘置所。

午後一時。

時ならぬ開扉の音に、水上弥生は午睡から叩き起こされた。

「1025・面会だよ」

「面会？」

担当看守をぼんやりした眼で見上げたまま、つぶやくように聞く。それから水上弥生はのろのろと体を起こした。

（——誰だろう？）

面会といえば、このところは養母の貴子か、弁護士の山田ぐらいなもの。だが、二人とも月末に来たばかり。寝覚めのボーとした頭で、ほかに思いをめぐらせる。

「誰？」

豊富な制服姿で仁王立つ看守は、まるでムチでも持っているかのように胸を張り、肩を怒らせて、ことさらに二重アゴを引いている。規則に従って、余計な口はいつさい利かないぞーとばかりに唇を引き結んでいる。

のぞき窓からのぞいて、水上弥生は我が眼を疑った。透明のアクリル窓の向こうに、意外な人物が座っていたからだ。

その人物に会うのは何十年ぶりだろう。

縁日で買った焼きイカの竹串で心臓を一突きしたのがーあれが十二の時だから……かれこれ十八年ぶり、か。

やつが死ななかったのは、悪運にも心臓が反対側に付いていたからで、刺し傷は深々と肺腑を貫くほどに満足すべきものだった。

おかげで自分は何千キロも離れたところの遠い親戚——といって

も一世紀も遡らなければならぬルーツの、子供のいない夫婦に養子に出された。

それ以来やつは、両親のもとでのうのと暮らしてきたわけだろうけど、こっちは片時も忘れたことはない。憎しみの炎をほかに転化して、狂おしく生きてきたのだ。

水上弥生は異常な興奮に打ち震えた。ほとんど叫びたい気分だった。全身を4秒サイクルで血液が駆け巡る。

担当看守の高木が、閉経前のかさついた顔を向けてきた。面会に応じるかどうかここで相手を見てから決めることになっている。ズドンと一発見舞われた者がいたからだ。

水上弥生はうなずいた。

高木がドアをノックする。中からドアが開けられ、立会いの男性刑務官に引き渡された。

ひがしはまあけみ
東浜明美は入ってきた妹に素早く眼を向けた。

片時も忘れたことのない十八年ぶりの妹。一挙に時間が十八年前に遡り、小学生だった可愛い妹の面影を引き連れて舞い戻ってきた。十八年ぶりとはいえ、部屋の中央にふてぶてしく佇立する、ちよりつすりと長身の、黒い化繊のトレーニングウェア姿の妹に、戸惑いは感じなかった。

立会いの刑務官が二人を交互に何度も見たのとは対照的に、二人はまるで鏡に向かうように静かに見つめ合った。

東浜明美が実直そうな中年の係官に眼を向ける。手錠を外せとその眼がいつている。あわてて伊崎は未決囚の手錠を外した。

そして、未決囚の腕をとって椅子に座らせた。自分は隣の椅子に着座する。

いや、そうしようとして、東浜明美の眼に追い払われた。弁護人でもなく、担当警察官でも、担当検事でもない相手に位負けしたように、しぶしぶ出て行く。

アクリルの窓を挟んで二人は無言で向かい合った。

部屋の外では、追い出された伊崎と、担当看守の高木が、なんとウリ二つな美人姉妹かよ、と話している。あれが一卵性双生児というやつかいと。どれどれと、高木がまたのぞき窓をのぞいて納得している。

だが、当人たちにすれば、お互いの違いばかりが目立つーというか、何から何まで、まるで正反対なのだ。

髪分け方から顔つきまで ツムジの位置と渦巻きが逆なのだから当然のこと。聞き耳・利き眼・利き手も逆だし、内蔵さえ一方は逆転している、精神的にも、人格や、考え方、嗜好、睡眠パターンに至るまで、絵に描いたように対称的な二人であった。

子供の頃は親のなすままだに二人ともツインテールであったが、今はウエーブのかかった長い髪の明美に対し、宵美は短く刈り込んだ、ボーイッシュな髪形。

だが、二人が向かい合えば、みごとに二人が一人になる。鏡文字を鏡に映したように。

こういう左右対称的な双子は、その名もミラー・ツインと呼ばれ、双子の中でも珍しい存在 原因は受精卵の分裂時期が関係しているのではないかといわれている。

「何よ、あんた」妹の弥生のほうが先に口を開いた。「今更あたしに何の用なのよ」

これに対して明美のほうは穏やかに妹を見つめるだけだった。

「ふん！ そういう顔、あたし、大っ嫌い！」

「……相変わらずね」ようやく明美が口を開いた。「わたしはあんたが好きだけど」

「やめなよ。あんたまだ懲りないの。あたしに殺されかけたのに」
「……いつも、あんたのことを考えてた」

「今だって自由の身なら殺してやるよ。だってあたしはこの世で一人。二人とはいないんだよ！」

「あんたとわたしは違う。あんたはわたしの可愛い妹。かけがえない妹。今でも愛してるわ」

「そんな齒の浮くようなセリフがよくいえるね。ハイテンションな欧米人じゃあるまいし。だいたい何なのよ、そのケバイ衣装は。宝塚に憧れてた、あの頃のまんまね。あたしはあんたの草の二オイのする息が嫌いだった」

「でも、仲良かった時期もあったじゃない」

「いつておくけど、あんただけいい子だと思ったら大間違い。あたしはあんななのよ。嫌らしい偽善の陰に、あたしが潜んでることを忘れないことだね」

「そうね。ことさら悪い子ぶってたあんたの、ほんとうの心根がどこにあるか。どっちみち、あんたとわたしは、同じ受精卵から分裂した分身なんだもの。DNAも全く同だし。なのにどうしてほかの双子のように仲良くできないのかしら……ほかの双子がうらやましい。マナ・カナなんて、あんなに仲いいもの」

「食べるものから着るものまでーもしかして男の好みまで？ 気色悪いんだよ。それで何、どういう気まぐれからあたしに会いに来たのさ。よく居所がわかったね。どうやって捜したの？」

「あんたが頻繁に事件を起こしてくれたからね。でなきゃわからなかった。苗字も名前も変わってるし。ほんとうはね。わたしたちは離れているほうがいいのかも知れない。顔を合わせれば、ケンカばかり。でも、仕事の関係から、どうしてもあんたの力を借りたくて九州の大分から。親には内緒でね」

「へえー！ こいつは驚いた。こんなあたしでも、人様のお役に立つことがあるのかねえ。へへっ。あんた今、大分県にいの。仕事って、どんな仕事をしてるんだい？」

「検事」

「ケンジーって？ あの、検事？ 検察官のこと？ ——ちよつとやめてよ。この世であたしが一番嫌いな人種じゃないか。まさかあんたがーいはん、そういうことかい。どうりで官のやつ、あんなに頭が上がらないわけだ」

「まだ、新米だけどね」

「ねえ、ねえ。タバコ一本吸わせてくんない？」

「ダメよ」

「ケチ」

東浜明美が、赴任地の大分地検で担当している殺人事件の被疑者も双子だった。

双子自体今やーいや、昔から、どこの国の神話や物語にも出てくるし、珍しくもなんともない。

特に昨今では、芸能・スポーツ・政治・文化の、あらゆる分野で双子の有名人が活躍している。珍しいところでは、野球選手・監督だった王氏にも双子の姉がいた。

とはいえ、周辺に双子がいるかということになると、いるという者は少ないだろう。その程度のマイノリティーであることには違いない。日本では現在約1パーセントの確率で生まれている。

その中でも、二卵性の男・女という組み合わせが全体のほぼ四割強を占め、一卵性の男・男というのが一番少ない。

けど、不思議なことに、一卵性双生児の場合は、時代や人種に係なく、おしなべて約〇・4パーセントの出生率である。

被疑者はその男・男の組み合わせの一卵性双生児であった。それも、ミラー・ツインに劣らぬ特異な形態の双子で、事件自体もきわめて特異な事件であった。

東浜明美検事は、事件の内容については触れずに、「あんた今でもわたしを憎んでる？」と、宵美にきいた。

宵美というのが本当の名前で、水上家に養子に出され、そこで弥生に改名されていたのである。

「おやつの串焼きイカをあんたに食べられた恨みならもうないけどね」

「あれは、あんたがそう仕向けたんじゃない。いつだってそう。わたしが食べ終わるまで待っていて、さもいらぬ素振りであつておくの。あの時だって、わたしが食べなきゃ、猫が食べてたわ」

「猫が食べようとネズミが齧ろうと、あたしのなんだから。ひとつのものを勝手に食べないでよ。あたしのものに手をつけたあんたが断然悪い！」

「あやまったでしょう。髪をつかんで殴ることはないと思うけど」

「その何倍もの力強さで親父に殴られた。だから親父の一番大事なあんたを、イカのように串刺しにしてやったのさ」

「パパやママにとっては、あんたもわたしも同じ可愛い娘。ビーナスちゃんって呼ばれて、二人とも可愛がられたじゃない。名前も、宵の明星と、明けの明星から取ったって。パパはあんたの意地悪を叱っただけだよ」

「ふん！ 古代人はビーナス 金星 が二つあると思ってた。親父だってそうさ。何かといえば、あたしばっかり叱った」

「あんたが悪さばかりするからよ。本気でもなくせに」

「本気でないって！ あんたまだわかってないね。竹串の先が背中から突き出てたことを忘れたのかい」

「それなんだけど……わたしのこと、少しは心配した？」

「全然」

「死んでたら、悲しんでくれた？」

「せいせいしただろうね」

「……」

「何だい？ 涙なんか。心気くさいね」

「……あんたには、憐れみや、愛^{いっく}しみの心はないの？」

「何？ それ。——それよか、早くしなよ。時間が来ちゃうよ。何を教えて欲しいんだい。悪党のウソを見抜く方法なら教えてやってもいいよ」

「……」

東浜明美はまじまじと妹を見た。担当事件の被疑者と向かい合っている時に感じた戸惑いを、今、妹に対しても感じている。

「それならたった今、訊^きいた」

「え？ あたしのこと？ 憐れみや愛しみが何だって？ そんなこ

とを訊きに、はるばる九州くんだりからやって来たつての。バツカじゃないの」

水上弥生こと宵美は鼻に皺をよせて憫笑した。チャーミングな白く大きい前歯二本をのぞかせて。皮肉にもそれが彼女一番のオチャメな表情であり、愛くるしくさえあるのだ。子供の頃と少しも変わってない。

「そんなの近場の動物園にでもいつて、ライオンだかトラだかにでも訊ねたほうが早いんじゃないの。こつてり脂ののったイボイノシシに情けをかけて、ヨダレを垂らしながら頭を舐めるだけにしとこうなんて、そんな奇特なライオンがいれば別だけど」

「茶化さないで！ ほんとうのところを訊きたいのよ。わたしは一体あんたの何なの！ ーほんとうは独占欲なのよね。そうなんですよ。パパを独占したかった」

恐怖と激痛にパニツクになつて差し伸べた手を、平然と見つめていた時と同じ顔で、宵美はいった。

「そしてこの世界をね」

「……」

明美は言葉を失った。

「んじゃ、今度はあたしの頼み、聞いてよ。このままだと三年の実刑食らいそうなんだ。能無しの弁護士ばかり。ましなの、いないかねえ。あんた検事なら、ヤリテの弁護士の一人や二人、知ってんだろっ？」

「執行猶予は無理。三年は妥当な線だわ。人を殺したんだもの」

衝動的な傷害事件を繰り返すうち、とうとう宵美はつまらない諍いさかいから男を刃物で刺し殺していた。

「向こうが仕掛けてきたんだ。仕方ないじゃないか」

「動物の世界じゃないんだから。トラブルを避けようと思えば、ほかに方法がいくらでもあつたでしょう。いい、悪あがきはしないで、反省の色を見せて、できるだけ遺族に補償をして、早く裁判を終わらせることね。あんた、前が多いから、未決拘禁の分、全部は算入

してもらえないと思う。

結果そのほうが早いだよ。いい子にしていれば、二年ちよつとで、仮釈で出られる」

「二年も辛気くさいムシヨに我慢してろつてのかい。薄情者！ 兄弟のよしみで、何とかしてくれたつていいじゃないか！」

「反省するには足りないくらいの時間だわ」

宵美の犯歴を考えて、明美は泣きたくなった。三十にもなるというのに。この先どんな幸せが彼女に望めるのだろつ。悲しみは苛立ちに変わった。

「どつちみちまた、面倒を起こして舞い戻つて来ることになるんだから」

「——あんたねえ！」

「そのうち、終の棲家になつてしまふようなことに——ちようどよい機会だわ。この際、じつくり反省しなさい！」

「——チクシヨウ！」 宵美がいきなり立ち上がった。激しく窓を両手で打った。「あんたはいつも陽の当たるところにいて、あたしはいつも日陰にいる。あんたを殺すしかないんだ！」

刑務官二人が雪崩れ込んで来て、体格のいい女性看守の高木が宵美を羽交い絞めにした。

それを振り飛ばそうとするが、何せ粗暴な囚人用の重戦車。びくともしない。猪木にバツクをとられたほうがまだましだ。急所を突こうにも急所がないと来ている。

とうとうねじ伏せられて、伊崎に後ろ手に手錠を打たれた。

「殺してやる！」 なおも、もがきながら宵美は叫び続けた。「きつと殺してやる！」

東浜明美は両親の戒めを破つて妹に会いに来たことを激しく後悔した。向かい合つてはいけない二人なのだ。

（遠くから恋焦がれているだけの姉妹なんて、これは一体何者のいたずらなの！）

その奇怪な事件は一年前に起きた。

魚市場からフェリー乗り場にかけての広大な岸壁上空を、ピーヒョロロと、長閑に、高く低く舞っていたトンビの群れの中の一羽が、どういいうわけか須崎の海岸防波堤上空にやってきて、しきりにカラスと空中戦を演じている。

午前九時をまわった頃のことだ。

これを祇園洲ぎおんのすの住人の品川薫老人しながわあるが、祇園東の防波堤から無心に見上げていた。

B29のようなトンビも、零戦のように果敢に挑みかかってくる三羽のカラスを、小うるさいチビ助どもがと、最初は余裕をかましてあしらっていたが、そのうち、素早い動きで執拗に上下左右から攻撃してくるカラスを持て余し、怯みひるを見せると、今度はカラスが嵩かさにかかって攻勢に転じた。

体当たりを食らって羽根を散らしたトンビは、とうとう、あたふた翼を動かし、制空権のある岸壁のほうに逃げていった。

——フォツ、フォツ！

こけた頬の合間から墓石のような門歯二本を見せて、この日初めて品川老人は声を上げて笑った。

天使のような笑みを振り撒いて歩く老人ではあるが、声を出して笑うことは滅多にない。この空中戦には、つい声を漏らしてしまうほど感じるものがあつたのだろう。

フンドシを洗ってくれていた連れ合いを失ってから、トランクスとかいうハイカラなパンツを穿かされて、元帝国陸軍伍長は心もとない日々を送っていた。

自分のことは「カオルちゃん」と認識しており、齢は八十七から先はわからない。何年経っても人に聞かれたら、「八十七」と答える。

朝食のあとに「はい、カオルちゃん」とー幾種類かのクスリを飲まされたのちのことだがー右手の平に、ニツケのアメ玉ひとつが、オカアチャン 長男嫁 からのせられる。

それを落とさないように、キャバレーのボーイが銀盆を片手にささげ持つようにして持ち、ネジを巻かれた兵隊人形のように、木綿の日本タオルの上から草色のツバ広帽を被り、草色の半袖シャツと、草色の半ズボン姿で、草色のリュックを背負い、日課の散歩に出かけてきたのだ。

リュックの中には彼の大事なお宝が入っており、外付きのポケットには、迷子になった時のために、住所と名前と電話番号、それに血液型を書いた手帳が入れてある。

アメ玉を口に含む時期も、それを右頬から左頬に移し変える時期も、そしてまた散歩コースもー冬眠中のロシアのクマが寝返りをうつ日が決まっているようにーちゃんと決まっている。

だけど歳を重ねるごとに、股関節や膝関節のチヨウツガイが錆び付いてきていて、さすがに背筋をピンと伸ばした元帝国陸軍兵士も、歩幅はきわめて狭く、膝が曲がらないから、麦踏み的要領でチヨコチヨコ歩きに歩く。だから首振りになり、天使のような笑みを振り撒くことにもなるのだ。

なので、いつもの船着場にやってきて石段に腰をかけ、いつものように入り江の向こうを眺めるか、防波堤に寄り掛かって臼杵湾を眺める頃にはもう、アメ玉はコンタクトレンズのようになっていたのだ。家に帰り着くまで残っていて、それをベロの上にのせてオカアチャンに見せたものだが。

今日はどこかいつもと違ってーと、カオルちゃんは思っただろうか。

空も海も島も入り江もいつもと変わらない。満潮なので七段ある石段の下二番目からスロープにかけて波が洗っていた。セミもうるさく鳴いている。高い石塀を廻らした大屋敷の庭木のおかげで、そこは日陰で涼しくもあった。

いつもの風景と違うところは、小型船舶用の船着場の右側壁——
幅五十センチ前後——の突端の上に、黒いゴム長靴が二足、湾の外
に向けてそろえて置いてあることだった。

そこに一羽のカラスが舞い下りたのが九時前くらい。

これはカオルちゃんの証言ではない。そこから北東に少し離れた
ところの、須崎御台場付近の防波堤や、波消しブロックの上などで
遊んでいた、近所の子供たちの証言だ。近頃では小学生でも携帯電話
話を首から提げている。時々それで時間を見るのだろう。

須崎お台場というのは、鎖国政策を押し進める幕府の命により、
臼杵藩が湾岸防備のために構築した砲台、の跡の石垣のことである。
彼らは満潮だというのに、四、五列に敷き詰められたテトラポッ
トの上や、あるうことが、高い水門の上などを、危なっかしくも、
絶妙のバランス感覚で、上り下りして遊んでいた。足を滑らせて高
い水門の上から落ちてもしたら、またテトラポットの間に落ちてても
大変。子供というのは、親が見てないところでは、なんと危なっか
しいことが。

彼らの証言によれば、この時カオルちゃんは船着場から南西に少
し離れたところの防波堤に寄り掛かっていた。つまり船着場を挟ん
で、彼らとは反対側にいたわけだ。カラスにとっても、両者は安全
距離であった。

たちまち一羽が二羽になり、三羽になった。

そして、三羽のカラスが一斉にスクランブルし、領空侵犯のトン
ビとの空中戦が始まったのである。

トンビを追っ払ったカラス三羽が、再び側壁の上のゴム長靴のと
ころに舞い下りたのが九時半頃だろうか。

いずれにしても、ゴム長靴の一つが倒れ、カラスがそれに集つて
いるのを不審に思ったカオルちゃんが、指差して騒いだものだから、
そこら辺で遊んでいた子供らが、棒を持って追っ払いにやってきた
わけである。

なんでカオルちゃんが不審に思ったのかはわからない。ひょっと

して、嘴^{はしづと}太カラスのクチバシに付いた血肉が見えたのかも知れない。
なにしろ修羅場を潜ってきた元兵士である。空中戦に興奮してもい
ただろう。落ち窪んだ眼窩の中のトビ色の円^{つぶ}らな瞳が、ジャングルの
の向こうを見透かすようにして、それを見逃さなかったのだ。

——ゴム長靴の中には——二足とも——人間の膝関節から下の脚
が入っていたのである。

前に続く

この一大事を、すぐ近くの警察署に駆け込んで報せたのは、現場近くの中学校で野球をしていた生徒たちである。

小学生から中学生へとリレーされて、所轄警察署が事件を認知したのが、午前十時十二分であった。

かわいそうなのは、第一発見者の小学6年生の男児。彼は長靴を逆さまにして、出てきた腐乱しかけた脚をモロに見ている。

そのショックもさることながら、発見時の模様や、不審人物を見なかったかなど、性急な質問を、長時間にわたって受けることになった。

なにしろ、その場に居合わせた中では、彼が一番しつかりしていたからで、品川老人などはてんで話しにならないし、ほかの小学生らはまだ我こともよくわかってない低学年であった。

臼杵小6年2組・出席番号1番の足立明君はしかし、気丈にもしつかりした口調で、訊かれたことにテキパキ答えた。聴き手の刑事が、交通安全教室などで顔なじみのおっちゃんだったこともあるのだろう。

それになにより、「名探偵コナン」などでおなじみの刑事——残念ながらおっちゃんやかまは警部ではなかった——実物の刑事と話していることに、メチャ興奮してもいた。明日学校にいつてみんなにいいふらして自慢しようーと思っただけ、残念ながら今は夏休みに入っただばかりなのであった。

おっちゃんやかまが、喧しいチビたちとはわけて、少し離れたところのソファで大人のように扱ってくれるのもうれしかった。頭の大きさではすでに大人に負けていなかった。

急にチビたちがおとなしくなったと思ったら、婦人警官のおねえさんが、ご褒美の菓子を振舞っているとこだった。

そのうちのひとりが、オレンジジュースの紙パックと、ロールケ

ーキを持ってこつちにもやってきた。

「食べなさい」少年の前にそれを置いて、いった。ロールケーキは厚切りにしたのがふたつ小皿にのっていた。プラスチックの小サジがついている。おねえさんはそのまま、彼の横に座って、「君、よく見かける児だわね」と顔をのぞきこんだ。

足立少年のほうも、よく見かける婦人警官のおねえさんだと思った。駅の自転車置き場や、通学路の交通整理などで。

お互いに、人一倍、目立つ存在だったのだ。

まず、足立少年は児童にしては頭が大きく、三頭身といってもさしつかえないくらいに肥満児。上体に比して、下半身がぶつ切りにされたかのように短い、マンボウのような体型。

なので、人生の大半を、ずり落ちそうになるズボンをチチの辺りまで引き上げることに費やしている少年だった。

運動会の徒競走などは彼の独壇場。そのユーモラスな体型や動作が観衆の大爆笑を呼ばずにはおかなかった。

走る時には鍋を持つように運動パンツの両側を持って、文字通りパンツごと大きなお尻を抱えて走らねばパンツがずり落ちてしまうけど、彼にも自尊心があるから、そんな格好悪いことはできない。片手でつかみ、片手で引き上げしているうち、波のように上下左右にうねる尻肉によって収拾がつかなくなり、半ケツになり、後ろと前を押さえて内股で走ってしのぐとするも、短い脚がもつれて、ついには鉄砲で撃たれたイノシシのように大袈裟に倒れる。

そんな道化を演じることによってー脚がもつれたように倒れることによってー走りか誰よりも遅いことを、ドンケツを走るはめになったことを、正当化し、羞恥心と、自尊心と、呪わしい現実とに、折り合いをつける。

彼がさいわいなのは、そのキャラクターが誰からも好感をもたれ、愛され、人々をなごませる、好ましい存在であることだった。

彼の動作はいちいち可笑しく、その愛嬌のある体型と合わせて、どこにいても目立った。声変わりしてない澄んだボーイソプラノの

嬌声が、よほど離れたところからも聞こえた。

一方、若い婦人警官のほうは肌の色が黒いので目立った。黒いといっても、運動部の女子中学生のように、日焼けと、垢と脂で、黒光りしているような黒さではなく、青と黄色と黒を混ぜたような奥深い黒さだった。顔つきもエキゾチックなので、外人に違いないと子供らはいい合っていた。

道行く臼杵市民らも、きつと振り返って彼女を見る。大分県警はついに外人を雇い入れたのかと。

年寄りらは、「ある見よまあ」「土人じゃなからうか」「いんね、インド人じゃろう」「いんねとなあ、黒人の混血じゃろうがええ」と勝手なことをいって通る。

若者らは、その弓のようにしなやかな、メリハリのある肢体に眼を奪われるけどーあらゆる分野において、いろんな国の人々や混血が、流暢な日本語で活躍している時代であるーさほど珍しくないのだらう、振り返って見るにとどまる。

髪の色は天然の茶髪。ストレートパーマでもかけているのか、真ん中から分けたのを後ろでひとまとめにして、緑と黄色のチエツクの布で縛っているーが、それから下は馬脚を現して、形状記憶合金のように、あるがままの姿を主張し合い、己がじし、てんでんばらばらに、本来の天然パーマ状態で肩にもたれかかっている。

手を加えてないゲジゲジ眉がむしろ新鮮で、眼も鼻も口も整然と小振りの丸い顔の輪郭の中に行儀よく納まっている。引き締まった端正な顔立ちである。とりわけ、白目の白さと、歯の白さがまぶしいほどだった。

そんなキュートな婦人警官に見つめられて、足立少年は緊張し、顔が赤らんだ。

幼女がすでにシナを作るように、思春期にさしかかっている彼も男だ。そのシルシはまだないにしても。照れ隠しに、彼女の腰の拳銃に眼を向けた。

意外と小振りなんだなあと思う。

辛抱強く待っていたおっちゃんも、ついにシビレを切らせていった。「みんなが見てちゃ、喉を通らんわなあ。持って帰って食うか——うん？」

そうではない。たった今、腐りかけた人間の脚を見てきたばかりなのだ。むっとする嫌なにおいを嗅いだばかりなのだ。ゲが出そうになったのを必死でこらえたばかり。チビたちと一緒にしてもらっては困る。

おっちゃんも色は黒いほうだと思う。突きん棒漁師だったじいちゃんよりは黒くないけど。背はそう高くないけど、横幅があり、ハンマーのようなデコチンをして怖い顔だけど、笑うとやさしい顔になる。

それが頭を反らせて、自分より背の高い者でも見下ろすように見る。だから鼻が上向いて、柿の種のような鼻の穴が見える。鼻毛にシラガが混じっている。

「そうしなさい」と婦人警官もいう。

やっと帰れると思ったらーチビたちはもう解放されたのにーおっちゃんはまた同じ質問を始めた。

「何度もきいて悪いけど、君がそんなケータイを力チャリと開けて見たんが？」

「八時二十八分」うんざりして答えた。

「うんそうか。それで、ややあつて船着場のほうを見た。けど、そんな時は、まだ、長靴はなかったんだな？」

「はい」

「ところが九時前頃、ふと見ると、そこにカラスが一羽舞い下りていた。そのそばに黒いものがふたつ見えた。そのあと、ややあつてまたケータイを見た。それがー」

「九時三分」

「だから、そん、ややーを差し引くと、九時前頃になるというわけか。つまり、八時半頃から九時頃ん合間に、何者かによって、長靴が置かれたちゅうことになるな」

「はい」

「その間、君らは遊びに夢中で、なにも見てない」

「見てません」

交通安全教室の時は、ひょうきんな顔で、面白いことをいっぱい
いって、みんなをゲラゲラ笑かしたのに、今は恐い眼をしている。

「その時カオルちゃんは？」

「向こうで塔のほうを見てたです」

「諏訪山の仏舎利塔だな。ふ〜ん……」吉賀巡査部長はしばらく考
え込んでから「すると、品川老人、はいつ船着場にきたんだろうな
？」とつぶやいた。

「いくらなんでも、係長。老人が船着場にいたら、カラスは舞い下
りてきませんよね」吉賀巡査部長の横には、先ほど息を弾ませて帰
ってきた、ふたりの刑事が立っていた。そのうちの中年の小太り、
中津留刑事が口を出した。「石段からは眼と鼻の先、五メートルと
離れてませんかねえ」

「——だな。そうか。そうすると、老人と遺棄者が遭遇した可能性
があるな」

「でも、あの通りの人ですからね。三、四歳児と話すほうがまだま
しですよ」もうひとりの、若い、大柄の伊東刑事がいう。

「老人自身が遺棄した可能性はありませんか？」婦人警官の佐藤が
口をさしはさんだ。ブルーのシャツと、紺色のズボンという制服姿
が凛々しい。

「まさか」ジーパンの上に縦縞のシャツの裾をだらしく垂らした
伊東刑事。

「——足立君ちょっと、ケータイの時間を見せてくれんか」

足立少年は首から下げた子供用のケータイを開いて見せた。吉賀
巡査部長は自分の腕時計と、壁の時計とも見比べて、「時間は合っ
てるな」といった。

刑事は細かいところまで気を配るんだなと、足立少年は感心した。
コナンもそうだ。コナンならここらでなにか気の利いたことをいっ

て、警部たちを驚かせるけど、なにも思いつかない。

「船着場に行く路地はひとつですよ」中年の中津留刑事がいう。「その路地と通じているのは、小学校からの路地か、それに卜の字型に交わった中学校からの路地しかない。ほかからは行けません。防波堤の上を歩いて行けば別ですけど」

小学校からの路地がクランクになった先で、中学校からの路地が交わっており、それを過ぎて更に北に行ったどんつくに、小型船舶用の船着場があるのだった。

その路地の右側はずっと高い石堀で、まだ藩の重臣が住んでいるのではないかと思わせるような古い建物と、広い日本庭園がマキの木の茂みの中に隠れている。左側はブロック塀の民家と、菜園。

その船着場も昔はプライベート用だったのかも知れない。

「その手もあるか」と吉賀巡査部長がいう。

「でもその一方には足立君らがいた」中津留刑事がいった。

「反対側は？」

「ずっと防波堤に沿って民家がぎっしり並んでますからね。次の船着場からでないと、防波堤には上がれないですよ」と若い伊東刑事がいう。

その辺りには大小の船着場が幾つかあった。テトラポットはなく、幅五十センチ前後の防波堤には、フックが点々と打つてあるところもあり、小型船を舫^{もや}えるようになっていた。

防波堤に密着した民家からは、満潮時なら釣りができるのではないか。部屋の中から夕飯のオカズが調達できたら便利だろう。足の指に釣り糸を巻きつけておいて、寝転がってテレビでも観ながら――いや、実際そうしている者がいるらしい。あの辺りは臼杵川と末広川が出合うところでもあるから、いろんな魚が釣れるらしい。ウナギも釣れる。

――などと、三人の男連中が話をそらしているので、「だとすると、民家から目撃されているかも知れませんか」と、オボンを抱きしめた佐藤巡査が話を元に戻すようさえぎった。ミステリードラマ

マの進行には欠かせない、お馴染みの、チヨイ役のおねえさんのように。

「それは連中の聞き込み情報待ちだな」といって吉賀巡査部長は、ひとり置かれている足立少年を思い出して、「ところで、君が見たという不審人物だな」と、ようやく肝心なことを訊いた。

さつきから同じ質問ばかりでうんざりしていた足立少年は、これから自分がいかに捜査に役立つ証言をするか、ぜひとも婦人警官のおねえさんに見てもらいたいと思った。

まだそのシルシはなくても、彼ももう男の端くれだった。

その男は白っぽいつば広帽を被り、白いマスクと、上のほうだけ青いぼかしの入ったメガネで顔を覆い隠して、市役所裏の防波堤の内側に立っていた。

港町に住む足立少年は、兄がいる中学校野球部の練習を見るために、七時半ごろ家を出た。

いつもの公園下の歩道を通って、警察署前の大きな交差点を渡り、警察署から二本西の水路沿いの道路を――満潮だったので水路に入り込んだ魚を追いつながら――市役所の駐車場脇まできて、そこから駐車場内を通り抜けて、水路と防波堤とがぶつかる開口部までやってきた。

開口部は防波堤の下に口を開けている。そこまできて、右手の防波堤下に佇む、その男と眼と眼が合ったのだと足立少年はいう。家からそこまで十分前後かかるとみて、七時四十分前後のこと。

男は比較的大きな濃い緑色のリュックを背負っていた。背は高く――子供目線であることを考慮にいれなければならないが――骨張った感じで、腹なんか出ていないで、すらりと脚は長かった。着衣についてはカーキ色のジャケットと、同じ色のズボン――どうもサファリルックに近いものと思われる。髪は黒で、短髪でないことだけは確かなようだ。

男との距離は対象物があるわけでないからわからない。そう遠くではないらしい。一瞬時間が止まったように、ふたりは見つめ合ったのだという。男は湾の方に体を向けたまま振り向いた様子で。

それからその男の姿を少年は見えない。野球部員の中学生も、見学していた女子中学生や、そこで遊んでいた小学生らも見かけない。その界限の聞き込みによっても、そんな不審人物は目撃されてなかった。

ともあれ、初動捜査における第1号の不審者を提供してくれた足

立少年は、婦人警官の佐藤巡査によってミニパトで家まで送り届けられた。

ところが家人は誰もいない。父親も母親も仕事で家を空けていた。佐藤巡査は少年に訊いて、新地のスーパーで働く母親のもとに少年を連れて行った。

母親を呼び出して事情を説明し、少年を独りにしないようにいう。母親は、佐藤巡査の顔を珍しそうに見つめてから、歯茎を出して笑い、「そげな心配いらんよう」といった。

「でもおかあさん、大変なものを見てしまったんですよ」

「心配いらん、いらんちゃ。犬猫ん死骸があると、じぎじゃあ、カラスより先に飛んで行って、棒でつくじりまわして見るような子じやけん」と鷹揚おつように構えている。

動物の死骸に興味を抱く年頃には違いない。恐いもの見たさで少年らはよくそういうことをする。

「でも、人間の脚ですよ、おかあさん」佐藤巡査はあきれて、「精神的ケアが、きっと必要になってきます」厳しい口調でいった。

母親は明のほうを見て、「ほな、叔母ちゃんのとこさへいっちゃりよ。おかあさんが迎えに行くまで、そこにおりよ」といって、佐藤巡査のほうに向き直り、「近くで妹夫婦がパーマ屋してるんやわあ、そこに連れていっちゃきますわ。これがいまだに子供がでけん夫婦でから、こん子を、とおてん可愛がっちゃうんで。

——いんね、ウチの兄弟はみな子宝に恵まれてねえ、芋蔓をたぐるようにグワラグワラ子沢山。旦那のほうに問題があるに決まってるけん、はよ病院で診てもらいんさい、排卵があるうちに、はよせにやゆうて、しちくじゅういよんのじゃけんどこれが」

「——ですからおかあさん。心配なのは明君のほうです」凜々しい顔をした佐藤巡査は、小鼻を膨らませて声を強めていった。

明少年の肩に手を置いて、顔をのぞき込み、「なにかあったらケータイに電話してね」といって、少年のケータイに自分の番号を打ち込んで記憶させた。

姿勢を正し、「そういうことでしたら、自分はこれで署に戻りますけど、くれぐれも、当分の間、明君を独りにしないように願います」と、強く念を押して、去った。

——その夜。

明は眠れなかった。眼を瞑るつむのが恐かったのだ。眼を瞑れば、途端にあの男の顔がマブタの裏に現れる。

首を捻じ曲げてこっちを見つめる怪人のような姿の男。つば広帽の下の青く曇ったメガネ。その奥で光っている双眸。白いマスクが微妙に動き——“おまえ、見たな。生かしてはおけない”というのだ。

だから眼を閉じられない。だが、睡魔は襲ってくる。寝返りを打ったり、ほかのことを考えたりしながら——婦人警官のおねえさんの顔を思い出していると、少しは気持ちが安らいだ。

——岩の裂け目からチロチロと褐色の水が流れ出している。

それは幾筋にも分かれて、血管のようにわかれて、岩肌を這い、湯気に煙る池に流れ込んだ。

——泡立つ血色の池に。

——人間の足が浮いている！ 白い骨の見える人間の脚が！

振り向くと、つば広帽を被り、鼻までお湯に浸かった青メガネの男が、バスタブの湯気の中からこっちを見て、嗤っている！

——うああっ！

明は跳ね起きた。いつの間にか眠っていたのだ。

あのなんともいえないイヤな臭いが鼻腔に充満している。吐き気がこみ上げて、吐きそうになる。

人が一生に一度も、まず嗅ぐことのない、人間の腐敗死臭。明は不幸にもそれを嗅いってしまったのだ。それは鼻腔の粘膜と一緒になっ
って拭い去れない。

心の奥に押し込めていたそれらのことが、夢となって溢れ出てきたのだった。

明は恐怖に震え、泣きしながら二段ベツトから這い下りてー下段には中学生の兄が寝ているー子供部屋を出て階段を下りた。

居間の隣が父母の部屋である。そこには三歳の妹を真ん中にして父母が寝ている筈だった。どこでもいいからもぐり込もうと思ったところが幸運にも妹は母の後ろに寝ていた。父母の間に隙間があった。少年は泣きながらカブトムシのメスのようにその隙間に頭からもぐり込んだ。

「なんね？ どうしたん？」母親が驚いて声をかけた。

少年は声を殺してうつ伏せに泣きじゃくった。声を張り上げて泣く年齢ではなかったからだ。

父親も目覚めている風だった。夕飯の時、母親から事情を聞いて、「そりや明日は大騒ぎになるぞ」といった父親は、「はよ寝よ。バカたんが」といつて背中を向けてしまった。

母親は自分のタオルケットを息子に掛けてやりながら、「なにが、おじい 怖い ことあるもんね」と艶を帯びた声でいう。

それ以上の言葉はどちらからもなかった。また、期待もできなかった。タイミングが悪かったのだ。

長距離貨物運転手の父親は、地場企業の調味料を積んで北海道までのひと航海を控えていたし、母親は五時にはその父親に食事をさせ、弁当を持たせて送り出さねばならない。ふたりとも熟睡が必要だったしーその妙薬ともいえる行為を、今まさに始めようとしていた矢先だったのである。

従って明は、それだけの言葉から恐怖心を溶かし、安心と安眠の滋養をすくいとらねばならなかった。わずかな水分を求めてさまよう砂漠に棲むヘビのように。

しかし、有難いことに、ぬくもりと一緒に体から伝わってくるものはあった。それは熱力学の法則のように、体の隅々にまでいきわたった。

同じ大きさの頭が三つ並んで、それぞれにうごめいていたが、やがて三つとも、畑のスイカのように動かなくなった。

果たせるかな、翌朝から、この県南の閑静な城下町は、降って湧いたような猟奇的事件の幕開けに、西郷軍が攻め寄せてきた明治以来の大騒ぎとなった。

城址公園を扇の要に、古い寺社や、歴史的建造物や、由緒ある屋敷や蔵や、城下町特有の迷路になった家並みが、褪^あせた甍^{いづか}を連ねる街に、騒々しいサイレンの音が鳴り響いた。

国道・県道・市道の要所・要所には、パトカーと白バイが見え隠れしていた。市街にはやたら警官が目立った。ふたつある駅には私服が鋭い眼を光らせていた。フェリー乗り場もそうだった。

警察署の出入りは激しく、警察署がある臼杵から祇園地区にかけては、社旗を振るわせたマスコミ車が走りまわり、警察の聞き込み部隊のあとから、現場付近の住人にコメント取りに歩く記者たちの姿が方々で見られた。

現場に通じる唯一の路地は、大分県警の黄色いテープで規制、封鎖されていて、警官がひとりつくねんと立っていた。テレビ局のカメラマンは、そこから野次馬の頭越しに、青いテントで覆われた船着場を撮影している。

気の利いたテレビ局は漁船をチャーターして、海から迫っていたし、対岸の昭和地区の岸壁から望遠レンズで安上がり^{あがり}に済ませている局もあった。さすが全国紙はヘリを飛ばして、空から現場を撮影している様子。

無論、警察署に張り付いている組もいて、署長の記者会見を今か今かと待ち構えいた。

臼杵警察署では、刑事生活安全課も交通地域課もない、非番の者も緊急招集されて、総出で事件対応に当たっていた。

午後になって、ようやく下川署長の記者会見があり、詳しい事件

の概要が述べられた。

「遺棄された脚にあつては、膝頭から下左右二脚、ゴム長靴の中から発見された。生前に切断されたものであり」ここで記者団はよめいた。「中年男性のものと推定される。推定身長は一七〇センチ前後。肥満度はマイナス二〇パーセント前後。外傷は見られない。動脈硬化がかなり進んでいて、爪水虫あり。やや〇脚気味に歩き、筋肉の具合から、肉体労働者ではなく、ホワイトカラー、もしくは、ブルーカラーでも比較的軽度な作業員または管理職員が想定される。足のサイズは25・0センチ。体毛は――剃っているが、薄いほうである」

と、検死官の所見が披露されたところで、記者の質問に遮られた。

「足の毛を？ それは、本人がですか？ それとも遺棄者が？」

「たぶん、遺棄者――いや、解体者だろうね。本人だと、ああも完璧には剃れないだろうということだ。どこかに剃り残しができる筈だというんだ。断定はできないがね」

「だとすると、それは解体者の趣味ということになりますかね」

「さあ、どういう意図があるのか……もともと変質者の仕業だろうから」

「死因は？」ほかの記者からの質問。「いや、まだ生きている可能性もあるんですよ」

「ガイシャがすでに死亡していると仮定した場合、死因特定には、頭部がないとね。脳がないと、病死なのか傷害致死なのかわからないのだそうだ。死亡時刻の推定もむずかしい。ドライアイスかなにかで冷やされていた形跡があり、死後だいぶたつてるようだけど。少なくとも、ここ一週間以内でないことは確からしい。くわしくは大学での司法解剖待ち。

断っておくが、ガイシャはまだ生きているということを前提に捜査する。諸君らもそのつもりで報道するように。あとで面倒なことになってもよいという覚悟があれば別だけど」

「ほかに身元を特定できそうな遺留物はないんですか？ ゴム長靴

からは？」

「ないね。ちなみにゴム長だが、中国製の合成ゴム製品で、色は黒。一九九〇年代から出まわっている。用途は、建設業・農業・薬品製造業・メッキ塗装業などでの作業用。かなり褪色たいしょくし、硬化もしているから、新しいものではない。寸法は27・0センチ。丈が40・0センチ」

「切断は？」前出の記者がまた質問 地元新聞臼杵支局の記者だった。「切断に使用された刃物はどんなものだ？」

「鋭利な刃物と、ノコギリだね。ノコギリは目の細かい、金切りノコのようなもの」

「身元確認のための捜査は、ほかにどのようなことがなされているんですか？」別口が質問した。

署長は喉が渴いたのか、用意されてあったコップの水を飲んでひと息入れた。でっぷり太って貫禄はあるが、要観察と 要治療の生活習慣病を幾つも抱えて、肩で息をしている。

隣には刑事課長が同席。課長の山崎警部はようやく発言の機会を得た。

「病院をあたっています。死亡診断書を書くのは医者ですからね。それから遺体を受け取る葬儀屋。死亡届けを受け取り、代わりに火葬許可証を発行する市町村役場。最終的には葬祭場ですな。両脚のない遺体の火葬がなかったかどうか。管内だけではなく、他の市町村を管轄する署の協力も得ているから、この方面はおっつけはつきりするでしょう。あくまでもガイシャは生存しているという前提においてだけだね」記者団から失笑が漏れた。「一方では、情報による――最近急に姿が見えなくなったり、連絡がとれない、居所がわからないなど、これはみなさん方からも呼びかけていただきたいのだが――所在不明者との照合だね。血液型など、条件が合致した者の捜索を行う。一ヶ月以内という制限付きでも、問い合わせは結構多い。これはヒマがかりそうだ」

山崎警部が口を滑らせそうなので、下川署長はあわてて記者会見

を打ち切ろうとした。

「まあ、今日のところは、こんなところだな」

「ちよつと待つてください。肝心なことをまだうかがっていません」と地元新聞の森本記者が食い下がる。

「第一発見者は誰なんですか？」

「それはいいない。その子に危害が及ぶ恐れがある」と署長のほう
が口を滑らせた。

「そのー子ですか？」

山崎警部は苦々しい顔をした

交通係係長の吉賀^{とがし}虎子巡查部長と、部下の佐藤メグミ巡查も、初動捜査からそのまま捜査本部に編入されて捜査に加わるようになった。

吉賀巡查部長はベテラン刑事でもあったので当然だとしても、まだ警官になって三年と経たない新米で、刑事試験も受けてない佐藤巡查は、人手が足りないことによる大抜擢であった。

本人は刑事に憧れて警察官になったようなものだから、それはもう大喜び。そのまま口煩い親父とのコンビだけど、加齢臭も全然ノープレブラム。この際手柄を立てて、上にアピールする絶好のチャンスだと、心躍らせていた。

しかし与えられた任務は、ムダに靴をすり減らして、ムダな汗をかき、あらゆる方面に手を尽くしたといういいわけのためのような、業務成績を上げるチャンスからはほど遠い、しょうもない仕事。応援だから致し方ないとはいえ。

管内の病院を隈なくまわり、医師や看護師らに、両足のない患者はいなかったか、湯灌^{ゆかん}の時、脚のない遺体はなかったかどうかなんて、バカな質問をして、「ええ、勿論、脚のない患者さんはいませんでしたよー？ 足の爪を切りましたから、足のない遺体も」とバカにされた眼で見られる。

四軒ある葬儀屋にも同じ間抜けな質問をして、「そりゃあ刑事さん、旅支度^{たびしたく}の足袋^{たび}を穿かせますからね。納棺の際にも、遺族の方々に頭も脚も抱えてもらいますから、はつきりしていますよ。何年も前に遡ってもしかりです。足がなくて、どうやって足袋を穿かせるんです？」と、冷笑される。

そして今度は葬祭場である。制服姿の佐藤巡查が運転するミニパトで、同じバカな質問をしに臼津^{きゆうしん}葬祭場に向かっているのだった。臼杵市及び津久見市内での 病死・事故死・変死 遺体は、すべ

てそこで荼毘に付されることになっている。法律に基づいた手続きはそこで完了するのである。

従って、ここ一年間 長めにみて の「死亡診断書」及び「死体検案書」と死者の員数、「火葬許可証」の交付数と「火葬証明証」これは火葬場が交付、これが「死体埋葬許可証」となる の数が一致しておれば、そしてそれぞれのプロセスにおいて、脚の紛失事故がないとなれば、彼らの任務は完了する。

「火葬場でもなにもなかったら……」と、はりきっていた佐藤巡査も、さすがに気落ちした声でいう。臼津トンネル内の淡い光の中で、彼女の顔が青みを帯びて見える。

「……まあな」

気の毒なことに、刑事志望の夢を抱く乙女は 昨日の大雨で溜まったばかりの池で釣りをしていることにも気付かず、可愛い小鼻を膨らませ、眼を輝かしていたのだ。

大分商業高校を卒業して銀行勤めをしていたのが、ある日漫然とサスペンスドラマを観ていて、女刑事のあまりのカッコよさに、デシククラゲにでも刺されたような衝撃を受けたのだ。

発作的に辞表を職長に叩きつけて、半年浪人してまで刑事に憧れてこの世界に入ってきたほどの入れ込みのようなのだ。

佐藤巡査には半分黒人の血が混じっている。

なので 肌の色は幾分薄まってはいるけど 外見は限りなく黒人ぽい。だけど、日本語しか喋れないし、あらゆる面で日本人的である。少し話すと、すぐに違和感がなくなる。

なぜなら、日本人の祖父母に育てられ、厳しく躾けられたからである、イジメられたり、疎外されたりしないように、色が黒いだけの日本人に成りすませるために、それはそれは手塩にかけて育てられた。

なので彼女は自分に黒人の血が流れているなど、夢にも思わなかった。どうして肌の色がほかとちがって 日焼け色でなく 薄青墨色をしているのだらうという素朴な疑問は抱いていたものの。

そのため、「インド人の黒んぼ」と呼ばわれて　そういう遊びがあった、本当はダルマサンガコロндаというのだけれど　イジメられたけど、並外れた身体能力と、彼らが手袋をした手より大きい手を武器にして、年上の男の子にも負けてはいなかった。

外国人が流暢な日本語を話すと、それだけで吉賀などは親しみを覚える。なにかと面倒を見ているうち、隔意なくなんでも話せる仲になっていた。佐藤も人懐っこい性格で、同じ婦警の吉賀の次女ともたちまち仲良しになった。

佐藤巡査の父親はヒスパニック系アメリカ人。いきなり佐伯市蒲江^えの漁村に現れて、片言の日本語で「アメリカから亡命してきました。xxさんと結婚したい」と、素朴な漁人^{すなどり}に迫ったのである。

無論、陽気な彼ら一流のこんなジョークが日本人に通じるわけがない。「きつと脱走兵か、お尋ね者か、宣教師崩れか、マフィアに追われている者に相違ない」と、家族をあげて反対。

ところが世間知らずの娘はその気になっていた。知り合ったのは勤めていた佐伯市内のデンタルビデオ店。家族の心配をよそに、その近くにアパートを借りて同棲生活に入ってしまったのだ。

その結果、娘は身ごもる。

それを恥じらいながら彼に打ち明けたとたん、アメリカ人はイカのように墨を吐いて、第三国に亡命して行ってしまったのである。その時はもう墮胎の時期を過ぎていた。初めてのことだし、肥満体のゆえに気付くのが遅かった。

大きな腹を抱えて十九歳の娘は途方に暮れる。

そして生まれたのが佐藤メグミであった。

よくあるバカな女の話には違いないが、そんな父母のことを他人にあっけらかんと話す。

黒人を生んでしまった母親は、ショックで放心、海に身を投げてしまったというのだ。「そんなことあるかい！」と吉賀は声を荒げたものだ。

なるうことなら抱きしめてやりたいほどブルーズな話なのに、彼

女にかかったら、軽いノリの、ヒップホップ。

これが新人類というやつだろうかと、吉賀は自分の娘を見ながら思ったものである。こいつは食い意地が張っているだけのやつ、いっつも進化してない。

吉賀巡査部長はもう新たな可能性について考えをめぐらせていた。バカバカしい作業は今日でおしまい。

あの屁こき虫 山崎警部のこと と糞転がし 柳井警部補、彼の上司 らの思うようにはさせない。この俺様を使い走りにしやがってーと舌打ちした。

長いトンネルを抜けると、そこは雪国ではなく、いきなり雄大な石灰岩の山が現れる。

異邦人は息を呑み、エジプトの古代遺跡が眼前に立ち現れたかのような錯覚を覚える。

見慣れている吉賀でさえ、見るたびに気持ちが昂り、晴れ晴れした心持になる。

それを見ながら少し下ったところでユータウンして戻り、トンネルの手前で左に折れて、山の斜面をくねくね上ってゆく。

左手は青江ダムがある深い谷。

その向こうに、むき出しの切り立った白い石灰岩の山肌が、圧倒的な存在感で、青空をバックに日の光りを受けて遺跡のようにきらめいているのだ。ピラミッドはもとより、万里の長城も、石灰石による建造物ではなかったか。

吉賀が子供のころからすると、石灰岩の山は随分小さくなったが、それでもまだ百年は尽きないという。切り出された石灰石は、巨大な管の中をベルトコンベアで海岸のセメント工場などに運ばれる。

そして、そこらに点在する工場で精製処理された石灰石は、大分の臨海コンビナートに、特殊ダンプでピストン輸送されている。石灰石は製鉄には欠かせないアイテムである。鉄鉱石・コークスから不純物を取り除くために。

佐藤巡査の伯母はセメント工場で働いているというし、吉賀の長男は製鉄所の厚板工場で働いている。

石油・石炭と同じく、石灰石 炭酸カルシウム もまた太古の動植物の遺骸がもたらした尊い遺産である。その恩恵は計り知れない。

なのに、人類は、その遺産を消費するばかりで、自らの人体エネルギーを後世紀のために蓄積・循環させることなく、熱エネルギーに変換して、地球温暖化に拍車をかけている。バクテリアや、ウジムシに、ひもじい思いをさせているのである。

そんなバカなことを考えていて、思いもつかなかったある考えが、微弱電気を起こし、老化した脳をかけめぐって、その一部に、熱を帯びさせた。

おりしも山道は緑葉に覆われて涼やかであつた。吉賀は車の窓を半分開けた。熱気と一緒に気持ちよい風が入る。

親父臭が気になつてもいたのだ。小便の切れが悪いし……皮膚の毛穴からも加齢臭が漏れ出ているというしー情けないことに、ビニール袋に入つた生ゴミとたいして変わらない存在に成り果てている。

そこへいくと若い女の匂いはいい。若葉の匂いがする。森林の匂いと一緒だ。癒される。

「……これが終わつたら、あたしどうなるんです？ ルーチンワークに戻るんですか」いい匂いがきく。

「いいや、そうはならない。おまえさんは、明日から私服を着て、覆面車で、わしと行動を共にすることになる」

「えー。本当ですか！」佐藤巡査はうれしそうな声を上げた。「やったあ！」

「頼りにしてまっぜ、相棒！」

ミニパトは勢いよく急坂を上りつめて、タイヤをきしませながら葬祭場の駐車場に入る。

車がいつぱい停まっているところをみると、火葬が幾組かあるの

だろう。煙突からは煙が出ているし、待合室に喪服を着た黒い人影がうごめいていた。

さすがに風が通る高いところにあるせいか――以前は臼杵の柳原交差点下の谷間にあった――人が焼ける酸^{さん}ばいにおいが鼻を突くことはない。

ここには何度も足を運んでいる。この歳になると、まわりがバタバタ死んで逝く。つい二ヶ月ばかり前にも、嫁の兄弟氏がここで茶毘にふされたばかりだ。

だからもう係員にたずねるまでもなく、火葬現場の内容はわかっている。わかつていいるのだが、宮使えの悲しさ、報告書を書くために、形通りのバカな質問をしなければならぬ。

「順番待ちの時、棺^{こつぱん}は？」事務所の中で、ふたりの係員に向かって、吉賀がきく。

「炉が塞がっている時は、控えの間に。炉は三つありますけん、まずそういうことはないですけど」顔馴染みの、年配のほう^{ほう}が答える。頭蓋骨が透けて見えそうな透明感のある顔。

「何分か、何十分か、何時間か、控えの間に、棺だけ放置されることは、あり得るんだね？」

「それは炉が塞がってなくても、何分何十分単位ならあります」係員は怪訝な顔で吉賀を見る。「それがなにか？」

「いや、いいんだ」その間にシコシコ遺体の脚を切りとるやつがいなかったかどうかなんてきけたものではない。「部屋に鍵は？」

「カギはかけてません」

「じゃあ、誰でも、誰にも気付かれずに、その部屋に出入りするとは、不可能ではないわけだ」

「ええ……まあ」いよいよ、不審な顔をしている。

「あんたら、棺桶の中の遺体を見たりすることはあるのかね？」もうひとりの初めて見る顔 若いほうを見てきく。こっちはのつぺりした顔の実直そうな青年。髪も染めてない。「近頃じゃ棺に止めクギは打たない」

「そ、そげなこと！」青年は憤慨したような声を上げた。なにか勘違いしているようだ。ご法度の副葬品が入れ込まれてないか点検するのかどうかたまたまのくに、くすねるとでも、とったか。「さ、最期のお別れに、棺の窓を開けて遺族に見せるだけですよ。——ねえユキさん」

この間、佐藤巡査はせつせと手帳にメモっている。鼻の頭に汗の玉を浮かべて。

再び吉賀は、年配係員のほうを向いて、きいた。

「ところで、仮に両足のない遺体を茶毘に付した場合、お骨拾いの時、どうだね？——質問の意味はわかるね」

「わかります。事件のことですね。そりゃあ、わかりますよ、刑事さん。脚の骨があるか、ないかぐらい」

バカな質問だった。

バカついでに、「素人に？」と、愚問を重ねた。

うんざりしたように年配係員は腕時計を見て、「もうあと二十分もすれば、一号炉が焼き上がりますけん。見ていきますか？」といった。

「いや、いい」と吉賀は恥じて、照れ隠しにどうでもいい質問をした。「いろんな珍しいものが焼け残るんじゃないのかい。家の母女うぢの時は、膝の人工関節が出てきた。野球のボールよりちよつと小さな金属製の半円球なんか。大腿骨の一部も焼け残っていて、骨にボルトがさしてあるんだ。あんたら磁石で金属類を探しているね」
「もうクギ類はないですけどね。確かに信じられないものが出てきますよ。三十センチくらいの長さのハリガネがあつた。ちようど腹部の辺りに。金属類はご法度ですけん、副葬品ではない。体から出てきたのは間違いないですよ」

「ほう」

「ハサミが出てきたと、きいたこともあります。小さい鼻毛カッターくらいハサミ」

「あまり変なのが出たら、我々に報告してもらいたいね。——お宝

は？」

「金歯なんかは、昔はあつたけど、今はもうないですね。指輪も。お守りの中にこっそりガラス製品や、そういうものが入れ込んであることがありましたけど」

「まだ生きているうちから、金歯を抜こうかどうか相談している輩がいたりして。金目のもんは遺族が剥ぎ取ってるんだろうねえ不景気だから」

「ははは」とガイコツが嗤うように年配係員は笑った。

「ところで、あんた方は、七月二十六日の午前八時半から九時の間はなにしてたかな？」

「なんですーそれ？ ぼくらを疑ってるんですか！」若いほうがまた憤慨した。どうも一々過剰反応するやつだ。

「いやなに、これは我々の常套句。気にせんでくれ」

「わたしは勤務中でした。調べてもらえば」

「君は？」

「ぼ、ぼくは有給休暇でしたから、アパートにいましたよ」

「なにしてた？ 有給とってまで」

「CD聴きながら、寝転んでましたよ。悪いですか」

「悪かない。悪かないーけど、テレビかラジオのほうがよかったかな。それを証明する者は？」

「いませんよ。窓辺の小屋根の上に野良猫が一匹いただけで」

「その野良猫はしゃべれんのかね」

ふふふつと、佐藤巡査は思い出し笑いをして、いった。「係長さんて、ほんと、怖い人なんだか、クソ真面目なんだか、お調子者なんだか……」

ミニパトは帰途についていた。今度は西日に輝く石灰岩の山を右手に見ながらの、下り坂である。

「気に入ってくれたかい。なあに、いついかなる時にも、ほんのちよつとの、心の余裕を持つように心掛けている」と吉賀は咄嗟に出

たジョークに満足しながらいう。「なかなかそうはいかないけどな」
ジョークは気持ちのゆとりの現れである。またゆとりをもたらすものでもある。洒落たジョークを操るアメリカ人は、経済的にも余裕があるとーたえ賭博で儲けた金であってもー独り占めしないで、その一部を奨学金や恵まれない者への施しとして、しかるべき機関に寄付しようとする心の余裕を持っている。

あの文化は見習わなきゃと吉賀虎子は思っている。余った爆弾をやたらばら撒く悪い癖もあるけど。

日本人では中曽根元首相の「日本列島不沈空母発言」は秀逸なジョークだった。同盟国宰相の頼もしい洒落たジョークに、レーガン大統領及び 日本を属国のように思っている アメリカ国民を大いに喜ばせて、株を上げた。

ついでに本場のアメリカン・ジョークのひとつでも披露しようかと、レーガン大統領の爆裂ジョークを思い浮かべたが、やめた。あの時以来、佐藤メグミの前では「アメリカ」は禁句にしていた。

あれで吹っ切れたのかと思っていたが、カーラジオからジャズなんかが流れてくると、唇を引き結んで、遠くを見るような眼差しで黙りこくってしまう。ヒスパニックの陽気さは消え、らしからぬ、物静かで、耐え忍ぶ女の表情が、その顔に張り付いていた。

その辺はまだまだナーバスなようだ。

「事情聴取の時は相手の眼を見るんだ」吉賀はいった。「メモは頭の中に書く」

佐藤巡査は、今は石灰岩より輝いている顔を吉賀に向けた。古きよき時代の女優のような濃い眉を片方上げて。

「復習もしない成績の悪いやつほど、熱心に黒板の字を一語も漏らさず書き写そうとする、消されないうちに。成績のいいやつは、涼しい顔で教師の話に耳を傾けながら、それを頭の中に書いている」
吉賀は先の口だった。まかれたエサに群がって、ひたすら頭を下するニワトリの組だった。

教材用のテキストを、そっくり黒板に書き移して教えたつもりで

いる教師と、それをまたご丁寧にノートに書き写して覚えた気でいる生徒——という滑稽な構図が見えてきたのは、大人になってから。この世界に入ってからといってもいい。

最高の教育を受けて、頭がいいと自他ともに認める連中が——確かに並外れた記憶力と理解力を備えて君臨しているが——猿よりも知恵がない。そんなキャリアや準キャリをうんざりするほど見てきた。自分は頭がいい——とうぬばれているから始末が悪い。たまたま要領がよかっただけなのに。

佐藤巡査は小鼻を膨らませて、「どういう意味ですか」といった。「いいか、佐藤。相手の表情、眉目、顔面筋の動き、小皺一本の動きも見逃すな。それから手だ。内心の動揺はきつとそれらの動きとなつて外面に表れる」

また講釈が始まつたかと、佐藤巡査は頭を横に小さく振つた。年寄りには理屈っぽくて嫌だ。いう通り、彼女も先の口だった。だが、それは親父のヒガミというものだろう。どうしようもなく、頭のいい者はいるのだ。

「これは動物も同じだ。ストレスを受けると、猿は頭や脇の下を掻き、猫は寝た振りをする。尾っぽの先を持ち上げて、微妙に動かしながら。犬は——犬は口からケツの穴を通して向こうが見えるくらい単純なやつだから、思ったことは全身で表わしてしまう」

（——もう！）

「人間様はだな。ウソをつく時は、下手な役者のように所作がぎこちなくなる。手を動かすにも、意識して動かす。猿と同じだ。あっちこっち、触る。掻く。顔は心と反対の動きをしようとする。目玉は動いてあたりまえなのに、あえて動かさないようにする。それも変だと思えば大袈裟な言動で誤魔化そうとする。ひった張本人が屁をあげつらうように」

「わかりました。今度からそうします」

「相手にプレッシャーをかける意味もある」

「はい。——で、係長はあの人たちから、なにを読み取ったんです

か？ アリバイまできいて」

「うん。あの年寄りのほうはーあれはもう二十年以上も前から見かける顔だ。歳はわしとあまり変わらんだろ。あの男が急に思い立って、遺体の脚をちょん切り、仏舎利塔に供えたとは思えん」

「アリバイも主張していますしね」

「――アリバイは崩すものだぞ、佐藤。ミステリー作家と計画的犯罪者は、まずアリバイから先に立てる」

「はい。はい」

「あの若いほうだ。去年転職してきたといったな。あいつはなにの後ろめたいことを隠している」

「そうは見えなかったですけど……真面目そうでしたよ」

「変質者だからといって、特別な顔をしているわけじゃない。若い女性を四年間に三十人以上も犯して殺し、死体も犯して切り刻み、切り取った頭部も日を変えて犯した、あのテッド・バンディーなんか、警察を手玉にとるほど頭がよく、見てくれも知的でハンサム、口も巧い、女にモテルタイプの青年だった」

「いやーッ」佐藤巡査は顔をしかめて、吉賀巡査部長がそのテッドであるかのように、体をよけた。その拍子に車もふらつく。「ちょっとやめてください！ 気色悪い」

「あははは。こりゃあ、例示が少々どぎつかったな。そんなのはまだ可愛いほうなんだが。アメイーいや。だからといって、あの係員から変質者の二オイを嗅ぎ取ったわけじゃない。なにか後ろめたいことを隠しているような気がするだけだ」

「でも、一般の人間だって、いったたように、遺族に混じって部屋に出入りできたんでしょう？ 火葬が二組以上あれば、もう誰がどちらの遺族かもわからないから、怪しまれない」

「それだと、お骨拾いの際に、係員がすぐに気付くさ。そういつてただろう」

「ああ、そうかあ……」

「係員なら、遺族を呼ぶ前に、ほかの骨で適当に誤魔化せる。おま

けに、遺体が控え室にどれくらの時間放置されているかもーいやいや、その時間さえ意のまま。鍵をかけて、誰も入ってこれないようにもできる。なにを持ち込み、なにを持ち出そうと、疑う者はいない」

「なるほど。読みが深いんですね」

「現実味は薄いけど、可能性が少しでもある限り、それを追求するんが、わしらの仕事」

「こんな場合のことを、いつてたんですか」

「いや、いや。これは別。思ってもみなかったこと。あれやこれと、さて、忙しくなるぞ」

「まかしといてください。ボス！」

彼らが捜査本部に帰還したのは五時過ぎだった。

山崎警部と柳井警部補が顔を突き合わせて話し込んでいた。

ほかにはパソコンに向かっている事務職の女性がひとりと、遊軍がひとりいるだけ。

正面の長机の一角に山崎警部が座っており、柳井警部補は、その前に椅子を持ってきて、背もたれを抱くように座っていた。

女性職員は側面の長机でパソコンを操作している。遊軍の刑事がその横に立って、プリンターから出てくる書類を手に取って見ている。

彼らの背後には白いボードがあり、その白いボードには、現場写真やなんかがベタベタ貼ってあって、ゴチャゴチャ不審人物名やら不審車両名やらが書き込まれている。それにバツテンやら線引きによる消し込みやらがなされていた。

苦戦しているのが一目でわかる。遺棄遺体の身元がわからないというちは、事件の構図さえ見えてこない。

不審人物で生き残っているのは、足立明君が目撃した人物と、小学校の校庭で遊んでいた小学生らが見たという白衣を着た男だけになっている。品川薫老人は早々に名前の上にバツテンがつけられていた。

彼のリュックの中味は、彼のお宝の黄色いヘルメット 安全帽であつた。造船所に勤めていた頃のものだが、彼にとってそれは天皇陛下から拝領の、命より大事な鉄力ブトだった。リュックにゴム長が入るほどのキャパはなかった。

それでも線引きで消されてないところをみると、まだわずかな疑いが残されているのだろうか。脚が入ったゴム長を両方に抱えて、天使のような笑みを振りまきながら歩いている力オルちゃんの姿を佐藤巡査は思い描いてみる。

（バカバカしい）と思う。

足立少年の描いた不審人物像は公開されたけど、それについての目撃情報は皆無だった。

捜査会議では、少年のウソか、マコトかで、白熱の論議を呼んだ。マコトなら、該当者が名乗り出ないというのはおかしい。それが遺棄者である可能性が出てくる。

しかし、そこで少年を疑えば、ゴム長靴が置かれた時刻も疑われてくる。彼しか証言者はいないのだ。それは早朝からすでにそこに置かれてあったのかも知れない。夜半から。

だったら住宅地なのに目撃者がいないのもうなずける。午前八時半から九時に至る時間帯に、住民の誰にも見かけられなかったというのは、ちよつと考えにくい。

そのほうが理に適っている。危険を冒してまで日中の人が動く時刻に遺棄する理由があれば別だけど。そんな危険を冒す必要がどこにあるう。

「のや、おまえらもそう思うだろう」と、署長が論議に駄目を押した。大勢がうなずく。

これに対して後方から、「足立君が、ありもしないウソをいうとは思えません」といった者がいる。「目ざといカラスが、そんな時刻までご馳走を放っておくでしょうか」

今いったのは誰か？ というような顔で、署長はゾウガメのように首を伸ばした。捜査員らも後ろを振り向いた。

そこには署長と同じ青空のようなシャツを着た佐藤巡查がいた。

佐藤は立ち上がった。

「あの時刻は、ちょうどエアポケットのようになっていたのではないのでしょうか。今は共稼ぎが多いですから。大人はみな勤めに出払ってしまつて、老人と子供だけになっていた」

「君は？」

「交通係の佐藤メグミです」

「それはわかっている。君らは街の警戒にあたつてなきゃならんは

ずだぞ。どうしてここにいる」

署長に睨まれて、佐藤メグミは粘土のように光沢を失った顔で、立ち尽くした。恐れ多くも、署長様に反対意見を述べてしまった――ばかりか、捜査員の大半を敵にまわしたようなもの。

「自分が呼んだんです」吉賀巡査部長が中ほどの席から弁護の声を上げた。「自分が免停中なのは署長もご存知でしょう。運転手がいるんです。相棒ですから、いろんなことがわかっていたほうがよいと思ってですな」

「トラちゃんか。そうだな。あんたはもうPCの運転はせんほうがいい。あんたが事故を起こす度に、わしの寿命は一年は縮まる。道端の地蔵様を突き倒すくらいですんでいるうちはいいが――」

ここでドツとみんなが笑う。吉賀は、プライベートでも、バックしていて前隣の家の門柱を押し倒しているのだ。本人は娘の車のオートマのせいになっているが。

「そうか。いい運転手を見つけたようだな」署長はペットボトルの深層水をおおってから、「続けなさい」と佐藤にいった。

「ですから、遺棄者は老人と子供に警戒されない人物ではないかと思います。わたしたちは、不審な人物を見なかったかどうかきいたわけですから。普段見慣れた人物なら。――いいえ、尊敬、信頼されるような職業の人物でも――たとえば教師、医者、我々警察官」

「おいおい穏やかじゃないな」

「ほかにもいっぱいあります。市の職員だってそうです。郵便局員や銀行員、スーパー店員……」

「土地勘があることから、見慣れた人物というのは、いえてるなあ……」署長は感心した様子だ。「リュックは――リュックを背負った人物、ということで聞き込みをしたんじゃないのか」

「リュックはもうよして、目立たないほかのものにしたかも知れませんが。身なりも普段通りに」

「遺棄者は身元を隠すための扮装を凝らしていた。けど、少年に見られてしまった。遺棄しようとしていた矢先かも知れない。だから

車に戻って、装いみせおを変えたということだな」

吉賀が佐藤を援護した。

「素面をさらけ出してか。普段のなりで」少年の証言が事実だとすると、そういう考えも成り立つには成り立つ。「——ふーむ」

署長は腕を組み、今思い出してもおかしいくらい、みんなも佐藤メグミの推理に考え込んだ。

しかし、「ひとつ間違えば重罪で監獄ゆきだぞ」と山崎警部はつぶやき、捜査主任の柳井警部補は「あり得ん！」といった。

だが臆面もなく、佐藤メグミはなおも続けた。

「それになにも、どうしてもその日に遺棄する必要もなかったんじゃないかしら。誰かに出会ったらやめればいい。本当は足立君に目撃された時点でそう思ったかも知れない。でも、目的がつまらないことで頓挫した時って、悔しいじゃないですかあ」

みんな啞然としていた。吉賀は（それはどうかな？）と思う。

「でも、運よく誰とも行き会わず、見かけられもせず、現場までやってきた。そして遺棄した。わたし、あの時間帯に、三度小学校前から実験して、三度成功しました。遺棄できたんです。

ところが帰りはそうはいきませんでした。帰りには小学生の女の子ふたり組に見られてしまいました。観光客にも。あの近くには、成城から移転した野上八重子の家がありますよね。『海神丸』を書いた文豪の家を見ようと、ときたま観光客がやってくるようです。

二度目の時には、帰りに品川老人とクランクのところで出くわしてしまいました。家族にきいたら、いつときひかえていた散歩をまた始めたんだそうです。

——もしかして品川老人は、遺棄者と出くわしているかも知れませんが。素顔を見ているかも知れません。最初はゲーム感覚で始めたことであっても、遺棄してしまっただけからは、もうそういうわけにはいきません」

素人の大胆な推理が、ゲーム世代ならではの 手詰まりだった捜査に新たな方向性を与えた。

早速その方向から聞き込みのやり直しがなされた。

もう一度品川老人にもアタックした。足立少年が描いた絵を品川老人に見せて反応を見たのである。老人は奥まったところから、トビ色の円らな瞳でじつと見入っていたが、フクロウのように小首をコクンと傾げた。

それをどう解釈したらよいのか、遺棄者が装いを変えていたと取るべきか、全くそんなものは見てないと取るべきか。悩ましいところであった。

あらたな聞き込みの効果はそれなりにあった。

三人の不審人物が浮かんた。

うちひとり、その界隈に住んでいる二三才のプー太郎。その日も同時刻頃そのあたりをうろついていた。けど、これはすぐに嫌疑が晴れた。

もうひとり、これはとんだトバッチリを受けて、下着泥棒が御用となった。三十七歳のシロアリ駆除業者の営業マンで、社名の入った軽四を小学校グラウンド脇に駐車して、同じ日の同じ時間帯に、仕事と趣味を兼ねてその界隈を物色して歩いていた。

それを近くの住人が覚えていた。捜査員が大分市南津留の会社を訪れてご当人に職務質問した。拳動不審が見て取れたので、そのまま住居のアパートに案内させ、部屋に踏み込むと、押入れの中は女性の下着の山だった。

三人目はまだ確認がとれてないけど、薬剤師のような白衣姿の長身の男でメガネもマスクもしてないけど、長髪に隠れて顔はよく見えなかったと、校庭にいた小学生らはいう。

白い普通車でやってきてー小学生らの目撃証言なので、車種や排気量はわからないー広いほうの道路に駐車したことだけは確かなようだけど、それからどうなったかわからないという。時間もあやふやだ。

帰還した吉賀と佐藤巡查を見て、「お疲れ！」と山崎警部が声を

かけた。柳井警部補はニヤニヤしている。彼がさいわいなのは、自分の後頭部が見えないことだ。もじやもじや頭のそこだけ、崖崩れのように大幅に禿げている。

それが彼のビジュアル的価値と品性を著しく下げていたが、本人がまだ女に充分モデルと思っているのに、端からとやかくいう筋合いのものではないから、みんな見て見ぬふりをしている。

山崎警部のほうは苦味走つたい顔をしている。欲をいえば、もうひとまわり顔面が小さければ、それはもう申し分ないのだが。なにしろ顔がデカイ。だから声も太く大きい。

人のことはいえない吉賀は、山崎警部の前に行き、「一応、帳尻は合いました。あとで報告書で」という。

「ご苦労でした」と柔和な顔で手を揉みながら警部は労をねぎらう。口を横に開いて歯の噛み合わせを見せるのは彼の癖であり、他意はない。それと手揉みはセットになっている。

「それじゃあ、ゴム長のほうの応援を願いましょうか」と柳井警部補は吉賀を見ないでいう。「ねえ、課長」

吉賀は山崎警部が口を開く前に惘然としていった。「きいてなかったのか。一応——といったぞ」

佐藤メグミは、柳井警部補の後頭部にポツカリ開いた、アワビのような形をした地肌が赤く染まるのを見た。

「というと？」ムツとした顔を吉賀巡査部長に向ける。

まがりなりにも俺のほうが階級は上だし、上司だぞという怒りが露わである。正確には元上司。今年の春の移動で吉賀は刑事課主任から交通課係長になった。

「法的手続きがまだすんでねえ場合が残っちゃうのじゃ、バカたれが」

「どついう意味か？ そら？」

「入院も通院もせんで、自宅療養しよる者がおろつが。その中には定期的に往診を受けている者がいれば、不定期に往診を頼む者もある。中には一年以上、往診も通院もしとらん寝たきりもおるじゃろ

う。そげな者が死んだらどうなる？」

「病院の先生を呼ぶわい。死亡診断書を書いてもらわにや、火葬許可証が下りん。まあ、一年以上も医者に見せちよらにや、変死や事故死と同じように、うちの管轄になるけど」

「どっちにしてん、医者に診せるわな。医者を呼びもせず、役所に届け出もせんじやったら」

「——なにや？」

「死亡から七日以内に届け出らにやならんことになつちよるが、そんな法的手続きを怠つち、ミイラになりかけちよるのに、まだ死んじよらんとか、それが定説じやなどと、屁の舞^もうたようなことをいう輩がおつたろうが。」

それとか、年金の給付が打ち切られるのを恐れるあまり、遺体を押入れに隠しちよる者もおつた」

「——おお！」山崎警部が声を上げた。「そうか。おるおる。おるなあ……葬式代がないからと、勝手に埋葬した者もおるわ」

佐藤メグミもうなづく。

「防臭・防腐剤が手軽に手に入る時代ですからね。出生届けが出されない無戸籍者が結構いるくらいです。死亡届けがなされん戸籍上の幽霊も、おらんとも限らんですよ」

「その辺から変質者が出たか！」

「そげな者んまで調べ出したら、きりねえで課長」

「それに、火葬場の兄ちゃんもなんだか怪しかった。これも調べてみると。応援なんかしどころか。手はなんぼあつてん足りん。カカシの足も借りてえぐらいじゃ。おまえんとこの兵隊を少しまわせ！」

「あーもうすかん！ あげんこといよなので、課長」

「うーん」山崎警部は腕組みをした。「もっと手勢が欲しいなあ……かといってこれ以上割いたら、通常業務に支障が出る。本部に応援を要請できないか、署長に掛け合ってみるか」

「そら、ムダでしょう。署長の嫌いな本部のケツの青いのが、大けな顔して乗り込んでくる。しかも飲み食いの経費はこつち持ち。遺

体損壊・遺棄程度の落ちだったら、格好がつかんことに」

「ーそげんこといよっち、バラバラ殺人だったらどげえすんのか！」

「そうだな。署長はあれで負けず嫌いなところがあるからなあ……。手勢で、優先順位をつけてかかるしかないか」

本部が乗り込んでこないのは、ガイシャがまだ生きているのか死んでいるのかわからないからである。ハッキリ殺人事件となれば当然、特別捜査本部が設置されて、本部刑事部主導になる。所轄は手足のようにこき使われる。今や県警本部はこっちの様子をじっと見守っているのである。

吉賀と柳井は睨み合っている。

佐藤メグミはこの仲の悪い兄弟が、同じ警察署で顔を突き合わせているのは不幸なことだと思う。弟の柳井警部補が婿養子に行く時にひと悶着あつて、それから仲が悪いのだと、吉賀の娘の佐代子にきいたことがある。

詳しくはいわなかったけど、相手の女性を取り合ったとかいう話であつた。

そうこうしているうちに、続々と捜査員が帰還してきた。二十時まで帰還が原則だ。

みな疲れた顔を警部に見せて、決して喫茶店などでサボってなかったことをアピールした。

柳井班の小太りの巡査部長らも、日焼けした顔をテカらせて帰ってきた。

二十時からは署長抜きの捜査会議が開かれる予定だった。

佐藤はそれまでの時間を、報告書の作成と、通常業務の仕掛かりに費やした。市役所駐車場内での当て逃げ事案をひとつ抱えていて、あと一歩というところで立ち往生している。

会議は十分送れて始まり、画期的な展開を見せて、二十一時半に終わった。

前に続く

寮に帰った時にはもう二十二時半をまわっていた。

食事は会議が終わってから弁当が支給されたので――裁判官や検察官なんかは冷酒でしめるところもあるようだ。――あとはシャワーを浴びて、ビールを飲んで寝るだけ。

このところそんな親父のような生活をしている。会議がなくても、帰還が遅れると、事務処理やなんかで、すぐにそれくらいの時刻になった。

それが刑事の常態であり、昼夜を問わない、不規則・長時間労働の刑事に、女が進出しにくい要因のひとつであった。

それでもメグミは満足だった。好きな仕事ができる充実感と、心地よい疲労感に、喉越し爽やかな冷たいビールは最高だった。大人になったという実感が湧く。

出会いがなく、彼氏はまだいないけど、親 彼女の場合祖父母と、地元から離れた開放感だけで、今はまだ充分満足だった。友達はいるし、スイカもひとりで丸ごと食べれるし。

あの口煩いジジ・ババからはもう電話も滅多にかかってこないのは有難い。公務員になって、寮に入ったこともあり、まわりは堅い人間 と彼らは思っている。ばかりなので、安心したのか、死にかけているのか。

思春期には、インターネットの競売にかけて、ふたりとも売り飛ばしてしまいたいくらいだった。実際イギリスでは、憐れな祖母が十歳の孫娘に鬱陶しいからと、オークションに出されて、危うく落札するところだった、競売元が中止しなければ。

台風で持ち船が壊れたり、怪我をしたりする度に――とにかくしょっちゅう怪我をする人だった――借金と、酒量を増やした祖父は、将来を悲観していたし、祖母は祖母で、“女は男で決まるんだ”と口酸っぱくいい続けた。

祖父の焼酎をきらすことは一日たりともなかったけど、船のアブラはしょっちゅうきらせて、漁に出られない日が多く、その上、やれ日が悪いだの、低気圧が不穏な動きをしてるだの、転こけて膝のサラをちち割ったのだと、とにかくなんやかやいって漁に出るのを勿体いぶる漁師だったから、「海にや魚はなんぼでんおるわい」といいながら昼日中から酔いたくれている祖父だったから――家は蒲江一、いや大分県一の貧乏だった。

――「ハラ減った。ジイちゃん、メシが食いたい」「メシは昨日きによう食ったろうが」「みんな毎日、朝・昼・晩と食よので」「魚を食え。魚なら防波堤からなんぼでん釣れる」「魚はもう飽いた」「ほならジイジが山芋を掘っちきちやる。タマゴかけとろる汁はうめえぞ」「あげんツルツルした歯ごたえがねえのは、食うた気がせん」「バカんじょうい！　あとから腹がふくれちきち、しまたつかんのじゃが」

というのが、幼い時分の、ウソのような本当の話だった。釣り船をやるようになってから少しは楽になったけれど。

祖母は祖父がいないところという。「女はのう、男で決まるんど。これでもわしは女学校を出ちよる。貧乏しよるんは、みんな、あんジイのせいじゃ」「ほんならなんでわかれんかったん？」「――のさつちよんのじゃ。運命ちゆうやつは、どげんもならん。それが出来りや、とうに、ブイをつけち沖に流しちよるわい」

年老いた祖父母のことを考えると、やはり心が痛む。股の間から後ろが見えるほど腰が曲がった祖母と、傷めた脚を引きずるように歩いて釣り船を出す祖父。ふたりとももう平均寿命を超えている。あと何年動けるだろうか。

――そこから逃げるように出てきたのだ！

アルコールによる浮揚感に揺らめきながら、メグミはノートパソコンを立ち上げた。

今日はまだ眠るわけにはいかない。捜査会議によって、新たなピースが二つ加わったからだ。

『メモ帳』を開いて、書き加える。

一、科捜研の微物検査により、ゴム長に付着していた土の中から純度九十六パーセントの炭酸カルシウムを抽出。つまり、石灰石の粉が混じっていたということ。ゴム長靴は太古の珊瑚の化石を踏んでいたのだ。

一、大分大学・医学部による 組織や細胞を調べる 病理検査でも、死因は特定できず。その代わり、かなり高度なエバーミング死体防腐処理 が施されていることがわかった。

本部に出向いていた連中によりもたらされた以上の報告により、ゴム長の出所確認範囲がぐつと絞られて喜んだのも束の間、ききない『エバーミング』とかいう高度な防腐処理によって、遺体の長期保存が可能なることから、所在不明者の時期的範囲を更に広げる必要が生じた 下手すれば何年も前に遡って。

インターネットで検索してみると、『エバーミング』とは、死者の体内からの防腐処理で、死者復活を教義とするキリスト教文化圏特にアメリカ・カナダ・イギリスなど土葬の国では一般的な行為であるらしい。

共産圏では、指導者の遺体を生前の姿のまま永久保存するために用いられているとか。驚いたことに、レーニン廟びやうにいけば、いつでもレーニンに会えるというのである。

現代版ミイラであろうかとメグミは思った。

早い話が、血管から血液を抜いて防腐剤を注入し、魚のハラワタを抜くように、腹部に穴を開けて内容物を吸引・除去して、代わりに防腐剤を注入する。定期的にそれを繰り返せば、半永久的に遺体の保存が可能なのだという。

わが国は、遺体を傷つけること自体違法だし、火葬でもあるので、そういう文化はない。外面だけの防腐処置だから長持ちはいらない。

そのように、エバーミングは高度な技術を要するので、医師など

ごく限られた医療関係者か、葬儀関係者の中でも、専門技術を持った者の関与が疑われる。

遺棄遺体の身元はともかく、おぼろげながら犯人像が形を整えてきた。

会議の席では、「それなら、まだほかのパーツが出てくる可能性がありますね」と若い捜査員がいった。「いつペン、こつちから刺激してみたらどうでしょうか」と、それに続いて別の若い女性捜査員が提案した。「そんな高度な技術を持った者なら、きっと、インテリの、自己顕示欲の強い――その半面ちよつとしたことにも傷つきやすいタイプの――社会病質的^{ソシアルパス}な愉快犯が考えられます」

「たとえばどんな風にだ？」と警部がきけば、その者はこういった。「記者会見で発表してみたらどうでしょうか。脚が入ったゴム長が放置されていた経緯を。どうせ頭のいかれたゲームオタクかなにかですよ。日中に、堂々と放置したことを持ち上げてやり、自尊心をくすぐっておいて、もうそんなゲームに賭ける度胸はないだろうと、こきおろす。遺体も腐敗してしまったただろうからと、エバーミングの事実気付いてないことに満足させ、遺体の身元確認に全力を挙げている――とかなんとかいって」

「上げたり下げたりか。ふーむ……ゲームねえ。どうも君ら若い者人にはついていけないあ。トラさんはどう思うね」と吉賀巡査部長にきく。

「面白いじゃないですか。それが当たっておればホシは、くそう！と頭にくるだろうし、ハズレていればいたで、調子に乗ってまたなにかのリアクションを起こすかも知れない」

（――いいぞ、親父！）とメグミは心の中で叫んだものだ。

捜査会議は吉賀巡査部長と佐藤メグミ巡査コンビの独壇場だった。メグミはそのことを思い出しながら心地よい眠りに着いた。

翌日、佐藤メグミ巡査と宮崎芳樹刑事の提案が受け入れられて、下川署長が午前一〇時の記者会見で次のような発表をした。

「大胆にも遺棄者は、陽が上がるのを待ってから、住宅地において誰にも怪しまれずに、素面を晒しさえして、堂々と遺棄するという危険なゲームに成功した。

だけでもうそんな危険なゲームはできないだろう。ふいを突いたからできたことであり、また、途中で引き返すこともできるという安全フレーム内でのゲームだった。

よほどのバカでない限り、もうそんなリスクを負うゲームはしないだろうし、手持ちのカードも、もはやドライアイスによる冷凍保存の限界を超えている。腐敗してしまっただろう。

我々は遺体の身元を突き止めることに全力を挙げている。身元さえわかれば、自ずとそこに事件の構図が見えてくる。歪んだ悦びに浸る切断者及び遺棄者——我々は同一人物と見ている——に出会える。所在不明・行方不明者の中から、きっと見つかるだろう。

彼はあまりにも多くの情報を与えてくれた。皮膚が接触したものなら、なんでもよいくらい微細なもので充分なのに。現今の科学捜査を随分甘く見たものだ。

——やがて彼は、我々の足音に怯えることになるだろう」

それはそのまま活字になり、あるいは放映された。

それから三日間の沈黙があった。

そして突如、地元紙の『別大新聞』に犯人からのものと思われるメッセージが送りつけられた。

午前五時ジャストに、新聞社のファックスがカタカタとそれを排出したのである。

それにはこう書かれてあつた。

《所与の条件から吾人^{われら}を求めよ。されば、得られん。世界の分裂を！ 神の影がサタンであることを知るだろう！

一、官憲らは、早急に馳せ向かうべし。カラスが朝食のセミを啄^つばんでいるうちに。ソレは上野の森と知れ。

一、官憲らは、早急に馳せ向かうべし。魚が啄^つばんでしまわぬうちに。ソレは十頭の馬がクツワを並べる先と知れ。

諸子らは職能の限りを尽くしてこれに当たらなければならない。なぜなら、これらはまだほんの序章に過ぎないのだから。

愚かな民の蒙を開くのに、他にどんな方法があろうか。

——老翁も囁目せよ》

大胆にも手書きのそれは、新聞社の当直者の手によって、ただちに県警本部と、臼杵署に転送された。

臼杵署では捜査員らに非常召集がかけられ、顔を突き合わせた捜査員らは、「上野の森」とは大分市内の「上野墓地公園」のことではあるまいか、という結論に達した。あとのひとつは難解だった。

県警本部はそれより若干早く——その時点で時刻は六時をまわっていた——通信司令室から緊急指令が発せられた。

市内に緊急配備が敷かれると同時に、中央署管内のパトカーがいっせいに上野墓地公園に向かった。

勿論、所轄刑事や、本部・捜査一課の刑事らも覆面車に乗りわけて向かう。

墓地公園入り口の広まった道路には、そのほか鑑識車や捜索隊を乗せた大型車両が続々と集結した。

警察犬を先頭に、長い棒を持った捜索隊員らが墓地公園内に分け入り、わずか三十分足らずで、公園南側のカシやシイの林の中で――

―美術館から本光寺に向かう細い道路の北側――カシの枝にぶら下がった、ふたつの赤いミカン入れ用の網袋を発見した。

網目を通してはつきりと、人間の肘から下の腕が見えた。カラスのざわめきと、犬が吠え立てる中で、それは揺れていた。

臼杵ではあっけなく原臭を見失った二頭のシェパード犬だが、今回は見事に任務を果たした。

表彰ものである。オスのキツチョム号 六才 はすでに一度、未帰宅老人を発見する手柄を立てて、署長賞を頂いている。メスのオヘマ号 五才 にとっては今回初受賞になるかも知れない。

だけど、彼らにはまだ仕事が残っていた。ホシがどういう経路でそこまでやってきたのか、逆コースを辿って追跡するのと、そして鑑識班が採取を始めた公園内のゴミー空き缶やら、タバコの吸いさしやら、汚れた手拭い、軍手の片方、ちり紙、コンドーム、その他諸々――の中から原臭 ゴム長靴に付着したにおい と同じ臭いを探すこと。それを探し当てたら本部長賞ものである 上等の肉の缶詰がひと抱えほど副賞としてもらえる。

一方では、ファックスの発信元が突き止められ、大分市片島の住宅を下郡交番の巡査長以下三名が急襲。あとから駆けつけた中央署の刑事二名と大家とで、施錠されている玄関の鍵を開けて入った。中には誰もいなかった。けど、ファックス付の電話機があった。大家の話では、借主は福岡の企業で、営業マンが出張してきては滞在しているという。

その企業と連絡が取られ、やがて鑑識班が到着して七時には鑑識作業が始まる。

二番目の「十頭の馬がクツワを並べる先」――というのはどこか？
これはなかなかわからなかった。

なので、県警は午後一時からの記者会見で隠さずそのままを発表した。報道機関への公平性からいってもそれが妥当なことだった。

その甲斐あって、ニューを観た市民から、続々と情報が寄せられた。

——十頭の馬とは、新日鉄の船積み用の大型クレーンのことではないのか。

というのが一番多かった。産業道路 通称四〇メートル道路 を走っていれば誰でも目にするそれは、クレーンが作動していない時は確かに馬に見えた。

稼動中は首を水平に伸ばしているからわからないが、休眠中、首をもたげて並んだ姿は、まさに頭のない木馬の姿。

誰の眼にもその姿がありありと浮かんだ。

——乙津泊地だ！

中央署の会議室に雁首をそろえていた関係幹部——臼杵署の山崎警部・柳井警部補らも駆けつけていた——を前にして、刑事部長の山辺警視正が叫んだ。

「至急手配しろ！」

乙津川と原川が合流する河口。海に向けて両側は埋立地で、西が新日鉄、東が大分ケミカル、日本油脂、九石、昭和電工などのコンビナート群である。

両岸壁にはいつも貨物船が何隻も停泊している。

緊急指令を受けて、東署管内のパトカーがいつせいに現場に向かう。

一隊は新日鉄東門から賑やかに押し入り、製品バースの岸壁に次々にクツワを並べた。巨大なクレーンの下に。

もう一隊は東側の岸壁を赤く染めて連なった。

製品バースでは二基のクレーンが稼動中で、五隻のうち二隻の貨物船にコイルを積み込む作業をしていた。大きなタイヤを幾つも連ねたムカデのような台車がコイルを運んでいる。

東側の岸壁にも二隻の船が停泊していたが、警察官以外の人影は見当たらない。警察官らは、両岸壁からお互いの小さな存在を認め

合い、海を見つめているだけである。

やがて、沖合いから県警の小型船が三隻やってきて、その海域の搜索を始めた。

晴れているのか曇っているのか、白々しい妙な天気の日だった。入り江なので波は穏やか。

世間では盆休みにさしかかろうとしており、中国ではオリンピックが華々しく開催されていた。

夕方から雨になった。

県警本部では、刑事部長の山辺警視正を中心にした幹部で、特別捜査本部の立ち上げ準備がなされていた。

当然、大分中央署に本部を敷き、今のところは臼杵署、次第によつては大分東署をも含めた、合同捜査本部となる予定だった。

中部はもとより、県南・県北の各署からも応援要員を召集し、百人規模の――まだ殺人事件かどうかわからない時点での捜査本部としては異例の――まずもって戒名をどうするかでもめた――捜査体制で臨むこととなった。

《人体切断部位遺棄事件特別捜査本部》という戒名に落ち着き、腕に自信のある者の手によって墨痕鮮やかに大書され、中央署の講堂入り口に掲げられることになった。

県庁では、県の三役が顔を突き合わせて、憂慮していた。一〇月には国体を控えており、それに水をさすようなことにならねばよいがと。

投光器を点けた搜索は深夜に及んだものの、その日はとうとう発見に至らなかった。

前に続く

翌朝、乙津泊地東側岸壁に停泊中のブラジル船籍の船舶の乗組員からの通報で、それは発見された。

バイキングブリッジを上り下りしていた船員の眼に、岸壁と舷側との間の波間から、黄色い物体が一瞬垣間見えたというので、近くでダイビングの用意をしていた県警の船が向かった。

そして、ダイバーが喫水線にくつつくように浮遊している黄色い物体を見つけたのであった。

引き上げてみると、それはしっかりと幅広の特殊な粘着テープで封をされたゴミ袋だった。

しかもゴミ袋はひとつではなく、ふたつあった。

一方には腐乱しかけた人間のヘソから下の下半身が入っていた。勿論両足は膝下から切断されていた。

もう一方にはヘソから上、首から下、両腕のヒジから下のない胴体が入っていた。

その日の二〇時に大分中央署の講堂に、各署からかき集められた、約百名の捜査員が勢ぞろいした。

臼杵署の吉賀巡査部長に佐藤メグミ巡査も遅ればせながら駆けつけた。

入り口の壁に張られた戒名も次のように書き改めてあった。

《臼杵・大分バラバラ殺人及び死体遺棄事件特別捜査本部》

中に入ると、目映い明るさの中に、大勢の捜査員の後ろ姿がドーンと居並んでいて、その先の正面長机に、刑事部長を中心とする幹部の姿が並んで見えた。

佐藤メグミにとっては足がすくむような光景だった。「大けな顔

しとれよ」と吉賀係長にいわれていたけど、刑事の資格がないのは自分だけではないか、という引け目に押し潰されそうだった。実際には相当数そういう応援者が混じっていたのだが。

ふたりは当然、臼杵署の連中――山崎警部以下の流れの最後部に席を求めた。

するとまるでふたりを待っていたかのように、五分後れで捜査会議が「それじゃあ、始めますか」という刑事部一課長の高城警視の一言により始まった。

左端の高城警視は、マイクをスタンドから外して持ち、まず遠路遙々応援に駆けつけてくれた捜査員らの労をねぎらい、そして、本年度から指揮を執ることになった、刑事部長の山辺警視正を紹介して、バトンタッチした。

中央に座す山辺刑事部長は立ち上がり、檄を飛ばして集めた応援捜査員らを満足そうに眺め、場内を見回して、労をねぎらうとともに、簡単な自己紹介をして、挨拶とした。

山辺警視正は宇佐市出身のキャリアで、関東から都落ちしてからは、九州管内の県警を転々としながら、主に警務畑を歩いてきたエリート、佐賀県警警務部・監察課長からの転任だった。歳は四十五とまだ若く、端正な面立ちをしていた。

高級なウールのダークスーツ姿の刑事部長を挟んで、中央署長・東署長・臼杵署長の青シャツが厳めしく並んでいる。

ほかにもひとりダークスーツ姿の幹部が右端に座していた。

続いて、中央署の権藤警部が指名されて、早速、上野墓地公園内遺棄現場の報告から口火が切られた。

権藤警部は指し棒を引き伸ばしながら壇上に向かい、白いボードに書き込まれた第一現場図を示しながら、説明を始めた。

「ここが、遺棄現場です。この部分は鬱葱としたカシなどの林。藪といってもいい。ホシはこの辺り、少し道路が広まっている。ここに車を停めて、この細い道から林に分け入ったものと思われます。そして、カシの木の枝に、腕が入った網袋二つを、手を伸ばせば届

くくらの位置――ただし、少なくとも一七〇センチ以上の背丈は必要です――にある枝にいわいつけた。

そして再びここに戻り、ここから車で逃走した。犬がここで原臭を見失いましたけん、まず間違いないでしょう」

権藤警部は厳つい顔をしていた。短髪を含めてジャガイモのような色合いと形をした頭と顔だった。イタ高 大分高校 のゴンタクシで鳴らした頃と少しも変わってない これは二年先輩の吉賀の感想。

そこまでいって権藤警部は猪首をめぐらして正面を向き、なにか質問はないかと間をおいた。けど、反応がないので先を続けた。

「ここに至るのは、上からは、南太平寺から上ってきたか、大道から美術館の前を通ってやってきたか、もひとつ、南陽台からも考えられます。下からは、この一本道ですな」

「時間的に見当はついているのかね？」と、山辺刑事部長が首を捻じ曲げてきく。

「はい。それがですね。まあ、逢魔おっまが時といいますが、カラスが寝床に入っている頃、宵から明け方にかけてではないかと思えます。

それ以前だと、カラスに限らず、野鳥などが啄ばんでいたでしょうし、朝の五時には、片島の民家からファックスが新聞社に送られますけん、そこまでの移動時間は少なく見積もっても一〇分はかかりますけん―ですけん、朝は四時半くらいまでとみて――ああ、勿論、単独犯ということを前提にしておりますが」

「うむ。メツッセージには吾人とあるが、まあ単独犯とみて間違いあるまい。こんな変質者が何人もいるとは思えない。それで、該当不審車両あるいは不審人物の目撃情報は？」

「はい。複数上がっております。それをただ今、一つひとつ潰しておるところであります。Nからの割り出しも行っております。ミカイン入れ網袋についても、ごくありふれたものですが、その出所確認を急いでおります」

「ほかに遺留物は？」

「今のところまだ見つかっておりません」

「うむ」

「それでは次に」といって権藤警部は、片島の民家の図面の方を指し示して、「下郡工業団地から入ったところの民家ですが、これは福岡の『東洋住宅機器株式会社』が出張所として借りてあるもので、営業員が出張してきた時に寝泊りするだけの家で、普段は誰も住んでおりません。高さ一・五メートルの金網フェンスと、同じ高さのブロック塀をめぐらせてはありますが、裏木戸から何者かが庭に侵入、窓ガラスを割ってガラス戸を開けて進入した形跡があります。

そこからファックスを送ったことは間違いありません。

ですけんこれまた今、遺留指紋の照合と、付近の聞き込みをやっているところであります。今のところ不審人物等は上がっておりません」

「両腕ですけど、解剖所見は出てるんでしょうか？」

臼杵署の刑事からの質問だった。

「その件に関しては、あとで検死官がまとめて報告することになっております」と、一課長の高城警視がオーダーメイドのツイードのスーツ姿でいった。

吉賀や権藤警部のような二着なんぼといった安物ではない。吉賀の背広からはナフタリンのにおいがプンプンしていた。身内でもないのに、メグミは恥ずかしい思いをしていた。メグミは勿論イチヨウの黒いパンツスーツ姿である。

「ほかに質問は？」高城警視は場内を見渡した。「なければ次に東署、乙津泊地遺棄現場報告をお願いします」

いわれて、最前列に座っていた東署の天津部警部が立ち上がり、壇上の二つ目のボードに向かった。

そこには乙津泊地の図面が――船舶の位置など――詳細に書かれてあった。

「発見現場はここですが、当初上流から投擲したものだろうと思っておりますけど、同じ様なものを流してみてわかったのですが、

投擲する位置によつて、当然、ここまで流れ至る時間が決まります。そしておおよその投擲時刻も推し量れます。

それにしては前日の搜索で見つからなかったというのが解せないのです。黄色いゴミ袋というのは特に目立ちますからね。その証拠に貨物船の乗組員が午前六時過ぎに、舷側と岸壁の間といえは薄暗かったでしょうに、それが眼に入つたくらいですからね。

それよりなにより、ふたつのゴミ袋が同じところに漂着しているというのもー勿論、ヒモやなにかで繋いでいたわけでもありませんからーそういうところから考えて、投擲されたのはまさにここ、発見された所と同じ、この岸壁から船舶のーその船舶は一週間前から停泊しておりますー舷側との間に、我々の搜索が打ち切られた本日の午前一時以降に投擲されたのではないかと「ここでどよめきが起きた。『そのように思われます』」

「ホシのやつ、フエイントをかけたつてわけか？」と、中央署長が思わず声を漏らした。それをマイクが拾う。

ほかのお歴々も頷いている。山辺刑事部長は仰け反つて腕組をした。相当にハイレベルなやつだと思つてに違いない。メグミもそう思つた。東署の警部も、風采の上がない眠そうな顔をしているけど、切れ者なのかも知れない。

「ですから、重点的にその辺りの聞き込みを行っているところです。勿論これは仮説ですから、上流、あるいは三海橋から投げ落としたということも視野に入れて、幅広い聞き込みをーそれにしては手が足りませんが、やつておるところであります。今のところこれといった情報はつかめておりません。

なお、ゴミ袋と、業務用の粘着テープについても、その出所を確かめておるところであります」

——待つてました！

と、ばかりに佐藤メグミは立ち上がった。それは反射的な行動だったので、立ち上がったから、顔が火のように熱くなった。

「あのう……」

みながいっせいに彼女を見る。

「君は？」

「臼杵署の佐藤です。階級は巡查です」と余計なことをいった。
（なんで、外人が？）というような顔つきで高城警視はまじまじとメグミを見て、「なんだね？」と訊く。

その間、方々で、「よい、あらなんかい？」「ほんとじゃのう、随分陽に焼けちよるじゃねえか」「バカ、陽に焼けたぐれえじ、あげえ黒うなるか」「黒人のごたるのや」「——にしては色がちいと薄しいぞ、鍋炭でんついちよるんじゃねえか」「あいの子じやろうか」等々の私語が交わされている。

臼杵ではもう認知されているのに、鬱陶しいことだと、頭の隅でメグミは思う。色なんかどうでもよいではないか！

「はい。あのう、ちよっとうかがいますけど、昨日の汐はどうだったでしょうか？」

「シオ？ 塩——とは？」

「ですから満潮か干潮かということですけど」

「ああ、汐ね。それはどうだったんですかね、大津部さん」

「あ、いや、それは——その辺は確かめておりません——けど、大型貨物船が停泊しているくらいだから、あの辺はかなり深く浚渫しゅんせつされていて、いつもなみなみとしておりますからなあ」

「それによつては、上流から流されても、押し戻されたり速まったり、また、沖から押し流されてきた可能性も考えなければなりませんし、それに、なにも陸からではなく、海から小船でということも」「うん、まあねえ……」

と、大津部警部は迷惑そうな顔で色の黒い小娘を見た。吉賀ら臼杵署の連中は苦笑い。並み居る幹部の中の、下川臼杵署長もゾウガメのように首を伸ばして苦笑の態。

「あ、それから、黄色いゴミ袋ですけど、表面に何か表記はありましたか？」

「いや——なにも？」

「どうしてゴミ袋と判断されたんですか？」

「あの手のものでは、それ以外の用途が考えられなかったんでな」

「手揚げのような加工はされてましたか？」

「いいや」

「そうですか……いえ、黄色いゴミ袋は白杵市が採用しておりますから、お訊きたんですけど」

「なにっ！」という声がお偉方から漏れた。

「ただし、市のは燃えるゴミを入れるほうの袋で、そう表記してありますし、手揚げ加工が施されてあります。でもどうして犯人は、目立たない黒ではなく、ある意味一番目立つ黄色にしたんでしょう？」

たまりかねて白杵署・刑事課長の山崎警部が先頭の席から立ち上がって、「気にせんでください。あの子はまだ警察官としてもまだ新米で、交通係の者ですが、なにぶん手が足りなくて」といい、佐藤メグミの方を向いていう。「君、もういいから、黙って座るときなさい！」

「なにをいっとるんだ！」と下川署長が声を上げた。「彼女は立派な刑事課の刑事だぞ！」

「いや？　しかし、署長」

「たった今、わしが移動を命じた。文句あるまい」

みんながドツと笑った。

下川署長は柔和な顔に戻って、佐藤メグミに「続けなさい」という。

佐藤メグミは眼を丸くしてしゃちほこばる。

「はい。ですから、赤い網袋といい、黄色いゴミ袋といい、犯人は早く発見して欲しいという思いと、そういった色に心理的なこだわりがあるんじゃないかと、思いましてーいえでも、わたしたちの裏をかいて、フェイントをかけたというのは、全く同感です。やられたって、感じですね。そう思います。余計なことってすみません。」

「あ、それから、あの業務用の幅の広い粘着テープですけど、ボードに拡大写真が貼り付けてある。」「写真で見た限りですけど、あれって、東芝関連の会社に勤める友達からー高校時代の同級生ですけどー見せられたことがあります。たったこれだけで何千万円ものＩＣが詰まってるんだよって、幅広テープで密封された小さなダンボール箱を見せられたんです。凄い粘着力だと自慢してました」

「そ、その会社はまさか、臼杵市にあるってんじゃないかなー！」高城警視が叫ぶようにいった。

「あります」と佐藤メグミは胸を張った。

時刻は二一時半を回った。

いよいよ臼杵署の出番というところで、高城警視から小休止宣言が出された。

「それではここで一五分間の休憩タイムとします。トイレ等、喫煙は、外のフロアーに喫煙場所がありますので、そちらのほうで願います」

一〇〇名余りの捜査員から緊張の糸が切れてざわめきが起きた。ガヤガヤと立ち上がる。

体をほぐしながらみんなゾロゾロと講堂から出て、トイレに向かう者、喫煙場所に向かう者とに分かれた。

居残った者らは、そこに固まりを作って私語を交わした。

男子トイレの前は大混雑だが、女子トイレはさすがに閑散としていた。

佐藤メグミが洗面所から出て廊下を歩いて行くと、清涼飲料水の自動販売機の所で、壁に寄りかかってダイエットコークを飲んでいる若い女性刑事がいた。

飛び抜けて背が高いのでその刑事はよく目立った。応援部隊の中にいて、何度かメグミと眼が合った。数少ない女性刑事の中で、若いふたりが互いを意識するのは自然の理だった。

向こうも気付いてこっちを見た。

「はあ、い」といってメグミのほうから声をかけて近づいた。

メグミは小さいほうではない。一六九センチあるから女にしては上背があるほうである。それにメリハリのあるボディーをしているから、色が黒いのを別にしても、女性の中にあつては目立つ存在である。

そのメグミが傍に行つてその女性刑事の大きさにたまげた。壁に寄り掛かっているから真つ直ぐ立っているわけではないのに、見上

げるほどだった。

「わたし、臼杵署の佐藤メグミ」

メグミは精一杯愛嬌のある顔で挨拶した。

鉄無地のサマースーツの襟から白いシャツの襟をラフに立てたその女刑事は、そのままの姿勢で、コークの缶を口に付けたままジロリと佐藤メグミを見て、「自分は、別府署の榊原光子」といった。（なにこの子、態度デカイ！）と、思っていると。

そこへ吉賀巡査部長がやって来た。

吉賀もその長身の女刑事をびっくりした顔で見た。

そして、「なんだ、おまえか」という

「係長、この人知ってるの？」

「ああ、ちよつとな」上背が一六〇センチそこそこしかない吉賀は、それでも見下ろすように仰ぎ見て、「またおまえ背が伸びたか。まあ、あんときゃ、小便臭^{しよんぺん}せえ小娘じゃったけどな」

その小娘にしてやられて、法廷にまで引つ張り出され、恥をかかされたことがあった。

そんなことは知らない佐藤メグミは、その白黒ハッキリした大きな眼で、ふたりを交互に見た。

「おお、そうじゃった。おい佐藤——じゃなかった。佐藤刑事殿、課長様がお呼びじゃ。おまえ、課長の顔潰したけん、しおらしゅうしとれよ」

「はい、デカ長！」といって佐藤メグミは、自分と同年くらいいの榊原光子という長身の女刑事に、「——じゃね」と、片手を挙げて、小走りに走り去った。

なにしろ百人からの人間である、トイレは上・下の階の使用しても間に合わないくらいだった。喫煙所とて同じ。

なので全員がパイプ椅子に座り終えたのは、もう二二時になるうかという時刻だった。

「じゃあ、時間も押しております。最後に臼杵署——臼杵署の進捗

状況を願います」

高城警視の指名を受けて、山崎警部が苦み走った大きな顔で、ボードの前に立つ。ボードはすでに二基とも、メグミらの手によって臼杵事件の資料に取り替えられていた。

まず、山崎警部は現場の図面を指し棒で指しながら説明を始めた。「もうご存知かと思いますが、船着場の側壁のこの上に遺棄されておりました。ホシはこの路地を通って、小学校のグラウンド脇に停めた——ここです。ここで犬は原臭を見失っております。やはり車で逃走したものと思われます。今のところ有力なのは白い乗用車ということで、N関連と突き合わせて、該当車両を一つひとつ潰しておるところであります。」

それとは別に、目撃証言から不審人物の割り出しも行っておりますが、これもやはり当初の少年による似顔絵、そしてほかの小学生らの目撃情報を加えた人物像が有力で、そのほかにはこれといった目撃情報は得られておりません」

図面の横に、不審人物の特徴が箇条書きされてある。うしろのほうは見えにくいと思われるので、山崎警部はそれを読み上げた。

- 一、 背丈——一七〇——一八〇センチくらいである。
- 二、 体格——痩せ型である。
- 三、 顔——醤油顔である。
- 四、 髪——長髪である。
- 五、 服装——？カーキ色のジャケットにズボン ？白衣に白っぽいズボンである。
- 六、 性別——不明である。

「次に遺留物であります。これも隠さず公開しましたので、もう新聞等でご存知かと思えます。あの通り、ゴム長靴に石灰石の粉が付着しておりましたので、それについて多数の情報が寄せられています。もっかそれを一つひとつ潰しておるところであります。」

エバーミングの件は伏せておりますので、それに関する情報はありません。秘かに病院や葬儀屋、それ専門の業者に聞き込みをかけているところがあります。

所在不明・行方不明者のほうの情報も多数寄せられております。それについては――」

- 一、 男性である。
- 二、 推定年齢は三十から五十までの中年である。
- 三、 推定身長は一七〇センチ前後である。
- 四、 肥満度はマイナス二〇パーセント前後である。
- 五、 動脈硬化がかなり進んでいて、爪水虫がある。
- 六、 やや〇脚気味に歩き、筋肉の具合から、肉体労働者ではなく、ホワイトカラー、もしくは、ブルーカラーでも比較的軽度な作業員または管理職員が想定される。

- 七、 足のサイズは25・0センチ。体毛は薄いほうである。

と、新聞記事にもなった事項がボードに書いてあり、警部はそれを確認するように読んで。

「以上の条件をもとに、該当するか、もしくはそれに近い情報から優先して当たっております。ひと月以内に失踪した者――今のところそういう条件を設けてですね。なにぶんにも手が足りませんので情報はほぼ全国から多数寄せられております」

山崎警部はここでひと呼吸おいた。

すかさず、「病院や自宅で死亡した者についてはどうなんですか？」という質問が捜査員の方から出た。

いわれて警部は次のボードに移った。

そこには「臼杵・津久見」両市の略図が描かれてあった。点在する病院や葬祭場や火葬場の名前と位置が書き込まれている。

「ここに、臼杵・津久見両市の共同火葬場があります。臼津葬祭場きゅうしんですね。両市に於ける死亡者の遺体はすべてここで荼毘に付される

ことになっております。死亡から納骨に至るまでのプロセスに、なんら問題はありませんでした。

なお、そういう法的手続きによらない、自宅で死亡したのに医師による診断も受けず、従って市当局に死亡届も出さないで、家族により秘かに埋葬したり遺棄したりした遺体はないかーという捜査を行いましたところ、なんと「山崎警部は地図の至るところに「X」が記してあるのを丸で囲むように大雑把に示して、「これだけの数の人間が、所在がつかめないのにもかかわらず、戸籍上は現存していることになっておりました。全部で七八名おります」

捜査員らは状況が呑み込めない。お偉方とて同じである。

「どういうことかね？」と、代表して刑事部長の山辺警視正がきく。「はい。なにぶん手が足りませんので、まだほんの一部しか明らかになっておりませんけど、わかっただけでも、そのうちのーすべて臼杵市内ですが、一五名が、家族により不法に密葬されておりました。事情はそれぞれですが、中には、年金手続きがなされていて、家族が不正受給している悪質なものもありましたので、ただ今立件を検討しているところであります」

「じゃあその辺からこの度のバラバラ遺体が出て来た可能性があるわけだな」

「いえ、それが、その七八名の戸籍上の幽霊ですが、生きていれば、今現在は八十歳以上のお年寄りばかりということになりまして、酷いのになると、津久見市青江のお婆ちゃんなんかは、坂本竜馬より二つ三つ上ということになります」

「なんじゃそれは」と高城警視。

「じゃあ、君らはそんなことにかかわりあっているヒマはないはずじゃないのかね」山辺刑事部長が鋭くいった。

「はい。おっしゃる通りであります。なので、その方面からは手を引きましてーいえ、エバーミングということもありますので、後ろ髪を引かれる思いではありますが、なにぶんにも手が足りませんのでーただ今、ある不審者の身边調査に手勢の多くを割いて、ま

た狭い上に人通りの少けない小さな町でありますので、日替わりの行確班を、常時三名貼り付けておるところであります」

「なに？ 容疑者はいるのかね」驚いた顔で山辺刑事部長。

「それを早くいわんかい」という顔を高城警視はした。

下川署長は机に肘を突き、でっぷりした体を種牛のようにのさばらせて、ニタニタと頬を緩めている。

前に続く

“ 今井孝雄 ”

という名前を、山崎警部はボードに大書した。

そして濃い顔を正面に向けて、わざとらしくひとつ咳きをした。

「初めに断っておきます。この人物は先ほど申しました小学生児童らの目撃証言による不審人物とは、あきらかに赴きを異にしております。容疑者とまではまだいえませんが、しかし限りなく疑わしい人物であります。

まず、略歴から申しますと、年齢は二七歳で、生まれは津久見市セメント町、現住所は臼杵市祇園西町——まさに遺棄現場のすぐ近くです——のアパート『海南壮』。学歴は、津久見高校から京都大学の医学部に進んだ秀才ですが、なぜか四年の半ばにして退学、それから関西で職場を転々として、去年の九月に故郷の津久見に舞い戻っております。そして、臼津葬祭場で働くようになった。

ここで注目すべきは、この男が一貫して死体の傍にいたということです。医学部ですから死体解剖などの研修を受けることは当然でしょうが、なおかつ大学時代のアルバイトが大学死体置き場プールでの死体洗い。転々とした職業も主に葬儀屋でした。そしてこちらでも葬祭場勤務。

しかも、しかもです、レンタルビデオ店から借り出されているビデオもホラービデオが多いときております」

「——おお！」という捜査員らの声。

「じゃあ、決まりじゃないか」と、山辺刑事部長が肩を揺すつていう。

「はい。ところがですね。先ほども申しましたように、彼には三人の行確班を四六時中張り付けておったわけです。無論、深夜に於いても片時も眼を放さず、彼のアパートを見張っております。そう

いう中で、このほどの一連の事件は起きたのです」

「うん。そういうことか」と、山辺は腕を組んで仰け反った。

「ですから、彼がホシだとしたら、もう一人、もしくはそれ以上の共犯者がいることになります。――あ、ですけど、臼杵事件においては彼のアリバイはありません」

捜査員らの頭に、“吾人らは”という犯人のメッセージが浮かんだ。ハツタリではなかったのかも知れない。これは大変なことになったぞという思いがズシンときた皆々であった。

しかしお偉方のほうはもっと大きな衝撃を受けていた。山崎警部が壇上から退き、捜査員らの私語がおさまらない中、右端に座っているダークスーツ姿の幹部が立ち上がった。検死官の黒木警視である。

黒木警視は馬の顔を押し縮めたような顔をしていた。目鼻がまさに馬を想起させた。髪は中央から左右に振り分けている。

「ここで見なさんに私のほうから申し上げます。検死の黒木と申します。その前にお断りしておきます。これから話すことはあまりにも衝撃的なことなので、しばらく伏せておくというのが、部長以下の方針でありますので、口外無用に願います。よろしいですか。くれぐれもお願いしますよ」

自然捜査員らは緊張の面持ちになった。急に外の喧騒が耳に入ってくる。歩道で話す人の話し声までも。

「この度発見された両足、両腕、二つの胴体ですが、いずれも、別人のものであります」

「――おおっ？」という疑問符の付いたどよめきだった。

「そらどうということかえ」と誰かが思わず口走った。

「都合、四人！ 四人の遺体の一部ということであります。少なくとも四人が殺害され、解体され、遺棄された――ということですよ！」

ガヤガヤと騒がしくなった。

「静かに！」と高城警視が叫んだ。

静まり返ったところで、山辺刑事部長が抑制された声でいった。

「これは我々が思っていた以上に大きな広がりを持つヤマかも知れんな……しかもまだ序章に過ぎないという」

「しかし、今度は胴体でしたから、司法解剖からは多くの情報が得られるでしょう。人間、一つやふたつ、病歴や致傷歴、それに外面の特長も見られるでしょうから、内臓はないとはいえ、全国の病院のカルテを当たれば、これは身元確認は案外早いかも知れませんか」と、黒木検死官がいうのに、「まったく大胆不敵というか、さつき誰かがいったけど、ホシはまるで身元を早く突き止めてくれといわんばかりですな」と、中央署長の村本警視正がいう。

「といいますか、あのメッセージからしますと、“老翁は囑目せよ”ですから、老翁に見せたいんじゃないでしょうか？」と、捜査員の中からいう者があつた。がっしりした体格の中年刑事だ。

別の刑事が後方から立ち上がって、発言を求める。高城警視が首を伸ばしながらボールペンで指す。

「同感です。しかも民衆を啓蒙しようというんですから、個人的犯罪というより、社会性を感じますね。老翁というのは身分が高い人でしょう、たぶん。そういうところからしても、この事件には複数がかわっているような気がします。あるいは狂信的な、たとえばカルトのような集団なんかが」

だんだん話が大きくなってきた。佐藤メグミは発言者が出る度に頭をめぐらせていたが、ふと先ほどの女性刑事、榊原光子という別府署の刑事に目線がぶつかった。

ぴんと背筋が伸びて、頭一つ出ているその女刑事はじつと、ひな壇の上の白いボードを見ている。小学生児童の目撃証言から描いた長髪・長身の白衣を着た男、あるいは女とも見れなくはない絵を。

前に続く

それからフリートークのようになって、色んな考えや意見が出た。

その中でも、杵築署きつきの捜査員がいったことで、しばらくみんな黙って考えさせられた。

「どれもこれもつい 対 になってますね。足、手。胴体——と。これは何か意味があるんでしょうかね？」

「ほんとだなあ……」と下川臼杵署長がつぶやいた。

それはみんな漠然と思っていたことだ。

「しかしどれもこれもバラバラだったら、遺体は六名になって、もっと怖いことになっていた」と東署長はいう。

「胴体も二体揃えたということは、明らかに、なんらかの意図を感じざるを得ないな」と中央署長。

捜査員らも隣近所でささやき合う。それが次第に大きくガヤガヤと喧しくなった。

そんな時でさえ、別府署の榊原光子はじつとボードの絵を見つめていた。

やはりメグミは彼女が気になってしょうがない。くやしだけれど、オーラを放っているのだ。男子より背が高く足が長く颯爽としていて、髪は男子のように七三に分けて流し、短めにカットしている。ラフに立てたシャツの襟がカッコイイ。

そんな髪型に憧れつつも、どうかするとちぢれようちぢれようにかかっている髪が、いっこも どうしても いうことをきいてくれない。だからシニヨンにするしかないのだ。この顔に白粉おしろいを塗っても無駄なように。

場内がバラけてきたので、高城警視が咳払いして、「じゃあもう遅くなりました、ここらで部長にシメていたたいて、明日に備えましょうか」といった。

メグミは腕時計を見た。津久見市内に住む伯母から高校卒業と就職祝いを兼ねて貰った、お気に入りのミッキーマウスの腕時計だ。時刻はもう午前令時をまわっていた。

山辺警視正はマイクをスタンドから外して立ち上がった。

「秋季国体を控えて、知事も県会議長も大変憂慮されておられます。みなさんの力を結集して、事件の早期解決をと、本部長会議に出張しておられる本部長からも、メッセージが届いております。」

ただ今、所轄の方々から進捗状況しんちょくをうかがいましたが、いずれにしましても、このホシは、単独であれ複数犯であれ、移動手段に車を用いていることは間違いないと思われます。であれば、ホシが動くたびに、車の痕跡を残すことになり、捕捉のチャンスが広がるわけであります。クレバーなやつだから、同じ車で移動しているとも思えないけど、盗難車両や、レンタカーを使用したとしても、限られてくる。Nシステムをふるに活用して、怪しいと思う車両を絞り込んだら、Nの追跡モードでその動きを監視する。と同時に、みなさま方にあつては、片っ端から、その車両に当たってみていただきたい。

次に遺体――遺体の隠し場所がきつとあるはずです。エンバーミングを施しているところから、常温でも遺体の保存は可能であります。必ずしも冷凍施設は必要としません。民家は勿論、廃屋、廃工場など、建物という建物をシラミ潰しに、地域課・生活安全課等の垣根を越えて、係員を総動員して、管轄区域の戸別訪問に当たらせるようにとの、これは本部長よりのお達しでありますので、各署のご理解を賜りたい。

所在不明・行方不明者等の追跡は、これより応援部隊に担っていただきます。該当条件に当て嵌まる情報であれば、日本全国どこでもかまいません、出掛けて行って確認していただきたい。

臼杵署のみなさん方にあつては、ご苦労さまと申し上げたい。ホシは多くの証拠を、ご当地に残しておるようですから、さらなる踏ん張りを願います。その不審者が事件解決の突破口になればよいのだ

が……。

——以上！」

山辺警視正のシメで捜査会議は終わった。

一人ひとりに夜食の弁当『吉野の鳥飯』と、ペットボトルのお茶が振舞われ、泊り込みの応援部隊はそこで食べ、ほかの捜査員らは三々五々乗ってきた車両に乗り込んで、それぞれの警察署に帰投した。

佐藤メグミは今回ミニパトではなく、五人乗りの3800cc特別仕様を運転。本当は管轄区域を越えてはならないことになっているのだが。チラッと後部を見ると、吉賀巡査部長も、それに寄りかかるようにして宮崎芳樹刑事も居眠っている。

宮崎芳樹は二八歳の独身で、犯人を刺激する作戦の申し立てを一緒にした時以来、多少意識するようになっていた。彼は来る時は柳井班の連中と一緒にだった。

急にメグミも眠たくなって眼をこすり、しばたいた。

一〇日の日曜日によく休みをもらえたので、佐藤メグミは墓掃除に蒲江の実家に帰った。

例年は、一二日か一二三日の休みの日か、そうでなければ休暇を取って、盆の墓参りを兼ねた墓掃除をしていた。今年は事件の関係でいつ休みが取れるかわからない。せっかく何週間振りかにもらえた休みだけど、しかたがなかった。祖父母とメグミしか墓掃除をする者はいないのだ。

祖母は女ばかり五人産んで、三人が死に――その中には自殺したメグミの母親も含まれている――津久見と兵庫に嫁いだ娘がふたりいるけど、それぞれそちらの墓守があるので、墓掃除に帰ってきたことは一度もない。

メグミは墓掃除が嫌いではなかった。墓の周りは一年のうちにヤブのようになっていて、結構手間がかかり、そうゆうのって面倒臭い。おまけにヤブ蚊がうようよいて、どんなに用心していてもすぐに刺される。それが痒くて痒くて、搔くと皮膚に膨らみができる。不思議と祖母はあまり刺されない。焼酎臭い息を吐く祖父と、メグミだけが集中攻撃を受けた。

でも、掃除が終わったあとに食べる、祖母特製の大きなイナリ寿司は、たまらなく美味しかった。それに釣られて、子供時分は墓掃除についてきた。また、そこから眺める木の間隠れの海も好きだった。カシの木に登ると、沖の島や四国が見えて、他国に憧れたものだ。

佐藤家の墓は以前は家の近くにあったのだが、そこに道路が通ることになって、翔南中学裏手の小山の中に寄せ墓を造りかえたのだ。メグミがまだ小学生時分のことだ。坊さんが閉眼供養にきて、石屋が土葬の墓から骨を掘り出すのを、部落の子供らと一緒に遠まきに眺めていた。

その時はまだ祖父母も達者で、土地が安かったのでそんな山の斜面に墓を移したのだが、今はもう年老いた祖父母には山道をそこまで登って行くだけでも難儀になっていた。

遅しく成長した孫の手によって、小竹やチガヤやツタカズラなどがカマで切り払われていくのを、年老いた老祖父母が片付ける。そうしながら、この孫娘に養子がきてくれれば佐藤家は安泰なのだと思う。

「メグミや」ジイジがいう。

「なんな？」

メグミは手を休め、振り向いて体を起こした。首にかけたタオルで黒光りした顔を拭く。

「おまや……」そのあとの言葉が出ない。

「彼氏はまだおらんのか？」と、かわりにバアバがきいた。

「おらん」

といってメグミはまたカマで石塔にまわりついたカズラの根を切りにかかる。

「……警察官なら申し分ないがのう」とジイはひとりごちる。

そこへ賑やかな音楽が沸き起こった。メグミのジーンズのうしろポケットから。ケータイの着信音だった。

メグミはカマを放り投げてケータイを取り出した。

「はい。佐藤です」

「……」

「なにー宮崎さん？」

宮崎芳樹刑事からだった。意外な人物からの電話に驚いた。ケータイ番号を教えた覚えはない。

「ゴメン！ なにしるヒマだからさあ。俺今、今井孝雄の行確やっただけだよあ、あいつ早朝からずっとアパートの部屋にこもったきり、出てこねえんだよ。昨晚からずっとらしい。いい若い者になにやってんだらうなあ」

「ちよっと、そんな時に私用の電話なんかしていいんですかあ？」

「えへへ。今デカ長がタバコ買いにコンビニに行ってたんだよ」

デカ長というのは、柳井警部補の部下の板井部長刑事のことである。吉賀巡査部長の後任の主任。

「それにどうしてわたしの番号知ってるんですかあ〜？」

「あれ？ 番号交換してなかったっけ？」

「してません！」

「おーひよひよ。それはえらいこっちゃ。どうしてだろ？ 夢に出てきたのかな？」

「交通係で、連絡帳見たんじゃないですか？」

「まあ、そんなことはどうでもいいじゃん。とにかくこの事件は君と俺とで解決するっきゃないなと思ってんだよ。みんな頭の固い連中ばかりだからさ」

「あきれた。どうでもよくありません。おどかさないでください」

「ところで君今なにしてんの？」

「それこそどうでもいいことです」

墓掃除しているなんていえない。メグミは宮崎芳樹のひよる長いヒョウキな顔を頭の中に思い描いた。捜査会議の帰りの車中で居眠ってた顔は、少年のようで悪くはなかった。

でも普段はキザっぽくて、背が高くスタイルがよくなければ、そう気を引く男でもないけれど、あの時以来なんとなく気にはなつた 大いなる矛盾である。

「メグミや、誰からだい」ジイジが心配そうにきく。

メグミはチラッとジイジを見ただけで避けるように遠のいた。鼻の頭に汗の粒をいくつも浮かべ、顔は上気している。初めての独身男性からの電話だった。そういうことに関してメグミはとても奥手で、引っ込み思案だった。これまで好きな男はいたけど、自分から行動を起こしたことは一度もない。

子供時分にタラコ唇といわれてイジメられたことを引きずっていて、自分の価値を過小評価しているフシもある 可愛いからイジメるといふ心理もあることを知らない。けど、やはり祖母・おサ

キの賤^{しっけ}が効いていた。男に対して憤み深い女になっていたのだ。

皮肉にも、そのタラコ唇が、今や彼女の最高のチャームポイントになっていた。人中深く、形よく上唇が反り返っていて、その朱唇を誰が一番先に奪うか、署内の独身男性どもが秘かに競争しているくらいだった。柳井警部補も狙っているという噂もある。

「——ああっ！」と、宮崎芳樹が抑制された声を上げた。

「どうしたんですか？」

「やばいよ、やばいよ。ターゲットが出てきた」

「ええっ？」

「デカ長なにしてんだろうなあ、もう！」

「ケータイで呼び出したらどうですか」

「それがケータイをリアシートに置いて行っちゃんの」

「そうなの」

「——ああ、どうしよう。どうしよう。バイクに乗るぞ」

「そのまま追跡しちゃえば。こっちから署に電話するから」

「オーケー。じゃあ、そうする。あとは頼む」

「幸運を祈るわ」

「ほいきたベイビー！　愛してるよ！」

いつの間にかジイとバアが両側から耳を寄せていた。

前に続く

タンポポの綿毛よりも軽い男——というのが女子による宮崎芳樹評であるが、悪い気はしなかった。

そればかりか、自分という存在を気にかけてくれている異性がいるというだけで、気持ちが高揚するのだった。早速刑事課に連絡を入れたから、誰かが板井部長刑事を拾って宮崎刑事を追いかけるところだろう。

それがすんで、また墓掃除に取り掛かった。嫌々やっていたのがまるで苦にならず、鼻歌を歌いながら、例年にもなく、石塔に水を掛けて丹念に苔を洗い落とす念の入れようだった。

掃除が終わって一息つくと、新聞紙で丸めて持ってきた榊さかきと、まだ赤くなりきつてないホウズキを備え、ロウソクを灯し、線香を焚いて、三人でお参りした。

木漏れ日の中に、線香の紫煙とにおいが漂った。カシの枝葉を揺らして、涼やかな潮風が豊後水道を行き交う船音を運んでくる。どこかでヒヨドリが甲高く鳴き、カラスが杉の梢こずえで低く唸った。

祖父母が死んだら、自分はどうなるんだろう？——という不安が、幼いメグミの胸に常に宿っていた。学校から帰っても、家に誰もいないことが多かった。段々外が暗くなつて、八時九時になつても二人とも帰つてこないことが何度もあつた。その時の心細さといつたらなかった……。

だが今はしっかりと自分の足で立ち、年老いた祖父母を支える力を備えている。もう恐れるものなどにもない。そのようにメグミの後ろ姿は語っていた。墓に手を合わせていても、お祈りすることはなにもない。頭の中に両親せうせいの姿を思い浮かべようにも、そのよすがとなるものはひとかけらもないのだ。なにもかもがみんなと違っている——それが佐藤メグミの原点だった。

やがて彼らは帰り支度を始めた。

だが、“行きはよいよい、帰りはこわい”である。獣道のような山道の下り坂は、湿気た濡れ落ち葉などで滑り易く、年寄りの覺束ない足腰では非常に危険である。転んだり、尻餅を突いたりして、骨でも欠けたら即寝たきりになる。用心しながら、一人ひとり手を引いて下りねばならなかった。クモ猿とオランウータンのような二人を。

下りついた所に、去年買ったばかりの黒いライフが停めてある。そこまで二人を連れてきてホツと一息つく。ケータイを取り出して開いて見る。メールが一件入っていた。

《――乙見ダムの所にて、マルヒ見失う。ただ今搜索中》

宮崎芳樹刑事からだった。

これはえらいことだ。板井部長刑事は課長に大目玉を食らうことになる。そうなると板井部長は腹いせに宮崎芳樹に当たる。それが厳しい縦線組織の警察である。なんとか見つけ出して欲しいと思う。といっても相手がバイクじゃ、しかも、乙見ダムといえば人家もまばらなほとんど山の中、追っかけても細い道に入り込まれたら、乗用車ではお手上げだろう。

「ジイちゃん、バアちゃん、悪いけどウチ、昼から臼杵に帰るわ。なんか、大変なことになっちよるごたる」

「バカいうな。今日は休みもろうちよるんじやろうが？」ジイが声を荒立てていう。

「うん」

「なら、放っておけ。せつかくバアさんがごっそ（ご馳走）こしらえち食わしちやろうと、昨日^{きのう}からしこ（用意）しちよるんど」

「そうじゃ、夜には津久見ん弥栄子も子供連れじくることになっちよる」バアもいう。

「ええ」

「おまや、刑事になったけんち、一銭もならんこたあ、せんでいいんど」

「近頃、いつこん寄りつかせんじ、ジイもバアもそげえ、いつまっ
てん生きちよらせんのど。たまには一緒に寝ち、肩ぐらい揉んじく
れてん、罰ちやあたるめえが」

メグミは亡者にとりつかれたように溜息をついて、カチャリとケ
ータイを閉じた。

前に続く

その夜は月夜だった。

海に面してひしめくように軒を連ねた家並の中で、とりわけみすばらしい、狭い敷地いっばいに建てられた、間口が狭く、奥行きの長い二階家の佐藤家の食卓は、いつになく賑やかだった。

「め〜じろん、め〜じろん」

と、歌いながらめじろんだンスを踊るあどけない三人の孫と、年頃の光輝を放つ孫娘のメグミに囲まれて、眼をシヨボシヨボさせながらチカラやんーと呼ばれているジイ様は、もうすっかり衰えている焼酎の量をいつになく過ごしている。

おタネバアは尺取虫のように曲がった腰を伸すヒマもなく台所と居間を行ったり来たり。四十二歳の娘・弥栄子は臼うすのように尻を据えたまま、手伝おうともしない。実家に帰ったら、いくつになっても娘に戻ってしまうのだ。

弥栄子には他に高校生の娘と中学生の息子がいる。下の、小学三年生の女の子と、幼稚園児の男の子、保育園児の女の子の三人が今、大分国体のマスコット「めじろん」の歌と踊りを、メグミに囁し立てられて熱演しているのである。

食卓には海の幸、山の幸が多彩に料理されて並べられている。その中には夕方メグミらが岸壁で釣ったゼンゴの刺身にテン普拉、弥栄子が持参した太刀魚の煮付けなども含まれていた。

「メグミちゃん、刑事になったんちなえ」と弥栄子がビール片手に訊く。

「うん」

「ほんなら今大変じゃろう。こげんとこでのんびりしとっていいんかえ」

「そうなんよ」

「でん、おかげで墓掃除をすませてくれたしなえ。いちこんもねえ

わ。メグミちゃんが大人になったけん、もう安心じゃなあ、ジイちゃんもバアちゃんも。ウチも肩の荷が下りたわ」

おタネバアがようやく食卓に腰を下ろした。

そして小指を立てていう。

「それがどうもこれができたらしいんじゃ」

「えっ、ほんとう」

「あーもすかん。違うってば！」メグミは赤くなって、盛んに手を振った。

「それならおばちゃんに紹介してもらわんと」

「だからそうじゃないの！」

「女の子はねえ。心配なんよ。ウチも親になってようやくわかったわ。輝子が赤い髪をしたハナグリ（鼻輪）なんぞを連れてきたりしたらどげえしゅうかち、もうから考えるんよ」

「警察官なら、心配ねえわい」チカラヤンがいう。

「ほうじやなあ、警察官ならなあ……」

「わかるか。警察官も近頃ろくなやつがおらん。宇目に出没しよつたチカンは、警官じゃった。メグミにはしっかりしたのをあてがわんことには、死んでも死にきれん」

「もうそげな時代じゃないんよ、バアちゃん。心配いらんちゃ。メグミちゃんはしっかりしとるけん」

誰も構ってくれないし、チビたちは踊り厭いて、ひとりにはメグミに抱きつき、ひとりには食卓に並んだ鳥のから揚げをつまんで走りまわる。保育園児は母親の膝に乗って甘えた。

メグミは気になって何度もケータイを開くけど、あれから宮崎芳樹からなにもいってこない。

「メグミちゃん、事件のほうはどうなつちよるん？」弥栄子が訊いた。

「うん。それがね。見張つてた容疑者がおらんようになったらしいんよ」

「なんね。その連絡がきただけね」

「うん。そう」

「ウソいいんな。愛してるよ」とかなんとかいよったじゃねえか」
「バアちゃんな耳が遠いくせに、そんなしょうもないことは聞こえるんじゃないけん。冗談じゃん」

「うふふふ。まあ、そういうことにしておこうね、バアちゃん」

それから彼らは飲み食いしながら毎度同じ昔話に花を咲かせた。水入らずの団欒は苦しかった過去を笑いに変え、血族の情愛をいよいよ強くした。弥栄子の亭主がいればこうはいかないけど、鉾山技師の弥栄子の亭主は福岡に出張中だった。

夜も更け、飲み過ぎて具合が悪くなつたジイを奥座敷に寝かせて、親子孫三代が仏壇のある座敷に雑魚寝した。

その際メグミは弥栄子から耳寄りな話を聞いた。弥栄子の勤めるセメント工場にかつて勤めていたことのある保戸島の漁師が、また臨時で雇われることになった。そこで漁師小屋に置いてあつたゴム長クツが必要になり、捜したけどなくなつていたという。

みんなが、事件のゴム長と違うかと冗談をいつていた。刑事が聞き込みにきた時聞いた話と、確かによく似ているという。そのゴム長は以前務めていた時、定年退職の先輩にもらつたものだそうだ。

それは調べてみる価値があるなとメグミは思った。そこに今井孝雄の影がちらついていたりしたら、容疑はかなり濃厚になる。保戸島なら目撃者も期待できる。船で行くしかないし、狭い島内のことだ、よそ者は目立つ。

とにかく捜査本部としては、今井のアパートの部屋に捜索がさをかけたいの一心だが、そのきっかけがない。地域課の警官を個別訪問させても、せいぜい玄関から奥を覗き、ニオイを嗅ぐしか術がなかった。搜索すればきつとなにかの手掛かりを得られると、柳井警部補などはいきまいている。

今井が出すゴミはすべてチェックされている。行確班は、些細な交通違反でも見逃さない。だけど今井はボ口を出さない。きつと尾行されているのも承知で、今回宮崎らをまいたのかも知れない。バ

イクで十数キロもある乙見ダム付近まで出かけたというのがー普通そんな遠くへはクルマで行くだろうーバイクといっても124CCのスクーターなのだ。

そのきっかけが得られるかも知れないとメグミは興奮した。得てして、寝床で考えることは素晴らしく思えるものだが。

粘着テープからなにか手掛かりが得られると期待されたけど、確かに友達の会社が使っているのと同じ業務用のテープだったけど、それと今井孝雄を結びつけるものはなにもなかった。

黄色いポリ袋にしても、市が使用しているゴミ袋とはなんの関係もなかった。敢えて関係があるとすれば、「そういうしつかりした素材の、中味が見えない、そして目立つ色のポリ袋がある」というヒントにはなったかも知れない。

事件に使用されたのは「九〇リットル用で、厚み0・02ミリ×幅900ミリ×深さ1000ミリのまちなし、持ち手なし」で、製造されたのは大阪の「山澄化学」とほぼ断定された。けど、そういうのはどこからでも手に入る。一個口 五〇〇枚入り からでもネット販売されている。

捜査本部は焦っているのだ。いよいよ自分の手中にある手掛かりが光彩を放って、メグミは興奮のあまり眠れなくなった。

幼い頃は伯母が色の黒い自分を冷たい眼で見ているような気がして好きではなかったけど、伯母自身が今の自分と同じくらいの歳だったことを思えば無理ないと思う。

今は肉親というものがかけがえもなく有難く、その無償の情愛の中で育まれて来たのだとしみじみ実感できた。祖父母が愛おしく、伯母が愛おしく、イトコのチビらが愛おしく思えた。一番可愛がってくれた兵庫の伯母がここにいないのは淋しいけれど……。

そのような感傷に浸れるのも、本人は気づいてないけれど、宇宙の中心から外れた広大な無の空間に、新たな星が誕生しつつあるからだった。

やがて、急速に睡魔が襲ってきて、メグミを暗闇の底に引きずり

込むーすんでのところで、捜査会議の時、足立明君が描いた不審人物の絵をじっと見つめていた、別府署の榎原光子という子の姿が浮かんで、なぜか、彼女も孤独なんだという思いが、流れ星のように流れた。

少し遅刻して午前八時半過ぎに出勤した時には、刑事部屋はガランとしていて、中年刑事が一人いるだけだった。村上という三十代後半の頭の薄い刑事がちょうど電話中だった。

村上刑事は「わかりました」といって受話器を置いて、メグミを見る。

「おはようございます」といってメグミは壁付廊下側の隅っこの自分の席に向かいながら「みんなどうしたんですか？」と訊く。

「おまえ、呼ばれなかったのか？」

「自分は昨日休みでしたけど、何ですか？ 何かあったんですか？」
内心は昨日のことだろうという思いがありながら、それにしては課長も係長もないのは変だと思う。

「みんな大分の合同捜査本部に捜査会議に出掛けたぞ」

「えーっ、そうなんですか？」

メグミは取り残されたような、ハバにされたような気分になった。蒲江から佐伯市街に入った所で事故による渋滞にあり、遅れてしまったけど、それがかえって気持ちを昂^{たかぶ}らせていたのだがー真打は人を待たせてから登場するものだーそれがいつぺんにぺしゃんこになった。あの素晴らしい手掛かりさえも急に色褪せたものになった。

力なく宮崎芳樹の乱雑な机を見る。メグミの机から二列先の、板井部長刑事のうしろの席だ。

「みんな行っちゃたんですか？」

「ああ、あらかたみな行った」

「交通係長もですか？」

「トラさんか？ トラさんは本業が忙しいから行ってないだろう。下にいるんじゃないのか」

「じゃあわたしはどうすればいいんですか？」

「聞いてない。デカ長、課長にドヤされて頭に血が上っていたから、忘れたんだろう」

メグミは椅子にへたり込んで、頭を振った。今日は気分も新たにひつ詰めてシニヨンにした髪を、ポニーテールのように編んで、それをバレーリーナーのように丸めてある。

そうするとウナジが現れて「メグミちゃんはウナジが綺麗ねえ。断然この方が可愛いわ」と伯母の弥栄子が褒めてくれた。口紅なんかいらないほどナチュラルな赤い唇、リップクリームで充分だけど、紅を引いた。

「なんだ、おまえ、泣いてるのか？」

「泣いてなんかいません！」と喋ってはいよいよ頭を下げた。

「ははは。デカ長も罪なことするなあ。まあ、俺と一緒に電話番号でモスるか」

メグミは勢いよく立ち上がると、大股に部屋を出た。忘れたのではなく、わざとハバにしたのだ。昨日、署に電話したことを根に持って。

交通課の部屋には忙しい筈の吉賀巡查部長が、つくねんと机に座って書類に目を通していた。それが本来の姿なのだ。老眼鏡を掛けているので、急に年取って見える。

近づいて来る佐藤巡查に気がついて顔を上げる。

「なんだ佐藤、おまえ捜査会議はどうした？」

「おいてけぼりを食ったんです」メグミは眼を潤ませていう。「少し遅刻しただけなのに」

「そうか」

「わたし、なにをすればいいんですか？」

「なんの指示もなくか」

「そう。ひどいわ」

「指示がない時は自分の判断で仕事をすればいい」

「本当に？」

「そうだ。指示で動くようじゃ半人前。自分の頭で考えて、指示を

無視してでも動くようにならんと、一人前とはいえん」

「じゃあ、わたし、保戸島に行つてきます」

「保戸島？ 保戸島になにしに？」

メグミは伯母さんから聞いた話をかいつまんで話した。

「……ほう」と吉賀は溜息とも感嘆ともいえぬ声をだした。

「ですからこれから確かめに行つてきます、今井の顔写真は持つて
ますので」

「まて！」

「はっ？」

「何か忘れてはおらんか」

「なにをです？」

「刑事は必ず二人で行動する」

「でも、上には電話番の村上さんしかいないですから」

「ここにおるじゃないか、相棒のトラちゃんが」

前に続く

吉賀係長が署長室に行っている間にメグミはミニバトの用意をして玄関の前にスタンバイした。よその管内にPCを乗り入れることはご法度であるが、ほかの車両はほとんど出払ってないのである。

吉賀巡査部長と下川署長とは釣り仲間だから仲がいい。釣り船は吉賀が持っていて、下川署長とお隣の楠木消防署長ほか何人かで連れ立ってイカやイサキを釣りによく出かける。

吉賀はゴム長靴の写真を手に乗り込んできた。

「よし行こう」

メグミはゆっくり車を発進させた。私服で運転するのはなんか落ち着かないものだ。

「急に決まったんですか？」

「ああ、マルガイがひとり、身元確認ができたからな」

「えっ！ 本当ですか？」

「それに今井孝雄の姿が昨日から見えない」

それは先刻承知であるが、それならそうと報せてくれてもよさそうなものだと、宮崎芳樹を恨めしく思った。

「じゃあ、ガサ入れできるんじゃないですか？」

「ところがやつは、臼津葬祭に一週間の休暇願いを出している」

「ああ、そうなんですなあ……」

辻のロータリーのところで元同僚の婦人警官が交通整理をしていた。

「おまえ、昨日休みだったのか」

「はい。墓掃除をしていました」

「そうか。感心だな」

「身元が割れたマルガイはどこの人だったんですか？」

「名古屋」

「えーっ。そんな遠くの人がどうして？ どうしてわかったんです

か？」

「手術痕からな。胸に穴を開けて、冠動脈のバイパス手術をしていた。今じゃ、家族のDNAから簡単に本人確認ができる。便利な世の中になったもんじゃ」

「旅行かなにかでこっちにきていて？」

「その辺はまだわからん。元刑務官としかな」

「刑務官……ですか」

「名古屋刑務所のな」

それからしばらく二人は黙った。トンネルを抜け、津久見市街へと下って行く。右手には、ピラミッドを意識したとは思えないように削り取られた石灰岩の白い山が聳えている。

軽自動車の中を走れるくらいの大きさの、石灰石を山から工場まで運ぶ丸い鉄管を三つ潜って市街に入る。

踏み切りを渡るとセメント町 今井孝雄の実家がある町である、三叉路を右に折れてすぐの左手に伯母の弥栄子が勤める太平洋セメントがあった。その広い門に乗り入れる。

右手の守衛所の前に作業服を着た色の黒い五〇年配の男が立っていた。それが保戸島の漁師、上田保であった。メグミが交通課から弥栄子に電話して、一〇時に門の所まで出てくるよういつておいたのである。

事情聴取はPCの中で行われた。

吉賀がまずゴム長靴の写真を見せて見覚えはないか訊いた。

「見覚えもなにも、そりゃわりや、わしのじゃがええ」と上田保はいった。

「間違いねえな？」

「間違いねえもなにも、こきキズがあろう」

と、丸いエンプレムの外側の丸についたキズを指でなぞるように指し示した。

吉賀が大きく息をして、メグミは可愛い小鼻を膨らませた。ゴムのようにキメの細かい皮膚が汗を滲ませて光っている。

「ほじゃあ、これがのうなったんをいつ知ったんかえ？」

「こん前じゃ。四日ん月曜じゃ」

「いつ頃からそき置いちよったんな？」

「そうじゃなあ……三、四年も前かなあ……」

「この男に見覚えない？」とメグミが隠し撮りした今井孝雄の写真を見せた。

上田保は首を傾げて見ていたが、「こりやわりや、火葬場ん兄ちやんじゃねえな」という。

「保戸島で見なかった？」

「島じゃ見らんけど、そこんビデオ屋じゃよう見かけたで」

「わりいけど、小屋ん場所教えちくれんな？」

「そら、かんまんて」

「中のぞいてんいいかえ」

「カギもかけちよらんけん、勝手にのぞきない」

といって上田保はメグミが差し出した落書き帳に簡単な地図を描いた。

二人は逸る気持ち抑えて上田保に丁重に礼をいい、津久見署の前を大きな顔で押し通って船着場に向かった。

マルシヨクの前の信号を左折して公園脇を入った所に、「やま丸」の船着場がある。白いマリンスターが接岸されていた。あまり大きくないけど、カッコイイ船だなと、メグミは思う。実家のボロ船を見て育っただけに。

直近に11時20分発というのがあり、待合室に数人が時間待ちしていた。まだ十一時になっていない。それらの男女と、受付の女子二人と、事務所の中の三人の職員、それに小柄な乗船係員の、全員に写真を見せて聴取するも空振りに終わった。

それは二五分間かけて渡った、保戸島の方の発着場でも同じだった。急傾斜にへばりつくように折り重なった人家すべてに当たる意気込みだったけど、早くも先行きが思いやられる。

とりあえず腹ごしらえしようと思った焼きそば屋で、初めてヒッ

トした。

「知るぐれえかえ、おどをが、初めてこき店を開いた時からんお得意じゃ」と老店主がいった。

「えーっ！」

「そらほんとな！」

喜ぶのは早かった。

「ああ、中学、高校生頃んこっちゃけどな」

「近頃は？」

「とんと姿を見せん。でん、少しも変わっちょらんなあ……」

腹ごしらえを終えると、二人は気を取り直して、沿岸部の民家に軒並み聞き込みをかけた。中央の船着場から左に向かって漁師小屋がある崖っ淵まで。

漁師小屋は釣り道具や網などが乱雑に置かれた何の変哲もない小屋だった。

「あーあ、ダメかなあ……」とメグミが弱音を吐いた。

「あきらめるのはまだ早いぞ。あと半分ある。今井にここの土地勘があるとわかっただけでも大収穫じゃ」といって吉賀はまた元きた道を引き返す。

「それだけではダメですかア」

「それだけじゃあな。せめて、最近ここにきた形跡がないと、ダメだな。あとひと頑張りだ」

やれやれ（大人はどうしてこう粘り強いんだろう）と思いながら、でももう自分も二十歳を過ぎた大人なのに、よだきい（面倒臭い）のは変わらないのはどうして？ 仕事が終わったらアイスクリームを三個食べてやろうと思いつつ、メグミは吉賀のあとに続いた。

結局、海岸端では収穫はなかった。吉賀もさすがにもう急斜面まで上がる元気はないようだ。肩で息をしている。時刻ももう一七時をまわっていた。保戸島発の最終便は17時40分だった。

疲れ果てて、発着場に戻り、二人はそこでアイスを食べながらぼんやり海を見て出発時間がくるのを待った。

そこへ津久見１７時発の船が学生を満載して入港してきた。嬌声が船から溢れ出てくる。

その一人ひとりに最後の聴取を試みる。そして苦勞が報われる時がきた。

「あ、こん氏、知っちゃん。知っちゃん」と女子高生三人組が騒ぎ立てた。

「夏休みに入る前じゃけん、七月の二二日だったっけ？」

「うんそう、その日」

「だよね」

その日のちょうど今頃、今井孝雄が大きなズタ袋を担いで棧橋に立っていたというのだ。

前に続く

勇躍、署に帰還したのが一八時半。

だが、蛍光灯が灯った刑事部屋には係長の柳井警部補と板井部長刑事しかいなかった。ほかの刑事たちはまだ駆け回っているのだろうか。

「ただいま戻りました」といって会釈し、メグミは自分の席に向かった。

係長席の前に立つて柳井と話し込んでいた板井が早速見咎めた。

「おい佐藤、おまえどき行ちよたんか？　こんクソ忙しい時に」

陰険な猪目ししめで睨まれた。メグミはこの小太りの色の浅黒い男が生理的に嫌いだった。

「はい。吉賀係長さんのお供をして、保戸島に行っております」

そういうように吉賀からいわれていた。

「保戸島に？　なんしいそげんとき行ったんか。上司に断りもなくおまえの上司はこんおれど」

「はい……でも……」

「それで君はどうして会議にこなかったんだ？」と、柳井が前に立っている板井を払い除けるようにして訊く。

柳井係長は吉賀係長と兄弟とは思えないほどの優男である。

「はい。昨日お休みをいただきましたので、実家に帰っております。朝こちらに戻る途中、事故の渋滞に巻き込まれたんです。佐伯で。遅刻してすいません……」

「それはいい。なら遅れる旨どうして連絡をよこさない」

「はい。すみません」

「あとからでも追い駆けてくればよかったんだ。君のお気に入りがお待ちかねだったんだぞ。山辺刑事部長に、今日はあの子　本当は色の黒い子　はこないのかといわれた」

「はい。それが……」

「前の日に寮に戻っておればよかつたんじゃ。そげなこたあ、いいわけにならん！」と板井が遮り、柳井に向かって「係長、こげなこつちゃあ困ります。うちの子を勝手に使われたんじゃ、こつちの立つ瀬がありません」

「——それで、保戸島にはなににしに？」

「はい。例のゴム長靴の件を調査しに行つてまいりました」
「というと？」

「津久見の太平洋セメントで働く臨時従業員がですね。保戸島の漁師ですけど。事件のゴム長と似たゴム長を紛失していたことを、最近知つたという情報に基づいて」

「ほう……その情報はどこから？」

「さあ、それは知りません」

そういうように吉賀にいわれていた。この大手柄はトラちゃんの手柄にしておけ。見る人はちゃんと見ている。神様はちゃんと見ているから、少々太めの神様だけど。

「それでどうだった？」

「はい。確かに同一のものでした。上田保という元漁師が太鼓判を押しました」

「なにっ！」

「そら本当か！」

「はい。しかも、事件発生三日前に、今井孝雄が、ゴム長靴を置いてあつた漁師小屋のある保戸島の桟橋で、女子高生三人に目撃されていました。今頃、鑑識さんが小屋で鑑識作業している頃です」

「そげんこつっ、係長！」

「あんやつがせまぎつち、そういうことをするんじゃ」

「わたしらの立場はどうなります」

「課長にゆうちやらな、ならん！」

その課長が部屋に入ってきた。

「おい！ おまえら、おおいこ大事じゃあ」

大きな頭を搭載した短軀が、たんく放屁のようにそれらの言葉を吐きな

がら執務机に向かった。ふたりも慌てて山崎課長のところに駆け寄った。佐藤メグミはようやく解放された。

自分の机に戻って、報告書を書きながら彼らの話に聞き耳を立てた。

「明日早朝に今井孝雄の部屋にガサ入れする」

「やっぱ本当だったんですか」

「誰に聞いた？」

「佐藤に」

「ああ、佐藤か」

「課長、こげんことされたらわたしら」

「ああ、わかつちよる。わかつちよる。これには署長も関わつちよることじゃ。気にすんな。なにしろ署長は、特別捜査本部副本部長のひとりじゃきい。トラちゃんはその差配で動いただけじゃ」

「ああ、そうですか。そうじゃろつ、そうじゃろつ。トラさんにしては出来過ぎじゃと思つた」

メグミは可笑しくてならなかった。世の中には度量の大きい者がいれば、料簡の狭い者、捻じ曲がった者、など色々ある、その人間関係の中をスイスイ泳ぐようにならんと、窮屈になるーと、吉賀の親父はいつた。

——そこへ。

「おーひよひよ」という声がしたかと思つたら、ドヤドヤと捜査員らが帰還してきた。

宮崎芳樹はチラリと佐藤メグミに一瞥くただけで、自分の席に着いた。メグミもそれは感じた。

やがて、雑然とした部屋に、山崎課長の重低音の一声、「よおし、みんな静かに！」が発せられた。

みんなが席に着いて静まると、山崎警部は佐藤メグミのほうを見て、「君ちよつと立って」といった。

なんのことかわからず、メグミはおずおず立った。眼の端に宮崎芳樹が首を捻じ曲げて見ているのが入っている。

「署長賞がでた。おめでとう。今日は遅刻したおかげで、儲けたな。だからといって、遅刻はいかんぞ」ポカンとしているメグミに「座ってよろしい」という。

みんなもなんのことだかわからない。金一封が課長から柳井係長に手渡され、柳井によって佐藤メグミのもとに届けられた。たいがい一万円が入っている。メグミは顔を赤らめて受け取った。

山崎課長は満足そうに手もみを始めて、かわりに柳井警部補が立つていう。

「お疲れのところ恐縮だが、これより、二〇時から、臨時捜査会議を行うことになった。署長も同席する。早く書類整理をして遅れないように会議室に集まってください。夜食はですす」

みんなから溜息が漏れた。

前に続く

会議では冒頭、下川署長によって、遺体の脚が入っていたゴム長靴の持ち主が判明したことで、その紛失とマルヒの今井義孝の関与が濃厚なことなど、吉賀巡査部長と佐藤刑事の活躍が報告された。鑑識による裏付けはまだ取れないものの、ー微物検査の結果がまだであるーゴム長は持ち主に見せて、確認済みであることも。

驚く捜査員らはこれで事情が飲み込めて納得。改めて恨めしそうに佐藤メグミを見た。「おれどろが会議に行つちよる間に、遅れちきちかり、調子のいいやつちゃのや」という声が聞こえてきそう、メグミは首を竦めた。

続いて山崎課長がいう。

「明日の朝六時にガサ入れするぞ。それから今井孝雄のバイクを見失った乙見ダム周辺から、青江ダム周辺までの山野を、津久見署や野津署、地元消防団などの協力もおおいで、犬を使って山狩りをやる」

捜査員らは正面の壁に貼られている大きな管内地図を眺めた。県道204号線沿いの東河野から上青江にかけては、俗に「世界の外」といわれる辺境である。西河野は野津署、上青江は津久見署管内になる。「姫岳 620 から碁盤ヶ岳 716 んねき 傍 まで」となると、こらやおねえなあ……」と誰かがいう。

「心配せんでん、諸君らは今まで通り、ガソリンスタンドを中心に道路端の聞き込みをしてくれりゃあい。そこでじゃ」といって、山崎警部は、「うちからも一名名古屋に出張してもらうことになった。遺体の脚の資料を携えてな。愛知県警の捜査本部が待ってござるそう。大分・別府からは三名行くそうだ」

捜査員らはささめいた。出張ともなると息抜きができる。とにかく歩き通しでくたびれていたから。特に若い連中は色めいた。

「その中に女性刑事が一人いて、やはり女性は女性同士のペアでな

いと、寝泊りするのに不都合が生じる。トラちゃんみたいに「ここにはいないだろうなと見回して、「もうトウキビ トウモロコシ ん枯葉^{はっぱ}んごつなっちしまえば、そげな心配はいらんけどな」

みんなゲラゲラ笑った。佐藤メグミはドキツとした。

「佐藤！」と警部が呼んだ。

「はいっ！」と反射的にメグミは立った。

「君に行ってもらう。これは署長命令でもある。君のペアの相手は、別府署の榊原光子というーそういえば年齢的にも似てるなあー女性刑事だ。これに、このほど担当になった地検の東浜明美検事が加わって、女性三人で行動することになる。だいたい一週間くらいの出張になるからそのつもりでしこ 支度 するように。詳しい指示はのちほど柳井係長からあるから。わかったな」

「はい！」

「よし。座つてよろしい」

みんなからブーイングの声が漏れた。ゾウガメのような下川署長と、深田の石仏のような山崎警部は、ニコニコした顔で佐藤メグミを見ている。

それから約一時間かけて会議は終了、弁当を食べて、三々五々刑事らは家路についた。メグミはそのあと柳井警部補から出張の段取りの説明を受けたので、帰りがみんなより30分送れた。

メグミは官舎に帰って、早速、伯母の弥栄子に電話した。おかげで署長賞をもらったことと、名古屋に出張することになったことを報告した。大そう喜んでくれた。

それから蒲江にも電話して、同じことを報告した。

「おまえ名古屋ちゃ、とうてん遠いところじゃねえか。一人で行っきんのか？」と、バアバは心配そうにいった。メグミは中学・高校の修学旅行に行っていないから、九州から出たことがないのだ。

「馬鹿にせんでよ。それに一人じゃないし」といって電話を切った。

前に続く

なんだか大変なことになったなと思いつながらメグミは旅支度を始めた。小学生の時に社会見学で雲仙指宿阿蘇に行ったことがあるくらいで、泊りがけで旅行など行ったことがない。だからバックからしてないのだ。

それをいうと、おそがけに津久見の弥栄子がキャリーバックを届けにきた。

「ウチのが使ってたやつじゃけん、男物だけどいいなえ。まだ新しいんで。いんね、大き過ぎるけんち、ほとんど使わんうちに、こんめえのに買い換えたんよ。女は色々着替えもいるし、これくらいないと」

黒色のキャスター付の大物だった。フレームもしつかりしたのが付いているので移動に負担がかからない。ちょっと大きいなと思っただけど、贅沢はいえない。中には色々と心尽くしの小物が入っていた。

「あんた朝が早いんやろ、ちゃんと目覚ましかけとかんと、寝過ぎしたら大変で」

「うん。でも、それより、ウチ、飛行機ちゃ乗ったことがないけん、そのほうが心配やわ。キップは乗る時渡すんやろか」

「誰と行くんな？」

「ウチと同じくらいの子と、検事さん」

「じゃあ、検事さんのする通りにすりゃあいいわ。そん氏は男氏な？」

「ううん。ふたりとも女」

「それなら、気兼ねせんでいいわ」

といいながらやはり弥栄子も心配そうにしていた。田舎の年寄りだけの家庭で育った子である。恥をかくようなことにならねばよいがと。成人式の日に、お祝いを兼ねてディナーをご馳走し、ナイフ

とフォークの使い方は一応教えてあるけど、見かけ外人なだけに、間違えたらシャレにならない。

餞別を少しやって弥栄子は帰った。

伯母が帰ったら、何だか急に淋しくなった。

（どうして署長は自分を指名したんだろう？）

女性刑事ならもうひとりおばさん刑事がいる。これからだという時に、自分だけ蚊帳の外に出されたような気がした。

でも反面、見知らぬ世界に出掛けるときめきはあった。自分だけが選ばれたという誇らしさもあった。若い連中からは羨望の眼差しで見られた。

そこで、宮崎芳樹の姿が思い起こされた。都合のいい時だけ電話をよこしてあとは知らん顔とは、やはり軽佻浮薄な男なのだ。

いつものようにビールを飲みたいところであるが、伯母ではないけど、寝過ごしたら大変。朝一番の電車で大分駅まで行く予定だった。大分駅で検事らと落ち合い、駅前のエアライナーから空港に向かうことになっている。

搭乗券その他の手配は総て整っていた。ということはもしかして、署長よりはもっと上の――まさか刑事部長の指名なのではないか――などという思いもチラリとした。

自分は不思議と年配者の受けがいい。学校の先生にもよくヒイキにされた。小学校の先生には「佐藤君のはいつも魚ばかりだな」といって、自分の弁当のオカズから牛肉やカマボコやチーズなどをわけてくれたし、給食が始まったら残り物をそつと空の弁当箱に入れてくれた先生もいる。中学では運動会の賞品の余りのノートやエンピツをくれた先生もいた。それらはみな欠乏したものだったから本当に嬉しかった。大商の美術部の佐藤先生には「君の絵は無限の可能性を秘めているな。仕上がりが楽しみだ」といわれていつも褒められた。だから恐くて完成したためしがない……。

ベットに寄り掛かってそんな思い出に浸っているうち、まだ旅支

度の途中だというのに 風呂にも入っていない、メグミはいつしかそのまま眠り込んでいた。

そして少しエツチな怖い夢を見た。

………？

あの火葬場の男に追い駆けられる夢だった。どんなに逃げて先回りして現れる。つかまえられたらどんな目にあわされるか想像しながら逃げた。というかわかっていた。逃げに逃げ、ようやく逃げおおせたと思ったら、いきなり目の前の藪から現れて、ドキツとしたところで目覚めた。

それからぼんやりした意識の中で旅支度がまだ済んでないことを思いながらも 風呂に入っていないことも、怖くなつて着ているものを脱ぎ散らかしてベットに潜り込んだのだった。

ベットに入ってから悪夢の余韻は続き、吉賀係長の話を思い出したーテッド・バンデীর話であるーそして自分でもその方面のことを調べたことが次々に頭に浮かんできて、メグミを脅かした。

そういう手合いは死体に異常な愛着を示す。テッドは切り取った頭部を持ち帰ったし、ジョン・ウエイン・ゲイシーは自宅の地下に何十人もの死体を埋めてコレクションしていた。エドガー・ゲインは殺した女の皮を剥いで、それで家具を表装したり、服地にして着込んで所有していた 彼は暴君だった母親になりたかったのだ。

それらのおぞましいネクロフィル 死体愛好者 や、ほかにモルドラストモルド 淫楽殺人ー殺人で性的満足を得る、モルドラスト殺人淫楽ー殺すまで性行為をする などの異常性愛者や、究極的には食べて所有するカリバリズム 食人症 に行き着く。

日本ではまだそういった異常者は数少ないけど、カリバリズムはいたし、ある犯罪者は少年の頭を切り取った瞬間に射精したと供述している。

勿論、彼女にそういった願望が禁圧されているわけではない。若い女性のリピードー 性本能のエネルギー がそういうものを材料ー たまたまそこにあつたからーにして夢の扮装を凝らしたのであ

り、自我が その正体があからさまになることを恐れたのである。
(……怖い夢見たな。なんなんだろう、縁起でもない)

とうとう眠れなくなってーそれでももう時刻は三時を過ぎていたーメグミはふんぎりをつけてシャワーを浴びに起きた。いつまでも怖がつてもいられない。これからそういった恐ろしい相手と対決しなければならぬのだ。身命を投げ打つてでも、足立明君や薫ちゃんを守らなければならぬ時がくるかも知れない。

「ーおい！ そこにいるのはわかってるんだぞ！」といいながらベットからしなやかな体を下ろして、「丸腰だと思ふなよ。これが見えないか！」といつても黒いショートツ一丁である。「スミス&ウエッソン・M37オートマチックだ。容赦しないぞ！」

と、伸ばした両手で銃の形を作り、腰だめに構えながら、カーテンを引き開け、押入れや、隣りの居間や、キッチン、トイレ、バスと、点灯しつつ、のぞき見る。

「お願いだから皮を剥ぐのはやめて……あたしのは少し黒いから。それにまだ経験ないし。きっとよくないと思う」

などといいながらバスタブにお湯を入れて、聞き込みで疲れた体をその中に横たえた。

風呂の中で三〇分間くらいうつらうつら舟を漕いでいたが、こくと首を折ったところで目覚め、シャワーを浴びたら、サッパリ本格的に目が覚めたようである。

鏡台に向かう。髪をどうするかでちょっと迷った。伯母さんに結んでもらった髪型は自分でも気に入ったけど、なにしろ面倒臭い。見てくれる者もないし、元のままひつつめて一纏めに巾着を締めようように縛った。バアバの巾着から五〇円盗ってアイスクャンデーを買い食いしたことがある。それでせいせいした。

あわただしく旅支度を整えて、フレンチトーストを頬張り、コーヒーを飲んでいると、目覚まし時計が五時を指してうるさく鳴った。ベッドヘッドの上に置いたそれを止めてもまだなにかうるさい音がしていた。

ケータイの着信音だった。タオルケットの上で地団駄を踏むように騒がしくしている。開いて見てメグミは驚いた。

「――おーひよひよ！ お目覚めでしょうか？ お嬢さん」

宮崎芳樹だった。

「ちよつとなんですか！ こんな早くに」

「起きてたの？」

「起きてますよ」

「寝過ぎすといけないと思って」

「そんな心配いりません！」

「電車は何時で行くつもりかな？」

「6時10分ですよ」

「それだと大分駅に6時55分に着いちゃうよ。待ち合わせは何時？」

「8時です。エアライナーが8時30分発だから」

「一時間もどうするのよ」

「遅れるよりいいじゃないですか。それに、もし間に合わなかったらそのあとの、6時33分に乗ろうかと思ってるんだから」

「それだと7時21分に着いちゃうよ。鈍行で4、50分もかけてどうすんのよ」

「ほつといてください。それになんですか、マルヒを見失ったあとどうなったかも報せてくれないで。気をもんだんですから」

「あれ？ 君、パソコン開いてないの？ メールしといたんだけどさア」

「えええ、どうしてわたしのアドレス知ってるんですかあ」

「これでも俺刑事だもん。それくらい調べられないでどうすんだようーな、ウソ。――ゴメン！ デカ長に散々ドヤされて、腹いせにこき使われて、腐ってんだよ」

「わたしが署に電話してチクツたせいですよね」

「そ、そうじゃないよ。なんにも君に腹を立てたわけじゃないよ」

「わたしだって散々イビられたんですから」

「なにも君にまであたらなくてもーあの親父本当に陰険なんだから。それにしても君、ラッキーだったね。みんな羨ましがってるぜ」
「わたし、今忙しいんですけど」

「わ、わかった。あとでまた、詳しい情報をメールするから。本部の会議のことなんか」

ふざけてばかりの男だと思ったけど、まともなところもあるんだとメグミは思った。

「駅まで車で送って行こうか」というのをー自慢のレクサスSCでー断ってタクシーで臼杵駅まで行った。歩いてもたかだか一〇分前後の距離、同じ官舎からそろって出掛けたら、みんなになにいわれるかわかったもんじゃない。

予定通り6時10分発の日豊線上りの鈍行に乗ったから、大分に7時ちよつと前に着いた。

天候はまあまああ天気。気温はしかしもう三〇度近いのではないかと思わせる暑さ。

駅の待合室の座席で持参したマンガ本を読んでいると、前に人がいる気配がしたので顔を上げる。と、ミント色のパンツスーツ姿の女が聳えるように立っていた。

（ーカッコイイ！）

会議の時にちよつと挨拶を交わした榊原光子という女性刑事だった。

「はあゝい」と照れた顔でメグミは相棒に片手を上げて挨拶した。

榊原刑事は日焼けした顔を心持ち緩めただけで、キャリーバックのフレームを押し込んでから、メグミの横の椅子にどっかりと長い脚を投げ出して腰を下ろした。

（なによ！ひとが挨拶してるのに……）と思う。（こいつ体躯会系だな）とも思う。

そこへ上品な顔立ちの婦人がカップコーヒーを両手に持ってやってきた。東浜検事だろうかと思う間もなく。

「コーヒーはいかが？」と差し出された。「それとも炭酸飲料水の方がよかったかしら」

「いえ、いただきます」

それにしては着てるものは普通のカジュアルなおばさんルック。榊原刑事にも渡して「検事さん遅いわねえ」という。

「いいからママもう行きなよ。遅れちゃうよ」と、かすれた低音で榊原刑事が初めて声をだした。

「駄目よ。検事さんにお世話になるんだから。ちゃんとご挨拶しておかなくちゃ。あんたハンカチにティッシュはちゃんと持った？」

（なんだ、こいつマザコンかあ……）

と、思っていると、「おたくは国際交流かなにかで？」といきなり振ってきた。

「は？——いえ」

「ママなにいつてるのよ、この子日本人じゃん」

「あら、そうなの？ 随分日に焼けてるのねえ……スポーツはなにを？」

こういう時いつもメグミは苛立ちを覚える。今回は、いつそドレツド・ヘアにしたるかと思っただ。

「わたし、文化部でしたから……」

そこへ東浜明美検事がゴロゴロとバックを引いて現れた。

（キヤア！ マジ？ 超美人だわ……）

「検事さん、いつも娘がお世話になってます」と榊原刑事の母親は検事に頭を下げる。

「あら、お母さんお見送りですか」といって検事も頭を下げ、まわりを見まわした。「臼杵署の佐藤刑事はまだのようね」という。

「なにいつてるの、目の前にいるじゃん」

「え？」

「お世話になります。臼杵署の佐藤メグミといいます」

東浜検事もまじまじとメグミを見た。榊原刑事は検事にタメ口を利いてるし、ふたりとも背が高くスタイルがよくて輝いてるし、な

んだか自分だけが田舎からでてきたような、高校の時感じたのと同じ肩身の狭い思いがした。

黒いビジネススーツ姿なのでいっそうそう感じた。メリハリでは負けていなかったのであるが。東浜 明美検事はベージュのパンツスーツ姿だった。

前に続く

大分空港からANA 10時55分発1852便 で中部国際空港まで約一時間の飛行だった。一二時過ぎにはもう本州のど真中に立っていたのだ。タラップを上ったり下りたりするのかと思っただけ、いつの間に機内に乗り込んだのかさえわからないくらいで、窓がなければバスや電車と大して変わらないとメグミは思った。

空港には県警の車が迎えに来ていた。それに大分空港で合流した本部一課長の高城警視と中央署の殿村部長刑事を加えた五人が乗り込む。高速道路や自動車専用道路を幾つか乗り継いで、四〇分かって名古屋市中区三の丸に着いた。

その間みんな口数は少なかった。東浜検事と榊原刑事がボソボソ話すくらいで、知らない人には殊更自分から溶け込もうとする佐藤メグミもーそうしないと誰も向こうからは近づいてきてくれないのだー山から往来に飛び出たイノシシのように戸惑っていた。

まず以って相棒の榊原光子がとつきにくい女だった。話しかけても、きりつとした顔をゆっくり上下させるだけで、手応えがない。東浜明美検事も自分から話しかけるようなタイプではなさそうだった。

息苦しいような沈黙の車中だった。助手席に乗ったメグミは見知らぬ土地をただぼんやりと眺めた。旅情をかき立てられた。

「君が佐藤君か」と車から降りた時高城警視が声をかけてくれたのは嬉しかった。本部の一課長に名前を呼ばれるなんて、それだけでも光栄だった。なのに警視は「大手柄だったな。部長も褒めてたぞ」といった。

「はっ？ーはい」メグミは赤面して下を向いた。

ちゃんと話が上まで通っていたのだ。榊原刑事はなんのことだろうという顔で警視とメグミを見た。高城警視は彼女には声をかけなかった。

法務合同庁舎内の名古屋地検に向かう検事とは一旦別れて、メグミらは名古屋城が間近に聳える県庁舎内の県警本部を表敬訪問してから、特別捜査本部が設置されている津島署に向かった。

途中、国道沿いのレストランで昼食をとった。食後のひと時、親父連中はタバコを吸いに一足先に店を出て、喫煙場所があるビルのロビーに行き、メグミと榊原光子刑事の二人が取り残されて、コーヒーを飲みながら寛いだ。まだ打ち解けない二人は視線を合わせることなく、所在なさそうにしていたが、榊原刑事がケータイで誰かと話し始めたので、そこでメグミは搭乗する際にケータイの電源を切っていたことを思い出して、電源を入れた。するとメールが三件も入っていた。どれも宮崎芳樹からだった。

なんだか救われた思いがした。自分から自分のケータイにかかるようセットしておいて、さも友達や彼氏・彼女からかかってきたかのように装おう孤独な連中がいるくらいだ。

一件目は10時12分――《電源を切つてると思うけど、大事件です。今井のバイクが上青江の山林の中で発見された！ その付近や青江ダムを大搜索中があります。本官も急遽向かう》

「やったあ！」とメグミは叫んだ。

そして、「えっ？ なになに……」

二件目は10時30分――《大事件です。今井孝雄のアパートの部屋のガサ入れから、彼以外の者の血痕を発見！ ああ、なんで君はこっちにいないの！》

「キャ！ なにこれ？ えっ！ マジ……」

三件目は13時25分――《今井孝雄の水死体を青江ダムで発見！ オーマイゴッド！》

「どうしたの？」榊原光子が見つめていた。

「これ見てよ」メグミはケータイを突き出して見せた。

前に続く（前書き）

他の小説が脱稿前だったのでそちらに心血を注いでいて、本作がひと月半ばかり間が開いてしまいました。

ので、ざっとこれまでのあらすじを述べさせていただいてから始めたいと思います。

――バラバラ殺人事件の犯人を知る為に、担当検事の東浜明美検事が同じ一覽双生児の妹・宵美に会いに拘置所にやって来るところから物語は始まります。

犯人も一卵性双生児の片割れで、二人に共通するのは良心がないこと。しかも妹の宵美は姉の自分に殺意を帯びた敵意を抱いてさえいることに絶望します。

そして、話はその一年前に遡り、バラバラ事件が発生したところから事件を追い、犯人逮捕に向かいます。

混血刑事の佐藤メグミと、犯人と深い係わり合いのある榊原光子刑事、そして東浜明美検事の三人が名古屋に出張して来て、いよいよ犯人の影を追うことになります。

前に続く

メグミと光子がメールを見て騒いでいると、殿村巡査部長が血相を変えて飛び込んできた。

「おい！ 君ら、悪いけど、ゆっくりしてもらえなくなった。行くぞ」

「えーっ」期せずしてふたりとも同じ声を出した。食事休憩は二時までということだったので、まだあと二〇分ある。

「もしかして今井孝雄の水死体の件ですか？」とメグミは殿村にもケータイのデイスプレーを見せた。

「ほお、情報が早いな。そうだ」

そういえば空港でも高城警視と殿村部長は それに東浜検事も加わって コソコソ話していた。彼らにも逐一情報は入っていたに違いない。

メグミは鼻が高かった。「もしかして、カレシ？」と榊原光子にいわれたことも含めて「うーん、違う違う！」と否定しながらも悪い気はしなかった。幹部と同じ情報を手にしていることがある。気後れしていた榊原光子の目の色が変わっている。東浜検事もいればよかったのと思う。

「なに？ どういうこと？ いつそんなに捜査が進展したわけ？

先だつての捜査会議では何もいつてなかったじゃん」歩きながら榊原光子が訊く。

「うん。知つての通り、行確はずっと以前からやってたけど。でも容疑が固まったのは昨日。それで今日ガサ入れしたんだ」

その大手柄は吉賀係長と自分である。それがなければガサ入れもないし、山狩りもしなかっただろう。バイクや遺体の発見は偶然によるしかなかった。少なくとも休暇願いが出されている一週間が過ぎるまでは。

「じゃあ、マルヒは捜査の手が身近に迫つたのを感じて逃げたわけ

だね」

「うん。それがね、……そうなのかなあ。まだ容疑が固まる前だったし……監視されていたのは感じていたかも知れないけど。

でも職場に一週間の休暇願いを出していたから、またなにかやらかす矢先だったのか、それとも逃げる為の時間稼ぎだったのか――そのところはよくわかんない。失尾してたのよ」

いよいよ宮崎芳樹の責任も重大になってきたなと思う。板井部長も頭を抱えていることだろう。

榊原光子は、佐藤刑事がどの部分で刑事部長に褒められるようなことをしたのだろうか、それを訊きたい風であった。

だがその機会もないままふたりは待っている県警の覆面車に乗り込んだ。

県警の刑事は屋根に赤色灯を貼り付けて、ひと唸りさせると、ヒステリックな音を掻き立てながら緊急走行で突っ走った。緊急走行には興奮させるなにかがある。天下を取ったような気分にもなる。

津島署の捜査本部になっている会議室では、県警本部一課長の三雲警視が先乗りしていて、所轄の警部や警部補ら――それになぜか警視庁の警部もいた――と彼らを待ち構えていた。

彼らが到着すると慌ただしく名刺交換がなされ、談笑しながら今度は地検の担当検事らの到着を待つ。

ほどなくして、ダークスーツ姿の名古屋地検の検事と事務官、それにベージュのスーツ姿も華やかな東浜明美検事らが到着した。

また慌ただしく名刺交換がなされた。名古屋地検の検事は小堀といい、その名の通り小柄で顔が顎に向かって細まっていた。チタンフレームのメガネが知的に見せた。事務官の方はでっぷり太った男で蟹江といった。ふたりとも三〇代半ばの中年。

コの字型に並べられた席に、大分県警サイドと愛知県警サイドの捜査員が向かい合わせに座り、正面の席には愛知県警の三雲警視と大分県警の高城警視が並び、警視庁の本母警部と検事らはオブザー

バーのように数の少ない大分県警サイドの末席についた。

そして午後三時に合同捜査会議が始まったのである。

まずは所轄の角田警部が、大分で遺体の一部 となって発見された元名古屋刑務所・刑務官の最上七男 四五歳の、基礎調査と失踪時の模様を語った。

それによると、最上七男の最終学歴は中京大付属中京高校で、卒業後名古屋市港区の住宅機器会社に就職したものの、三年勤めて辞め、刑務官試験を受けて名古屋刑務所の刑務官になった。

そして六年前に同刑務所内で受刑者が懲罰中に死亡するという事故があつて、それに係わつた三名の刑務官が特別公務員暴行陵虐致死罪に問われ、看守部長の最上もそれに連座した。彼が最も重い懲役二年・執行猶予三年の刑を受けて最高裁まで争つたが、今年の五月にそのまま刑が確定していた。

「最上七男が失踪したのが七月二〇日の二三時五四分です。勤めていた名古屋市中村区の建設会社の飲み会の帰り、名古屋から津島の自宅まで三人の同僚とタクシーで帰った。国道68号線を通つて七宝町でひとり降り、日光川を渡つた所でもうひとりが降りた。彼の家は諏訪町ですけど、古川町に寄る所があるからといって、藤江寺の方へ行く丁字路で降りたまま、そのまま消息を絶つた」

「その寄る所というのはどこか特定ができたんですか？」大分県警の高城警視が訊いた。

「それがようわからんです」角田警部が答える。「家族の者もその辺には知り合いない筈だと」

「すると最後に会つたのがタクシーの運転手で、その前が同僚ふたりということですか。その同僚ふたりにも心当たりはなかったわけですね」

「ええ。ほんだで、タクシーの運転手が車を旋回する時、藤江寺に向かう細い道に立つとる人影をちらつと見たとーその人物がもつかのところ唯一の手掛かりでして」

「ほう。どんな人物でした？」

「それが白っぽいツバ広帽を被ってサングラスを掛けとったから顔はよう見えなかった。服も白っぽい服で痩せ型長身、男か女かの判別ははっきりしないー」

メグミはドキツとした。足立明君が目撃した不審者に似ている！
「そうですか。会社のほかの同僚にも心当たりはないわけですね？」
「いや、それが、前の日に会社に女の声で電話があつて、これを事務員の女性が受けている。生憎最上七男は現場に出ていていなかった。夕方帰社した頃合いを見計らってまたかかってきて、最上が出て五分間位話していた」

「着信記録はどうでした？」

「それが生憎すぐ近くの公衆電話からでした」

「ふむ」

「それ以後のガイシャの足取りは？」

「それが神隠しにあつたようにぶつとりと、まったくつかめないままーです」

「車はどうでしたか？」

大分県警サイドから質問に割って入ったのは佐藤メグミだった。思ったことはつい口に出してしまう女である。それから恐縮し、臆面を見せて、首を竦める。みな視線を集めて。

角田警部はエラの張った顔を色の黒い女性刑事に向けた。

「……いえ、その怪しい人物の足はなんだったのかわなくて、思ったものですから。仮に拉致するにしても、やはり車でないと」

「いい質問だね。でも、なにしろひと月近く前のことですからね。常時その近辺に路駐されている車には当たってみましたがね。そういうのは持ち主の特定ができた」

「白い乗用車はなかったですか？ たぶんセダンタイプじゃないかと思うんですけど。遺棄現場近くの小学校で目撃した生徒の絵からするとそんな感じなんです。あまり当てにはなりませんけど。色が白かったというのは複数の児童の証言ですから、これは間違いない

と思います。残念ながら車種や排気量はわかりません」

「白いのんは、路駐のステップワゴンが一台とーこれはタクシーの運転手が丁字路で車をユータウンさせる際に、南向きに三、四台駐車してあったうちの白いそれだけを覚えていたんですわーほかには、そう、そう、その日の夜、すぐ近くの集会場の駐車場に、白いトヨタのベルタが駐車してあるのを、前の家の住人が目撃していた。どうしてそんな前のことを覚えているかというと、古川町の集会があつた際に、無断駐車の話が出たばかりだったから、気を付けて見ていたんだそうです。見かけたのは一〇時半頃、朝にはもうなかった」

「ベルタはセダンタイプですよ」と津島署の刑事が付け加えた。

思わぬ符合にみんなは隣近所で顔を見合わせた。

メグミはハンドバックの中から足立明君が書いた絵のコピーを取り出してみんなに見せるようにかざした。

「そしてこれが目撃者の少年が書いた不審者の絵です。小学校で目撃した児童らの証言によっても、衣装や姿を変えてましたけど、これによく似ています。先ほどの、こちらでの不審者ともよく似てますよね」

「いやしかし」と、愛知県警本部一課長の三雲警視が遮るように口を出した。「ダム湖で水死体で発見された容疑者とはー」

これを引き取って、高城警視が立ち上がったといった。

「この一連のバラバラ死体遺棄事件には複数の人間が関与している、かなり大掛かりな事件と見なければなりません。すでに四人が殺害されておりますが、まだまだ増えることだって考えられます。ひとりふたりの変質者による愉快犯的な犯罪ではなく、変質者が関与していることは確かですが、犯人からのメッセージによると、なにか目的を持った複数犯の広範囲に渡る事件だということです。そしてそれは、ある特定の人物に見せ付ける為のものかも知れません。ですから、殺害されたガイシャにはなにか共通点があるはずですよ。そしてその共通点が犯人らの動機ということになります」

「なるほど、そうすると、最上七男の身边に失踪者がいれば」と三雲警視が早合点した。

「いえ、そうとも限りません。共通点があるにしても、接点があるわけではないかも知れません。ある特定の人物――犯行声明では老翁ということになっておりますけど――その老翁とガイシャとは直接・間接になんらかの接点があるはずですけどね」

「うーん、なんだかややこしい事件だな」と三雲警視は腕を組む。

「ガイシャに共通点がるだけに、糸口が見つかれば案外早いんじゃないですか」と高城警視。

「ともかくそのツバ広帽の女――とっていいのかな、その共通項は気になりますね」と愛知県警サイドの筆頭にいる角田警部がいえば、「だな。早速こつちもその絵を拝借してコピーしてばら撒こう」と三雲警視がいう。

それから休憩を挟んで会議は二時間ばかり続いた。その間、榊原光子は男のように腕を組んで、長い足を投げ出して、なんの発言もなく、聞いていた。

それを小堀検事がちらちら見て、東浜検事となにやら小声で話していた。

最後に警視庁の本母警部が相撲取りのような巨体を起こして、コピー用紙に書かれた絵を掲げて見せた。

それがまた足立明君の描いた絵によく似た人物像だった。

前に続く

「うちの管内で起きた失踪事件の容疑者はこんな感じの人物でした。これはまず最初に目撃者が描いた絵です。ちゃんとした似顔絵はできておりますので、のちほどご覧に入れましょう。髪は茶色の長髪、服装はカーキ色のサマースーツ、ツバ広帽にサングラスという装いの、男でした」

「男？」

「男ですか？」

誰ともなくつぶやいた。

「すぐ傍で見た者がそういうのですから。まあ男女の区別がつけにくい昨今ですからな。実際にはパンツの中味をのぞいて見なきゃ早計にはいえない」

クスクスツと笑いが漏れた。メグミもそのひとりだった。ヒグマのような恐い顔でいうから可笑しかった。その時もう馴れ馴れしく隣の榊原光子の組んだ腕をつかんでいた。

その榊原光子はクスリとも笑わないでじつと腕を組んでいた。

それにしてもよく似ている。みんなはキツネにつままれたような顔でその絵を見つめた。

本母警部は続けた。

「失踪しているのは、とある大物代議士お抱えの運転手です。といっても、非公式な秘書兼ボディガードでもある、きわどい人物です。裏社会との繋がりも深いというか元々は右翼。自宅マンションからわずか一キロにも満たない距離の議員会館まで、歩いてお迎えに行く途中に行方がわからなくなって、家族から搜索願が出されております。」

一課の我々が出張ったのは諸般の事情からですが、そして極秘裏に捜査を進めている為、事件は公になっておりません。こちらさんや、大分県警さんの事件と関係があるかどうかはーいや、今自分

はあまりにも不審者の風体が似ているので驚いておるのですが――大分県警さんからいただいた試料と、家族から採取してある試料とのDNA鑑定次第です」

「失踪時の状況はどうでしたか？」と三雲警視が訊いた。

「先月の一五日、火曜日のことですが、午後の四時過ぎに、運転手の西塔氏は、奥方に見送られて、いつものように歩いて国会議事堂に向かった。二〇分もあれば着く距離ですから、いつも途中のカフェでコーヒーを飲んでからお迎えに、というのが日課になっていた。車は会館の駐車場に停めてある。」

そのカフェテリアで、この不審者とヒソヒソ話している姿がウエイトレスによって目撃されていた。ふたり揃って店を出てからふつとりと西塔氏は姿を消した」

「そのサイトウ氏ですけど、お郷里はどちらの方ですか？」と高城警視も訊いた。

「山梨県の笛吹市です」と本母警部は答えた。「元々は地元の大物議員秘書の子飼いの用心棒であつたのですが、議員が脱税事件で失脚し、元秘書官も自決するというようなことがあつてからは、同じ派閥の領袖に仕えるようになった。」

「元秘書官の自決？ 大野木元大臣の？――もしかしてその代議士というのは、あ・雨宮^{ていしん}廷臣先生のことですか！」と三雲警視が声を上げた。

「ええ、そうです」

中堅派閥の領袖である雨宮廷臣参議院議員のことを知らない者はいない。参議院のドンであることは知らなくても。政治に疎いメグミでも、山梨で起きた元政治家秘書の拳銃自決事件のことは覚えていた。六、七年前の中三か高一位の時だったけど、ニュースを見て恐いなと思った。しかし山梨の大物議員といえば金丸議員しか思い浮かばない。

「そのサイトウ氏ですが、関西方面に縁があるとか、住んでいたことがあるとか、そういったことはありませんか？」と高城警視が重

ねて訊いた。

「そいつはどうですかーどうしてです？」

「いえね、今お騒がせしている水死体で発見された容疑者の男がー
ーこいつは死人にしか興味の無い男でしたかー一時大阪に住んでいたことがあるものですから」

「なるほど。いや、今のところそういう情報は上がってないですな」
「そうですか」

「むしろ、ガイシャの最上七男氏の方が、刑務官でしたから、なに
かの繋がりが有りそうですね」と三雲警視がいう。

三者の会話をみんな黙って聞いていた。検事らはなにも発言しない。なにしにきているのだろうとメグミは思った。

それに小堀検事がちらちら榊原光子を見るのが気になった。中年
といってもシヤレていて若く見えるから、まだ独身なのかも知れないけど、なにもこんな時にナンパ視線を送ることはないと思う。しかも自分を通り越して見るなんて失礼しちゃう。

「男はみんなサカリがついた犬と同じじゃけん。見よそ。猫にまで
のしかかっちいきよろうが」

バアバの声が耳の中でした。

やがて、本母警部から不審者の似顔絵がまわされた。

まず最初が検事らから。しよっぱなから滞^{とどま}った。小堀検事が放そ
うとしなかったのだ。

やや暫らく待たされて事務官からメグミに手渡された。なかなか
のイケメンだった。外人のように彫りが深く、見ようによつては宝
塚の男役のようにも見えた。女物の衣装なら立派に女で通る。東浜
検事のようにふつくらした女らしい美人ではないが、外国なら立派
に美人で通るだろう。サングラスで目が見えないのは残念だ。

と思つて眺めていると、それがスツと消えた。隣の榊原光子に
奪い取られたのだ。

（なによ！ まだ見てるのにー）

榊原光子は食い入るようにそれを見つめた。心なしか顔色が蒼ざめて見えた。蛍光灯のせいではなく。

メグミはそれと彼女の横顔とを交互に見た。そして、手が震えているのに気付いた。

小堀検事がメガネを光らせてじつと見ていることには気付かない。その間も本母警部と三雲警視と高城警視の会話は続けられていた。

会議は一八時をまわった頃ようやく一段落したのだった。というのは、それからまた幹部らだけで打ち合わせを始めたからである。結局、名古屋のビジネスホテルに落ち着いた時はもう二一時前だった。

男子と女子にわかれて、メグミと榊原光子が同じ部屋になった。東浜明美検事は隣の部屋にひとりで。

男どもはお風呂のあとラウンジに飲みに行き、女三人はお風呂のあとは部屋で冷たいビールを飲みながら晩くまで話した。

そこで榊原光子の父親の事件のことを初めて知った。その時の担当検事があの小堀検事だったとは、またなんというめぐり合わせだろう。でも納得。

（榊原刑事にも父親　パパ）がいないのかあ……）
でもいたことはいた、高校生になるまでいた、そして彼女にはあんなに優しい美人の母親ママがいる。

自分にはクモザルのようなジイジと、オランウータンのようなババしかいない。いつ死ぬかもわからない危うげなふたりしか。

（父親――てどんなものだろう？）

と、床に入って考えながら横を見ると、隣のベツトで榊原光子が泣いていた。

前に続く

泣いているにしてはちょっと様子がおかしかった。

ダンゴムシのように向こう向きに丸くなって、舟を漕ぐように体を前後に揺すって泣いている。それがだんだん激しくなって、押し殺したような呻き声に変わった。

「どうしたの？」

「ーうう、うう、うう……」。

と、激しくなる一方だ。メグミはベットからすべり下りて、榊原光子の所へ行き、肩に手を掛けた。

「ねえ、どうしたの？」

顔をのぞき込むと、薄い上布団のへりを咥えて、痙攣していた。

「ねえ、どうしたの？ 大丈夫？」

ヒキツケを起こしたように白目を剥いて激しく痙攣している。

メグミはなす術もなく、隣の部屋に東浜検事を呼びに行った

検事はまだ起きていた。ベットに腰掛け、髪を解かした姿で書類に目を通していた。

ふたりが慌ただしく部屋に戻ると、榊原光子はけろりとした顔でベットに腰掛けていた。とろんとした目でふたりを見た。

「あれ？」とメグミは呆氣にとらわれる。

東浜検事はつかつかと榊原光子の所へ行つて横に座ると、肩を抱いて、「あなたまたクスリ呑むの忘れたのね」といった。

榊原光子はぼんやりした顔をしている。

「テンカンの発作なの。驚いたでしょう」と検事はメグミにいった。「クスリさえちゃんと呑んでればなんでもない病気なんだけど、この子忘れっぽくてー舌噛み切ったらどうするの！」

発作を起こすと、立っていればバタリと倒れ、泡を吹いて激しく痙攣する、口になにか入れてないと、本当に舌を噛み切る恐れのある厄介な病気である。でも発作はクスリでおさえられる。

病名を知ってるくらいで、そんな知識のないメグミは本当に肝を冷やした。こんな健康体そのもののような、立派な体格の榊原刑事にも、そんな弱点があったとは、氣後れしていただけに、少しだけ優位に立てたように思う。

でも悔しいけどやはりオーラがある。態度がデカイだけある。この子を見ていると、さっき検事に聞いた話が、元・東京地検特捜部検事の城島竜二という、この子の父親が、東浜検事が英雄のように語るその生き様がわかるような気がした。

（父親を失った悲しみはどんなものだろう？）

その父親をなぶり殺しのようにして そんなことがあるのだろうか 懲罰で死亡させた張本人が、今回両脚だけのバラバラ遺体で見された最上七男である。その捜査に娘が当たるというのもなんというめぐり合わせだろうか。

それにしても羨ましいのは、東浜明美検事と榊原光子刑事の仲のよさである。検事といえば県警幹部や県職幹部に匹敵するお偉い行政官、それに十も年上のお姉さまに向かってタメ口を利くとは許せないやつだ。

「うちら明日からどうするんだろ？」

何事もなかったように榊原刑事が検事に訊く。

「あなた達は捜査本部の連中と最上七男の身辺調査ということになるでしょうね」

「今井孝雄の写真を持ち歩いて？ でも最上七男との接点なんてありそうにないけどなあ」

「やってみなきゃわからないでしょう。それと例の不審者の絵。その謎の人物はきっと足跡を残していると思うわ」

「検事は？」

「わたし達は東京に行く」

「なにに？」

「うん。わたし達はわたし達で色々だね」

メグミは会話から取り残されていた。それを察して東浜検事が微

笑みかけていった。

「あなたなんですってね。遺留品のゴム長靴と今井孝雄を結びつける証拠をつかんだのは。偉いわ。それに、刑事になって間がないんですってね。積極的な娘だつて、山辺警視正が褒めてたわ」

メグミは赤くなつた。首まで赤くなつた。ジジ・ババのもとで育つたから世間慣れしていないのと、ひとりっ子で兄弟がいなかったから、年上の者、姉や兄に憧れを抱いていた。

それでも思つたことは口をついて出る。

「あのおう、ひとつ訊いていいですか？」

「なあに？」

「検事さんはどうしてあたし達と一緒にこちらにくることになつたのですか？　ようやく遺棄遺体のひとりの身元がわかつただけなのに」

「どうして？」

「はい。これはー考え違いかも知れませんが、検事さんつて、じつと検察庁舎にいて、補充捜査をわたし達に命じるだけだつて、警察学校で教わつたものですから」

「でも、お茶の間のミステリー・ドラマなんかでは、検事が積極的に第一線で活躍してるでしょ」

「わたし思ってますけど、本当は失踪している大物代議士の運転手の方に、興味がありなのではありません？」

「随分読みが深いのね。警視庁の警部は極秘裏に捜査をしているといつてたと思うけど」

「ええ、でも、検察の潜行捜査は定評があるとも聞いてます」

今度は榊原光子が会話から取り残されて慥然としていた。

「そんなことどうでもいいじゃん。明日早いんだから、寝かしてくんない」

検事とメグミは顔を見合わせて、苦笑いした。

（お前がゆっか）

朝食は一階のレストランでということだった。ロビーを挟んで中華レストランと和洋折衷の食べ放題レストランが向かい合っており、受付の横にはカフェテリアもあった。六時前だというのにそのカフェは異様に混んでいるのがガラス越しに見えた。

そこに二百万都市の活力を見た思いのメグミであるが、定評のある名古屋のモーニング・サービスで安上がり朝食を済ませている営業マンの実情を知らない。

早く目が覚めてしまった 五時には目が覚めた メグミは、シャワーと朝シャンを済ませて、死んだように寝入っている榊原光子を残して早朝の名古屋の街に出てみたのである。

朝の清澄な空気というものは何処いずこも同じ、目の前に巨大な世界一高い 二四五メートル 駅ビルが聳えているほかは、ビルと人間の取り合わせ、人通りの多さが目立つばかりで、異国情緒は湧かない。――のはやはり昨夜のあの重い話のせいだろうか。

傍目はためには羨ましく見えても、みなそれぞれ事情を抱えているんだなあとと思う。この街で榊原光子の父親と叔母さん――といってもまだ自分らと同じ年頃だった――が殺人容疑で捕らえられ、裁判にかけれ、ふたりとも獄死したという現実 叔母さんのほうは自殺だった、犯罪者とはいえ可哀想に、そんなのあり、それなのによく警察官になれたものだとも思う 血縁関係に犯罪者がいるとダメなはずである。

三〇分くらいでホテルに戻ると、ロビーの長椅子に腰掛けて、東浜検事と高城警視、それに殿村部長刑事の三人が話していた。少し離れた所の壁際では、警視庁の本母警部と榊原光子が立ち話をしてる。

上背が一八〇センチ近くはありそう大柄な警部に、身長では負けていない榊原光子の堂々たる立ち姿を見て、ふと思いついた。部屋

を出る時揺り起こそうとして、その寝顔を見て誰かに似てるなあと思っただけ、今思い出したのは、子供の頃、実家の居間の壁に貼られてあった赤茶けた昭和の銀幕スターのポスターだった。足が長くてカッコイイ、ふっくらした頬の引き締まった浅黒い顔。
(やっぱ男顔だわ)と思う。

自然メグミの足はそっちに向かった。妙な取り合わせに興味を抱いたからだ。

メグミが近づいたのも気にせず、「お前が城島の娘とはなあ……」と感慨深気に警部がいつている。

「覚えてる。傍聴席で見かけた」

「そうだったか？ うん？ ああ、あの、ひよろつとした小娘が？

ーお前か」

「おっちゃんも随分白髪が増えて、白熊みたいになったじゃん」

「こいつ！」ようやく警部はメグミのほうを見て、「お前ら今日は俺に付き合え」といった。

「そんな勝手できるわけないじゃん」

「まあ見てろ。この本母警部さまに逆らえるやつアあ、警察にはひとりでたつていやしねえってとこ、見せてやつから」といつて警部は豪快に笑った。

検察の城島か、警視庁の本母かといわれた、武闘派と、無頼派で鳴らしたふたりのことを、若い彼女らが知る由もない。

警視をつかまえて「おい高城」といった時に初めて、口先だけの男ではないことを知る。上下関係のキビシイ警察社会でよくもと、呆れた。

呼ばれてきた高城警視が「なんですかね、警部」と、変に低姿勢なのだ。

「この子達を今日は貸して欲しい。城島の娘とは因縁があつてな、ふたりだけだと、あんたらも気をまわすだろうから、この色の黒いねえちゃんも一緒にな」

「ええ、まあ、どっちみちふたりにはちゃんとした人を付けなけれ

ばとは思ってたから……」

「よし決まった。そうと決まったらメシを食おう。メシだ」といつてのしのしと和洋折衷食い放題のレストランに入って行った。

「随分態度のデカイ警部ですねえ」と、殿村部長刑事がいう。

「知らないのか。あの男は察庁の長官ともさしで話をする男だぞ」と高城警視が悔しそうにいった。

メグミと光子は顔を見合わせ、東浜検事はプツと吹き出した。検察でも有名である。城島元検事と並び立つ命知らずの男、国民の生命と財産を守る公安職において、命知らずは、階級よりも重いのだ。ヤクザや右翼に怖気て国民を守れないでは話にならない。

気の強さでは負けていないと思う吉賀係長が、一六〇センチそこそこしかない係長が、本母警部を見下ろすように反り返って見る姿を想像して、それは見物だろうなどと、でもひっくり返っちゃうと、メグミはニヤついた。色の黒いねえちゃんは余計だ。

光子のパパ・城島竜二元検事は、警部よりさらにタツパが高く、プロレスラーのように胸板が厚く、上背が一八五センチもあったと聞いて、のちほど警部から、メグミは改めて納得したものだ。

それに光子のパパはヤクザの血統だというではないか。親譲りの体格と、血統書付きの態度のデカさなのだ——にしてもよく検察官になれたものだ、またまた感心した。

トレイにご飯や惣菜を取り分けて席に着いていると、検事と光子もやってきた。

「早かったのね」と東浜検事がいう。「外に出てたのね」

「起こしたけど、彼女起きないんだもん」カレーを食べようとしている光子を見ていう。

「そうね。寝坊して、年頃の娘が朝シャンもしないなんて、カレシができないわけだわ」

「できないんじゃないよ。つくらないの。面倒臭いもん」

「でも、女子高では随分モテたんだってね。バレンタインデーにはチョコを山のように持って帰ってきたと、遼子さんがいつてた。ー

「佐藤刑事はどうなの？ カレはいるの？」

「えっ？ わたしですか」

いきなり振られてメグミはどぎまぎした。

「い、いません」

「ウソ。メールが入ってたじゃん」

「あれは……」

そういえば、タンポポの綿毛よりも軽い男からはあれからなにも
いってこない。まあそのうち「——おーひよひよ」といつてくると
は思うけど。

「まあ適当なのをみつくるっておかないと、検事さまのようによく
ら美人でも売れ残って店晒しになっちゃうかね」

「失礼ね。縁がないだけよ」

「三〇過ぎちゃうとさあ、男でも女でも結婚しなくなるらしいじゃ
ん。面倒臭くなるんだね。そしてすぐに四〇になる」

そんなことを話しながら食べていると、一斉に携帯電話が鳴り出
した。

メグミのはメールだった。宮崎芳樹からだった。

《今井孝雄の部屋から検出された血痕と最上七男の遺体からの血液
型が一致した。なお、ほかの三名はどこかほかの場所で解体された
ものと思われる》

というもの。相当慌てているのだろう、遊び心のある彼にしては
余計なことはなにも書いてない。それが少し物足りなかった。

榊原光子には母親からの電話、東浜検事には今の情報と同じもの
が地検の事務官らしき人物から伝えられていた。

前に続く

「だいたい警視庁はどうして今頃になって、うちの事件と運転手の失踪事件とを、結び付けて考えるようになったわけ？」

津島に向かう車の中で榊原光子が本母警部に訊いた。県警の覆面者にはリアシートに光子と警部が座って、メグミは助手席に座っていた。運転している刑事は青木という若い刑事だった。

「スジを読み違えていたからよ。西塔氏には敵が多い。てつきり裏社会とのゴタゴタだろうと思ってた。上の方もそう判断したからわしを起用したんだろう、まだ事件性をおわせるものはなにもねえ段階ですよ」

「じゃあ、最上七男と西塔運転手と、なんか関係があるということ？」

「そういうことだ」

「どういう関係？」

「それは今はいえねえ」

「なにそれ？　うちから情報だけ取って、そっちの情報は教えてくれないわけ？」

「まあそう慌てるな。そのうち教えてやる。まだわしらも半信半疑なんだ。それよりお前――」

「――その、お前というのやめてくれない。榊原光子というちゃんとした名前があるんだから」

「そうか苗字は旧姓に戻したのか。それにしても――」といって警部は光子をしげしげと眺めた。「民子という娘は色白でとても可愛かった。お前は父親似だな」

「ほらまた。それに、民子というのは伯母なんだけど」

「そうだったか？　ああ、そうだったな。城島の娘のわけはない。わははは、わしももう歳だな。妙な具合に記憶が混乱しちまう」

メグミはふたりの会話を羨ましそうに聞いていた。それにしても

榊原光子という子是不思議な子だと思った。誰とでも同じような調子で話す。ふてぶてしいというか、物怖じしないというか、妙にキモが据わっている。それがオーラなわけだけど。

「それでよく警察官になれたな」と、メグミも思っている疑問を警部が訊いてくれた。

「うん。何度兆戦してもダメで、あきらめてただけだね。父親が犯罪者というのがネックになって」

「それに祖父の代はパリパリのヤクザだったしな」

「違うよ！ テキヤの名門、侠客だったんだから！」

「ふふふ。それをヤクザというんだ。まあいい。それで？」

「ある偉い人のおかげでさあ」

「ほう。偉い人というのは？」

「警察庁の偉いさんだった人。あ、そうそう、今の警視庁の公安部長のお父君だつて」

「なに？ 公安部長の？ すると野島警視監のことか？」

「知ってるの？」

「知らないでか。だけど、野島警視監ならもうとくに定年退職しているはずだぞ」

「今は大分大学の名誉教授になつてる。でもまだ警察に影響力あるんだね」

「明治以来の薩摩閥の人だ。お前ひとり捻じ込むくらいわけはない。だけど、榊原刑事、お前をここによこしたのは誰だ？」

「山辺刑事部長だけど？」

「ヤマベ？ どういう字を書く？」

「山の辺」

「山辺か。山辺山辺、キャリアだろうけど聞いた名前ではないな。本部長は？」

「森田ー？」

「森田か。森田。知らんな。ふーむ」

本母警部は腕を組んだ。暫らく会話が途切れた。

ちょうど日光川を越えた所だったので運転手の青木刑事が訊いた。「どうしましょう、捜査本部に先に顔を出しますか？ それともこのまま諏訪町の最上七男の家に？」

「聞き込みが先だ」と本母警部はいった。

「ーもうさんざんうちが聞き込みをしている、なにも出てくるものか。」

という顔で青木刑事は車に残った。

三人は新興住宅地の一角にひと際目立つ豪壮な屋敷の門をくぐって入った。

まだなにもかもが真新しいように見える昔風の日本建築に、溪谷を思わせるような日本庭園。ヤツデやアオキ、センリョウ、マンリョウなどの植え込みと、熊笹が密生する黒竹の叢の間を、飛び石と玉砂利の小径こみちが玄関まで続き、黒竹越しに左手の車庫から黒い高級車の一部が見え、玄関脇の右手には頑丈な装備の犬小屋が見えて、中で黒い獐猛あゐじな眼差しの犬がうごめいていた。

なんとなく主あるじの気風と俄か成金趣味が色濃く感じられる屋敷を見まわして、本母警部は玄関のチャイムを鳴らした。

アポを取っていたのですぐに四〇年配の奥方が姿を現して三人を応接間に案内した。

家具調度も高価そうなアンティークもので趣向を凝らしており、なにからなにまでが下級刑務官の分を超えている。基礎調査によると父親も刑務官で、拘置所勤務の副看守長で定年を迎えているから、そしてまだ両親とも健在であるから、遺産を相続したわけでもあるまい。

七、八年前というから三〇代半ばの看守部長がこれだけのものを作成しているのである。

しかも株を担保に銀行から融資を受けているからまるまる借金によるものではない。トヨタ関連の優良株なので担保価値は今や借り入れ額を上まわっているという。愛知県警はもっかその株の出所を

追及しているところであつた。

奥方は年齢のわりには老けて見える痩せた女でおどしていた。それでなくても人相の悪い警部の顔をまともに見られない。コーヒ―を運んできてソファ―に座ると、震える手を膝の上で握り締めて、下を向いた。

無理もない。失踪していた夫があまりにもショッキングな姿で発見されたばかりなのだ。

本母警部は皮製のブリーフケースの中から不審者の絵と似顔絵、それに佐藤メグミが持ってきた絵のコピーを取り出して紫檀したんのテーブルに置いた。

「これらに見覚えはないですかね？」

最上千鶴子は横目でじつと見ていたが、首を振った。メグミと光子はその顔に見入る。

警部は今度は背広の内ポケットから写真を取り出して置いた。運転手の西塔氏の写真だった。平べったい顔に吊り上がったキツネ目の男。

これにも最上千鶴子は首を振った。

そこで榊原光子がシオルダーバックの中から雑誌の切り抜き写真を取り出してその横に置いた。

これは色褪せていて、しかも全身像なので顔が小さく明瞭ではない、

ところがこれを最上千鶴子はじつと見つめて動かなくなった。

そしてつぶやいた。

「……常本先生」

前に続く

ぐらつと榊原光子の体が揺れたのをメグミは確かに感じた。

しかし本母警部は少しも驚きはしないで、「この男は」といつて西塔氏を指し、「常本氏の部下だった男でね、奥さん。やはり失踪しとるんですよ」といった。

最上千鶴子は顔を上げて警部を見た。困惑と恐怖とでその顔は歪んでいた。警部が勿体ぶっていたのはこのことかとメグミは思う。どうやら光子のパパの事件と関係ある人物のようだ。

「ご主人と常本先生とは高校の先輩後輩になり、深いお付き合いだったんでしょう？」

「ええ。生前は色々と目をかけていただきました」

最上千鶴子の顔色が曇ったのをメグミは見逃さなかった。しかし常本氏が右翼団体主催者であり、いわく付きの男だったことは知らない。

「もしかして株の指南なんかも？」さりげなく警部は訊いた。

「ええ……まあ……そんなことも」

「常本氏は大野木元大臣の私設秘書だった。元大臣とのお付き合いはなかったですか？」

「大野木先生のことは存知あげておりましたけど、お付き合いはありません」

東浜検事によると、光子のパパ・城島東京地検特捜部検事は、その大野木大臣と刺し違えたということだった。詳しいことを光子の口から訊きたいと思っていた矢先に、彼女がテンカンの発作を起こしてしまったのだ。

「奥さん、ご主人が失踪直前に、会社に二度女の声で電話をした者がいる。二度目にはご主人が出て五分くらい話している。五分といえは短いようでも長い。仕事関係でない、プライベートで五分話す関係の女に、心当たりありませんか？」

「何度も訊かれましたけど、ありません」

「そうですか。じゃあ、もう一度これを見てください。姿や格好は扮装を凝らせばどうにでもなる、けど、体型と背丈はどうにもならない」といって警部は榊原光子を立たせた。「榊原刑事、身長は？」
「ジャスト一八〇」

「おお！　なんと。わしより三センチも高いのか。奥さん、こうまで高くはないけど、そしてこつも遅しくもない、痩せ型のひよろりとした長身の女ならどう？　一七五センチを超えるような女はそうざらにはいない。目立つと思うがねえ。あの和田アキコでさえそうも高くないんじゃないの」

「女性ですか？」

「ああ。声が女の声だったから」

腰を下ろした榊原光子がバックを開けたり閉めたりするのが気になった。なにかを取り出そうかどうかで迷ってるような素振り。

「女性と決め付けるのはどうかと思うんですけど」とメグミが口を出した。

警部はメグミの存在などまるきり眼中になかったかのように、今気付いたようにメグミを見て、「なに？」といった。

（恐い！）

「で、ですから、男声とか女声とか、あありますから……」

「じゃあ、お前らの不審者はどっちで搜索かけたんだよう」

「はい。一応性別不詳ということ……」

「それで網に掛かったのか？」

「……いえ」

「それ見ろ！　はつきりしないから、そういうことになるんだ。ここはパシッと女で」

「――男性なら、心当たりがなくてはならないですけど……」

「なにっ？」

「それくらいの身長で痩せ型でサングラスを掛けた面長長髪の若い男性なら二度見かけたのですが」

「ほう……」と警部は口を丸めた。

クスツと思わずメグミは笑ってしまった。そして睨まれた。首を竦める。

「どこで？」

「一度目は家の近くのスーパー駐車場で。でも、黒っぽいサマーソックス姿のイケメンでしたよ。黒い長髪に半分青いボカシの入ったメガネ、髻はうしろに撫で付けていて、薄っすら鼻髭もあって」

「ふむ」

「二度目は女友達との飲み会の席で。スナックのカウンターに座って飲んでた。みんなはホストだろうって、そんな感じでした」

「どちらのスナックで？」

「昭和町の『レオ』ですけど」

メグミが頭の中に書いていると、警部が睨んだので手帳を取り出してメモした。

「津島市の？」

「はい」

「いつ頃のことだね？」

「さあ、いつでしたか？ 主人が失踪する前、一週間以上も前でないことは確かです」

「そう。で、なにか会話はした？」

「いいえ。同じ日に二度見かけたから記憶に残っただけで、偶然なのかも知れせんわ。狭い町ですもの」

「そのことをご主人に話したかね？」

「いいえ。話してません」

「そのスナックでご主人に関する話題は出た？」

「ええ。もっぱら、亭主の悪口や愚痴が主でしたから」

「具体的には？」

「会社のこと、仕事のこと、あとは、まあ、たわいのない悪口でしたけど」

「ふむ」

「あのう……」とまたメグミが口を出した。「どちらが先にお店に入っただんですか？」

これはいい質問だった。警部も感心した顔をした。危うく訊きそびれるとこだった。

「その男はあとから入ってきて、先に出ましたね」

「ほかに気付いたことは？」

「うゝん」と最上千鶴子は将棋の駒のような顔で考えた。

「……そんなホストのような男なら、香水とか付けてたんじゃない？」

と、榊原光子がボソといった。

「あつ！　そういえば咲江がお手洗いから出たところで、いい香りがしたっていつてた。その男のあとに入っただのね」

「えっ？　女子トイレで？」と、これはメグミ。

「いいえ、男子トイレと女子トイレに分かれる所で。その香水が偶然にも、多希子の旦那が付けてる香水の匂いによく似てたっていつてたわ」

「なんという香水？」光子が訊いた。

「ランコム。メンネなんかいうの。でも多希子がいうわけではないから、当てにはならないけど。随分高いメンズコスメらしいわ」

榊原光子もそれを手帳に書きとめていた。

前に続く

昼食は津島署近くの定食屋で 親父の趣味だから仕方がない 済ませ、午後に捜査本部に顔を出すと、高城警視と殿村部長刑事もいて、三雲警視ら県警幹部らとひと塊りになつて話していた。

「なにかあつたんですかい？」と本母警部が訊いた。

「ああ、警部、ちょうどよいところに」と三雲警視がいった。「司法解剖の結果が出てね。ダム湖で発見された大分の容疑者だけど、自殺ともいえないようなんですよ。食道部からとんでもないものが出た」

「ほう」

三雲警視は高城警視をちらつと見て、「ゼラチン製硬カプセル剤を飲み込んでいて、なんとその中には薬剤ではなく、ホシからのメッセージが入っていた」

「なんだって！」

メグミと光子は顔を見合わせた。

「唾液だけで飲み込もうとしたらしく、カプセルが喉の奥の食道部に張り付いていた。おかげで胃酸に溶かされず、ほぼ原型を留めていて、入水直前に飲んだか飲まされたものと思われる。死因は水死。メッセージには――“亀塚古墳の石棺を開けてみよ”とあつた」

「カメヅカコフン？ セツカン？ なんだね？ それは――」

三人はぼてつとむくんだような三雲警視の顔をポカンと見つめた。そして揃つて男前の高城警視の顔にも視線を向けた。

メグミは、大在か坂ノ市かどつかその辺りにそういうのがあることは知っていた。光子は知らないのか、「そんなのどこにあんだろ？」とつぶやいた。

「大分市の東の外れに、あまへのきみ海部王の墓といわれる前方後円墳があるんですわ」と高城警視がいう。「五世紀前後のものらしい。ぼくは一度も見学してませんけどね」

「本物の石棺は盗掘で壊されており。レプリカが観光用に設えてあるんです。そのことでしょう」と殿村部長刑事が補足した。

「部長は見たことがあるの？」と高城警視が訊く。

「はい。子供を連れて何度か」

「上蓋は人力で、何人かで持ち上げられる？」と本母警部が訊いた。

「とおてん、とおてん」殿村部長刑事が大袈裟に手を振った。「いえ、人手では無理です。重機かなにかでないと」

「近くに工事現場があり、重機はそこから持ち出された形跡があったそうですわ。今頃はその重機を借りて、石棺の蓋を開けに掛かっているんじゃないのかな？」

メグミらはテレビが設置されていないのを残念そうに見まわした。

「じゃあ、そろそろ隣の休憩室のほうに移動しますか」と三雲警視がいった。

そこへタイミングよく青色シャツの女性警官が「始めました」といつてきた。一行はそろそろと向かう。

「ただ今重機が墳墓に向かっております」という地元テレビ局の女性リポーターの絵から始まって、切り開かれた森の中に忽然と姿を現した全長116メートル、高さ7〜10メートルの前方後円墳の全貌と、それを取り巻くようによく整備された公園や資料館などの空撮が流された。

地元にこんな大きな墳墓があったとは驚きであった。しかも、前方後円墳の幾何学的な姿がはつきりと望めた。

「普段ですと観光客や近くの園児や児童らで賑わう亀塚古墳公園であります。ただ今は規制されていて、警察関係者のほかはご覧の通り誰もおりません。我々マスコミ関係者もエントランス広場より先は入れませんので、空からの絵をご覧ください」

腕の先にハサミのような器具を取り付けた重機が、石英質の石積み墳丘に向かって、カニのように側道を上って行く。墳丘の角端には赤茶けた土器がぐるりと並べられて太古の墳墓の雰囲気を感じ

出していた。三段構築の墳丘の向こうには真つ青な太古の海が見える。

入ってはいけない丘に重機は入り込んで、東側第二埋葬部の石棺に向かつて行く。それを青いビニールシートと豆粒のような人影が待ち受けている。それらがズームアップされた。

やがて、重機が現場に到着し、土留め用の鋼矢板などを掘んで運ぶハサミを取り付けた腕を伸ばして、石棺の蓋を挟み、あっけなくそれを捲り上げて石棺の横に立て掛けた。

すぐさま係員らによってビニールシートで覆われたので、残念ながらも見えない。係員が上空のへりをつるさそうに見上げている。

画面は女性リポーターに代わり、「果たして遺体は置いてあったのでしょうか？ 犯人も同じようにして、近くの工事現場から重機を盗み出して犯行に及んだ形跡があるとのことですので、でも、頭のよい犯人のことですから、手のこんだいたずらということも、第一そんなに遺体が長持ちするものでしょうか、フェイクなんてことも、お見せできないのは非常に残念です。とりあえずスタジオにお返しします」といって、画面はコメンテーターなどが鹿爪らしい顔を並べたスタジオに切り替わった。

ブチッとテレビが切られる。

長四角のテーブルの周りに適当に腰を下ろした一同から溜息が漏れた。

「一体犯人グループは何人いるんだ！」と本母警部が机を叩いて濁声を上げた。所轄の四課住まいが長かった警部は、誰よりも声が大きく、所構わず大声を出す。ほかの者はビクツとした。

「死体愛好者から、今度は重機のオペレーターか……」と三雲警視も嘆息した。

制服姿も凛々しい若い女性警官三名がみんなにお茶を配ってまわる。

と、唐突に高城警視のケータイが振動音を発した。当の警視が一

番驚いている。

「ああ、わたしだ。なにっ！ 遺体は置いてあったのか！ 下半身が、また二つーだと！」

警視はみんなに説明するように向こうからの言葉をオウム返しにした。

「おお……！」とみんな驚きの声を上げた。

と、今度はメグミのケータイが、グローブの『レパーチャーズ』のサビの部分进行を歌い上げた。マナーモードにしてなかったのだ。しかも、着メロを替えたばかり。

みんなに一齐に睨まれた。

しかもいきなり、「ーおーひょひょ！」というみんなにも聞こえるような宮崎芳樹の声。

最悪だ。慌ててメグミは休憩室を出る。

「なんなんですか、いきなり」

「いきなりってー君、今なにしてたの？ おトイレとか？」

「テレビ観てたんです。お偉いさん達と一緒に」

「なんだ。君も見てたのか」

「遺体が出たんだってね」

「えーっ！ 本当。なんで君、もうそんなことを」

「ここには捜査本部副本部長の高城警視がいるんですよ」

「ああっ、そっかあ、そうだよな」

「もう切りますよ」

「ああ、ちよつと待って。でも君、今井孝雄の手帳が見つかったことは知らないだろう」

「それは知らない。どこでみつけたの？ 捜査本部が秘密にするんじゃない。当然、高城警視には報告がいつてははずだわ」

「ところがどっこい、池の鯉。恋する女はきれいさ、けっしてお世辞じゃないぜ」

「なんですそれ？ 郷ひろみの歌ですか」

「ぼくが見つけたんだ。ダム周辺の搜索の時。草むらの中で」

「ちゃんと上司には報告したんでしょね」

「板井のおっさんにかい？ ヤダね」

「じゃあ、先輩が？」

「ああ。これでいっきに名誉挽回さ。部長の野郎になんか手柄を横取りされてたまるかって」

「それになにか手掛かりになるようなことが書いてあるんですか？」

「うん。まあ共犯者かどうかはわからないけど、住所録がね。片っ端から、非番の時当たってみるよ」

「ちよっと、そんなの危険じゃないですか！」

「ちよっと、ちよっと、待ってよちよっとー ー女はいつもミス
テリー」

「——もう！」

前に続く

休憩室に戻ると、まだ高城警視は歩きまわりながらケータイで話していて、テキパキ指示を与えていた。みんなはお茶を飲みながらガヤガヤと話している。

「カレシからはなんて？」と光子がささやく。

「違うってば。同じテレビ観て、勝手に大騒ぎしてるだけ」

そこへ、「そのふたり」と、話終えてケータイを力チャリと閉じた高城警視がいった。「君らはもうホテルに戻って帰還の用意をしておきなさい」

（えっっ！）とふたりは心の中で声を上げた。（まだきたばかりなのに）

一週間の出張と聞いていた。不審人物の足跡を？みかけているところでもあった。榊原光子はあからさまにぶすくれた。

殿村部長刑事が彼女らの思いを言葉にした。

「我々はもう引き揚げるんですか？」

「悪いけど、ここはもう愛知県警さんをお願いして、我々がいても大したことはできないし、若いこの子らはかえってこちらさんの足手まといになり兼ねない。本来の目的である情報交換は終えたし、わたしだけ試料を持って先に帰るつもりだったけど、こうなっては」「そうバカにしたもんじゃないよ、警視。この子らはもうすでに大変な手掛かりを掴んでいるーの」の「かも知れん」

「えっ？」と高城警視は驚く。

県警の連中も聞き捨てならぬと、注目した。

「不審者だがー女ではなく、男かも知れない。それによく似た男なら見覚えがあると、最上七男の奥方がいうんだ。そいつが奥方に近づいて情報を取っていた形跡がある。今晚にでも裏を取りに行こう」と思っていたところだ。

どうもわしらは頭が硬い。固定観念でものを見る。姿や声だけで

判断してしまう。その点この子らは柔軟な思考をする。ボーダレスの時代の申し子だ。男も女も、そしてあの声明文じゃないが、神もサタンも区別がつかん、ミソもクソも一緒の時代になってきてる。神に祈りながら平気で人殺しをする、民族や宗教、宗派が違っただけで、女子供までみな殺しにする」

「どういう根拠で不審者が男だと？」

三雲警視がイラついて訊いた。今まで女ということを前提にして捜査してきたのだから、それをバカにされたようなもの。無理もない。

「すぐ傍にいた最上婦人を始め数人のご婦人方がそう認識したんだ。充分に熟れた目をしたご婦人方がね。しかも、そいつはメンズコスメをつけていた」

みんなは顔を見合わせた。

「だ、だからといって、たった今あなたがいったように」

「そう。だから、かも知れないといったんだ。あんた方は女という前提で聞き込みをした。だから、最上婦人は心当たりがないといった。でもこの子らは、男かも知れないという含みを持たせた。それなら心当たりがないでもないーということになったんだ。

人のことはいえない。わしもなにをバカなことをと、危うく叱り飛ばすところだった。実をいうと、わしがここにきたのも、その点が気になったからで、これでようやく合点がいった」

なにが合点がいったんだと、みんなは本母警部の顔を見つめた。失踪している代議士の運転手の試料を大分県警に渡して、ついでに三者の情報交換が目的だったはず。それがこっちの捜査にまで首を突っ込んで、大分県警の警視も警視だ、捜査員まで貸してやってーと三雲警視らは気色を悪くした。

険悪な空気。

「どうも変ですねえ」と所轄のメガネを掛けた中年の警部補が声を上げた。「連中はどうしてもツインにこだわりますねえ。これはもうなにか意味があるとしたか」

その空気を変えるにはよい発言だった。案外、場の空気を読んでの計算されものかも知れない。どこにでもいる宴会部長タイプの人のよさそうな警部補だった。

「そうなんですよ」と高城警視がすぐさま応じた。「声明文にもある通り、“世界の分裂”、“神とサタン”、というふたつのものを彼らは強烈にアピールしている」

「やはり老翁にですか」と、警部補。

「そう思われます」

「今回の遺体が今までの遺体の一部であることを願いたいものですな」と三雲警視。「あなた方も大変でしょう、国体を控えて」

そうなのだ。全国の注目を浴びる国民体育大会、開会式には天皇皇后両陛下を初め、大勢のお歴々が来賓としてやってくる。県は総力を挙げてこの国民的行事を盛り上げようとしているところである。その盛り上がりには水をさすようなことになり兼ねないのだ。

「最上七男の」と、本母警部が割って入った。「資産照会のほうはどうなってるのかな？ どう見たってありゃあ刑務官風情の分限を超えている」

「株で儲けたんだ。よい指南役がいたんだろう。それについては法的な問題が色々あって、そういうことは法律家にお任せしている、検事にね」

三雲警視がせいじっぽい態度のデカイ警部に階級が上であること——たとえ一階級しか違わなくても上官に無礼があってはならないことを、軍隊のように上意下達の厳しい階級組織にあつては、ひとりの上官に逆らうことはすべての上官を敵にまわすことになることを、胆に銘ずるよう語気に込めていった。

「検察官なんか当てになるもんか」と警部は意に介さない。「奴らは政治的判断で動くんだ」

比較的年齢に近い三雲警視と違って、十以上も年齢差がある高城警視は大先輩でもあるし、そうまではメンツにこだわらない。凶銃に向かつて行く勇気が自分にあるかどうかも疑問だった。本母警部

がシャブ中親父から子供を救った立て籠もり事件は、警察大学では語り草になっている。キャリアの彼は安全な所にいて、そういう命知らずな部下を頼もしく思う立場だった。

本母警部は榊原光子刑事を見た。そしていった。

「高城警視、彼女を東京に連れて行ってはいかんかね？」

「また、なにをいい出すんです」と警視はびっくりして、「どうして？」と訊いた。

「見てもらいたいものがあるんだ」

「彼女に？」怪訝な顔をした。

当人も驚いている。

「女の子ですし、ひとりで行かせるわけにはいきませんよ」

「黒いねえちゃんとセットでも構わん」

（ちょ、ちよつと、勝手に決めないでよ）と、メグミは慌てた。それに、黒いは余計だつーの！）

高城警視は携帯電話でどこかに連絡を取り始めた。

「高城だ。山辺部長を頼む」

という声が聞こえた。刑事部長に電話したのだとわかる。

警視は窓際のほうに離れた。

そして話終えてからやってきて、榊原光子にいった。

「君には、警視庁公安部への出向の辞令が下りている。第三課・第二公安捜査・第三係に、だ」

ぽかんとした顔で榊原光子は警視を見た。

高城警視のほうも同じように事情が飲み込めないで、イタチの屁でも食らったような顔をして、「帰還してから発令ということだったけど、君さえよければ、このまま本母警部と東京に向かってもいい」ということだといった。

「公安三課？」と聞いて驚いたのは愛知県警の連中だった。「といえば、右翼対策じゃないか」

「親玉は、若き警視庁のエース、公安部長の野島警視監だ」と本母警部がしたり顔でいう。

誰が彼女を警察官にし、誰が彼女をここによこしたのか、そして今また国家のお膝元に呼び寄せようとしているのか。

当人はおるかほかの誰も知る由もないが、本母^{ほんぼだけし}猛には今ようやく理解できた。時代が動き出したのだ。

明治維新以来歴代の警視總監を輩出した薩摩閥が、今再び丸文字の旗を掲げて、維新を起こそうというのだ。

隠然とした闇の勢力に向かって、この侠客の血統が力を結集してそれを成すというのか。

――この娘にそれを頼むというのか！

（城島、お前の娘が俺に死に場所を与えてくれるだろうか）

本母警部と榊原光子が見つめ合うのを、脇から佐藤メグミは見つけた。

前に続く（後書き）

これより榊原光子はほかの小説「ダークマター」のほうに出張してしまい、メグミとメール交換するくらいになります。

といっても、その「ダークマター」は二ヶ月近くも休載していて、当の光子は警察官にもなっておらず、弁護士助手として活躍している頃のまま、大急ぎでそっちも動かさねばなりません。

一度止まったものを動かすのはもの凄いエネルギーを要します、それは本作で身に沁みているところ。

もう細かいところはみな忘れていたのでどうなることやら……。

なお、本作においてはメグミと宮崎芳樹が見えない犯人と対決します。カオルちゃんや足立明君に危険が迫りますので見逃せません。

二泊ただけでメグミらは名古屋の空に舞い上がった。

榊原光子とは中部国際空港で西と東に分かれた。光子は本母警部と東京に向けて飛び立ったのである。せっかく友達になりかけたのに、残念なことであった。

それでも携帯番号の交換をしたからこれからも情報交換くらいはできる。

前の晩にホテルのラウンジで飲みながら、「一度家に帰ってからにしたら？」とメグミがいうと、「うるさいのがついてくるから」と光子はいった。

「ママさんのこと？」

「まさか」

（で終わっちゃうかな普通、説明してくれた方がいいと思うけど）

「身のまわりのものだっているんじゃないの？ 第一ママさんが心配するよ」

「親って、うざいだけじゃん。荷物はあとから送ってもらう」

「どうして？ 大分で起きた事件なのに、なんで東京に？ あの不審者に心当たりでもあるの？ もしかして、パパさんの事件に関係した人物？」

光子はなにも答えなかった。もうひとつの疑問についても答えない。光子はホテルに戻ってから二時間ばかり外出した。行く先も告げずにいつの間にかいなくなっていたのだ。最上七男の家に行ったのではないかとメグミが探りを入れたけど、「ここには色々と思いがあがあるからね」とはぐらかされた。

そういう頑としたところのある女だった。人のご機嫌を取ったり、人に気遣いをしたり、おもねることもしない。背骨が鋼鉄でもできてるかのように真っ直ぐな姿勢で、ちょっぴり憂いを帯びた引き締まった顔で、いつも心持足を開いて立っている。それは、いつな

ん時どこから攻撃されても即応できる体勢のように見えた。つまりスキを見せないのだ。

自分と同じくまだ刑事になったばかりなのに、警視庁に出向とは一体どういうことだろう？ しかも公安部とは？ 東浜検事も小堀検事と東京に行ったままである。事件の本来は東京にあるのだろうか？

という様々な思いを乗せて飛行機は大分に向かって水平飛行に移った。

臼杵駅に着いたのが昼前。一度官舎に帰って着替えと昼食を済ませ、午後から捜査本部に顔を出した。

捜査本部の会議室にはデスクの柳井警部補がひとりつくねんとしていた。

「おお！ おかえり。早かったじゃないか」

「はい。予定が変わりました。こっちが大変なことになってるのに、うかうかなんてしてられないということでしょうか。それにパートナーの榊原光子刑事が急に警視庁に出向することになったりしたものですから」

「そうだってなあ。普通は辞表を出してから改めて警視庁に再就職ということになるものだが。どうしてだろ？ そんなに急ぐ理由でもあったのかな？」

「はい。それがどうも、一連の不審者と彼女がなにか関係があるのかないのか、なんか変なんですよね。彼女が名古屋に出張するようになったのはともかく、警視庁に出向になるのは前もって決まっていたみたいなんですよねえ」

「高城警視も知らなかったらしいね」

「わたしは体のいい彼女のお供に過ぎなかったんですよね。危うく東京までお供させられるとこでした」

「ははは。そうでもなかるうけど」

「そうですよ。そうに決まっています。係長さんは、榊原刑事のお父

さんの事件については、なにかご存知ですか？」

「勿論だよ。大分市内に事務所を構えていた弁護士でもあったからね。城島東京地検特捜部検事の事件か……あれは気の毒な事件だったなあ……」

「といって柳井警部捕は、かいつまんで城島検事とその妹・城島民子が起こした殺人事件について語った。それは東浜明美検事から聞いたことと大して変わらなかった。

けど、柳井警部補はその事情に同情しながらも、シビアーに事件を見ていたのに対して、東浜検事は同じ検察官でもあった城島検事を明らかに身^{みびいき}贖して、思い入れを込めて英雄のように語った。

それによると、光子の父・城島東京地検特捜部検事は、政治家がらみの疑獄事件で、政界にのさばっていた巨悪を権力の座から引きずり下ろし、政治生命を絶った。その逆恨みを受けて、検事とその一族が刺客に狙われることになり、まず検事のアキレス腱である、一番可愛がっていた腹違いの妹が標的にされた。

妹・城島民子は、大学に入学して間もない頃、刺客に拉致監禁されて残虐の限りを尽くして痛めつけられ、切断された小指を使って強盗殺人の容疑者にまで仕立て上げられた。

家族もまた仕組まれた事故でひとり死に、ほかは重軽傷を負って、全財産を失った。

結局、追い詰められた城島検事と妹・民子はその刺客を殺してしまった。

「というなんとも気の毒な話であった。光子ら母子も一時は命を狙われていたというのだ。

「今のわたし達よりひとつ若い、二十歳の妹さんは、お兄さんの無実を叫んで、留置場で首吊り自殺したんですってね」

「そうだね。若い娘が下着でね。それで裁判所は、本当は被疑者死亡で公訴棄却のところを、妹のほうは緊急避難行為ということで、免責して無罪判決を出した。その分兄の検事に重い刑を科した」

「そして榊原光子刑事のお父さんは刑務所内で、懲罰中の事故で死

「なんですよね」

「ああ、そう。事故ではなく、暗殺だとか、色々騒がれたけどね。結局、関係した刑務官は、特別公務員暴行陵虐致死罪に問われただけで、それぞれ失効猶予が付いた」

「その元刑務官がバラバラ遺体で発見された。そして警視庁が秘かに捜査していた大物政治家運転手の失踪事件があつて、両方の不審者が似ていることから、しかも、その運転手は、城島特捜部検事が担当した疑獄事件の関係者の子分でもあつた。なので、検察や警視庁は、わたしたちの事件と関連付けて考えるようになった。東浜検事や名古屋地検の検事も東京に飛んで行ったもの。そういうことですよね」

「そういうことらしいね。詳しいことは、大分の捜査本部に出向いている課長が戻らないと」

「もし運転手の家族のDNAと、わたしたちのガイシャの誰かのDNAが一致するようなことにでもなったら」

「うん。そうなるこれは大変な事件になる。広範囲に渡る、奥行き深い、複雑な事件になるな」と柳井警部補は艶のある目でメグミを見つめた。時々そういう目で見られる。

メグミはホワイトボードに目を逸らし、「青江ダム湖溺死体事件」と「亀塚古墳遺体遺棄事件」の双方に貼り付けられた現場写真や見取り図、不審車両、不審人物などの書き込みを眺めた。

「青江ダム周辺の捜索では遺留品は見つからなかったんですか？」

「ああ。バイク以外はね。でもこれはまだ非公開だけど、今井孝雄以外の靴跡がふたり分見つかった」

「ええ〜っ、そうなんですか。じゃあ今井はふたり組にカプセルを吞まされて、ダム湖に突き落とされたってことですか」

「まあ、早計にはいえないけどね。ところで君、疲れただろう、中途半端だし、もう帰宅していいよ。ゆっくり休んで英気を養いたまえ」

「全然、疲れてなんかいません。報告書を書きながら電話番します」

「そうか。昼ごはんは食べたのか？」

「はい。寮でいただきました」

宮崎芳樹のことを聞きたかったけど、さすがに聞けない。あのお調子者は事の重大性をわかっているのだろうか。バレたらクビものである。

それよりなにより単独で動くのは非常に危険なことだとメグミは思った。

前に続く

その日は定時で上がったので、宮崎芳樹ら同僚刑事に会うことはなかった。

八時には津久見の弥栄子叔母の家にキャリーバックを返しに行った。お土産は名古屋名物の『大須ういろ』とチビ達へのちょっとしたオモチャ。上の子らは忘れた。まあいいわと思ったけど、ちょうどふたりとも家にいて、早速、「俺らはねえん?」「うちらいつもすぼん子じゃわ」といわれる。

「なにいよんのかえ、大けななりして。あんたらメグミ姉ちゃんとあんまし歳が違わんのから。ういろをもらって食べよ」と弥栄子がたしなめた。

「ごめん! ころつと忘れてたわ。また今度ね」まわりついてくるチビ達をあやしながらいふ。ふたりとももうメグミと大して変わらない背丈だけど、子供は子供である。迂闊だった。

「バックはあげたのに。でも男物じゃあれか。えらい、早かったんじゃないねえ」

「うん。予定が狂ったんよ」

「あげんことがあったからなあ」

青江ダムはすぐ近くである。地元では大騒ぎになっていた。

「大騒ぎしよる?」

「しよるぐれえかえ。あれちなえ、葬祭場の兄ちゃんも犯人ちなえ。仲間に殺されたんじゃろうか?」

「その辺はまだ、わからないんよ」

「でん、そこん実家にや大勢マスコミが詰めかけちよるんで」

家族は大変だろうなと思う。被害者の家族もだけど、加害者の家族も大変な目に遭う。

弥栄子の旦那も帰ってきて、みんなで夕飯を食べながらやはりその話題になった。好奇心の強い中学生の孝之などは、現場までチャ

りで見に行つた様子を自慢した。青江ダムは石灰岩の山の麓の谷間にあつて、高山技師の義叔父・常幸の会社のお膝元である。

「鎮南山から姫岳から碁盤ヶ岳にかけてまだ山狩りしよるようじゃな」常幸がいう。

「うん。その辺りのどつかに、遺体を隠しておく場所があるはずなんやけど」

「でん、この暑さじ、遺体もつかのう。まるままならともかく、頭・胴上下・脚・腕と五等分に切り分けられたものが。ハラワタも出ちよろうに」

「あゝもうすかん！ 父ちゃんな、ご飯食べよるにそんなこといわんでよう、気色悪い」と娘の輝子が顔をしかめる。輝子とメグミは顔立ちがよく似ている。

「保冷車ん中ならどげえ？ 凍らせたらもつじやろう。移動も自由やし」と孝之。

「さすが孝ちゃん、その通り。名探偵コナンばりに、いいところに目を付けたわね。でもなあ、今のところ、そんな車両はどこにも見当たらんよ。目撃情報もないし。それに、凍らせたら、解凍した時に、一気に腐敗が進むんよ」

そういいながら、ふとメグミの頭に浮かんだことがあつた。

（そうやわ！）

「ねえねえ、おいちゃん」

サンマのハラワタの苦いところが好きな常幸が、焼け焦げたサンマをほぐしながら顔を上げた。

「なんか？」度の強いメガネを掛けて、髪の毛も薄いから老けて見えるけど、弥栄子より三つ若いまだ三〇代である。

「あの辺に鍾乳洞のような洞窟はない？」

「鍾乳洞なら、近くの野津町に風連鍾乳洞があるうが」

「でもあそこは見物客が多いから、隠すのは無理。鍾乳洞の中は半袖なら寒いくらいだけど、ちよつとした洞窟でも、温度は低いけん」「そらそうじゃなあ。ないことはないけどなあ」

「わあ、本当！」

「俺もふたつ知っちゃん。上青江ん山ん中にある。探検したことがある」

「うちもひとつ知っちゃんで」と輝子もいった。「でもあつこにはカンジン ホームレス が住んじよってすかんで、女の子に悪さする」

「なんでんいいけん、あとで教えて」

石灰岩地帯である、未発見の鍾乳洞があってもおかしくないし、侵食された洞穴程度のものは無数にあった。さすがに鉦山技師の常幸は詳しい。

それらを小三の由里の落書き帳に書きとめて帰った。

一〇時過ぎに寮に帰って、久々にパソコンを開く。

新たな情報をそれに打ち込んでいると、ケータイがレパーチャーズを歌い上げた。

宮崎芳樹かと思ったら、意外にも榊原光子からだった。

「はあゝい！」

「ゴメン。もう寝るんじゃなかった？」

「ううん、まだまだ。今、事件のおさらいをしてたところ」

「亀塚古墳の遺棄遺体と、ほかの遺体との照合はできたの？」

「それが、うちとこの課長が合同捜査本部から戻る前に上がったから、どうなったのか。そっちはどう？ なにか？ めた？」

「こつちも、……まだ」

「今日はホテル？」

「うん。検事と一緒に」

「えゝつ、東浜検事と？ 検事はそっちでなにしてんだろ？」

「さあね。検察は手の内を見せない」

「名古屋地検の検事も？」

「うん。ふたりは今飲みに行ってる」

「ハバにされたわけ？」

「こつちからお断りしたんだ。うざいじゃん」

「小堀検事は随分……」ここでメグミは榊原光子をなんて呼ぼうか迷った。光子ちゃんと呼ぶほど親しくないし、榊原刑事というのも硬いし。「光子、ちゃんを興味深く見てたけど」結局親しみを込めてそう呼んだ。

「因縁があるからね」

小堀検事は城島兄妹殺人事件の担当検事だったからだ、今なら思える。

「公安部だと、もううちの事件と関係なくなるの？」

「組織上はそうなるね。でも、本母警部によれば、アプローチする方向が変わっただけで、同じ事件を追うことには変わらないって」

「そうなの」

「どちらかというと、檢察寄りの捜査だね」

「へー……そうなんだ。——あつ、いけない！ 長距離だということ忘れてた。電話代がー」

「構わないよ。ところでメグ、内密に頼みがあるんだ」

（メグーって、同い年なのに、先輩後輩でもないのに、それはないだろう。下手に出たら体軀会系はすぐこれだ）

でも、初対面で気後れして位取りに負けたから、しかたないかと思う、佐藤と呼ばれたら自尊心が傷つくけど。

カリスマ性を感じさせる低い声で榊原光子はいった。

「メモするものある？」

「うん、ある」

「じゃあ、いう通りの絵を描いて。いい？」

「オーケー」

「醤油顔描いて。髪はー髪はあとまわしにして、眉毛は普通、目は一重マブタで、やや切れ長に吊り上り気味、鼻筋は通って、口は薄い唇でややへの字型、両方の口角が上がって見える。鼻溝は深いほう。全体的には芥川龍之介に似たタイプ。髪型は色々に変化すると考えたほうがいいよ。身長は一七〇センチ、痩せ型で直線的にス

マート。腕を振ってアクション豊かに話す。時々両肘でベルトの辺りを揺するクセがある。その際片足を心持ち上げる……」

「随分細かいのね」 その動作は男性のアレの位置を整えているのではなからうかとメグミは思った。

「描いた？」

「うん、描いた」

「聞き込みの時、それを見せて。ほかの刑事には敵当なことをいつて誤魔化しとして」

「この人物が事件となにか関係があるの？」

「まあ、なんともいえないけど。――ああ、それから年齢は……二十代」

そういうと、榊原光子は、「じゃあね」といって電話を切った。
(なんだろ……?)

と、ケータイを閉じるのを待ってたかのように、また賑やかな音楽が。まだなにか?――と思って見ると、宮崎芳樹からだった。

「よい子は寝てる時刻だけど、悪い子はエロビを観てたりして」

「切りますよ」

「電話中だったけど、誰から？」

「そんなの先輩に関係ありません」

「でも気になるんだよな、こんな時刻に結構長話だったし」

「すぐ上の階にいてなんなんですか」

「じゃあ、これからお邪魔してもいい？」

「よくありません。疲れたからもう寝ようかと思ってたところです」

「そんな寝る前に話す相手って、どんな相手だろう?――なんて考えたらばく寝れなくなっちゃう」

「知りませんよそんなこと」

「明日さあ――」急に宮崎芳樹は真面目な声を出した。「ちよつと付き合ってくれない? 例の手帳の電話番号に片っ端から電話したら、気になる人物が出て」

「そんな勝手できるわけないじゃないですか」

「ところができるんだよね、これが」

それを聞いてメグミはやれやれと思った。

前に続く

土曜日だというのに休みなし。きっと明日の日曜日もそうだろう。別にいいけど、恋人もいないしーというわりには念入りに化粧してメグミは出勤した。

会議室にみんなが揃うと、課長の山崎警部がいった。

「おい、おまえら、えらいこっちゃぞ。まず、亀塚古墳の遺棄遺体の下半身じゃがな、これが乙津泊地の上半身と一致した。上野墓地公園の両腕とわしらんとこの両脚とは別物じゃがな。これでふたりの遺体が、頭部と両腕・両脚を除いて揃ったわけじゃ。」

しかもその一方は名古屋の元刑務官のもの、そしてもう一方の遺体じゃが、これがどうも警視庁が搜索していた運転手の公算が高いDNA照合はまだじゃが、血液型は一致、体型もよう似ちよる」

みんなから溜息が漏れた。これで事件は東京にまで飛び火した。まだ二遺体が残っている。腕の主と脚の主が。どこまで広がりを見せる事件なのか。

「そこでじゃ。本日より編成を新たにして臨むことにする。柳井係長！」

「はい！」と、柳井警部補が立ち上がって、編成表を読み上げた。

それによると、確かにメグミと宮崎芳樹がペアになっていた。大分の合同捜査本部詰めと、臼杵の捜査本部組にわかれており、宮崎・佐藤コンビは地元組だった。

どこでその情報を前もって入手していたのかは知らないけど、冗談じゃない、コンビだからといって抜け駆け捜査の片棒を担ぐのはゴメンだった。バレたら連座になる。そんな顔で宮崎芳樹の顔を睨んだけど、芳樹はヘラヘラしていた。

年頃の男女のペアなんてまずいんじゃないの、仕事にかこつけてなにをするかわかったもんじゃないーという顔で中年刑事連中は彼らを見た。若い刑事らはあからさまに羨ましそうな顔をした。柳

井警部補自体が、署長と課長による編成に不満気な顔をしている。

独身連中は、本人がまだ自分の価値に気付かずに、かえって引け目にさえ思っているうちになんとかものにしなればと思つていたところだ。トンビにアブラゲをさらわれるようなものだった。タンポポの綿毛のように、十里四方に無節操な種を撒き散らす男にかかったら。どういうわけか、下川署長がこの軽薄な男を買っている。

そのゾウガメのような下川署長が遅ればせながら姿を現した。

メグミと芳樹は吉賀交通係長の配慮で、ミニバトを借り受けて山狩りの現場に向かう。勿論運転はメグミである。制服のタイトスカートだと色っぽい膝小僧が見えてしまったりするけど、なにしろ刑事さまだから、ウグイス色のサマースーツでビシッと決めているのだ。宮崎芳樹はカーキ色のサマースーツに、こっちもノーネクタイで、シャツの襟をだらしく広げている。

与えられた仕事は、現場周辺集落の聞き込み。だけど例の洞窟探検のほうにメグミの関心はいつている。

そのことを芳樹に話すと、「うーん。なんつつか、君ってどうしてそんなにクレバーなわけ。どうしてそれを会議の席でいわなかったの？」という。まんざらお世辞でもないようだ。

「それは捜索隊の仕事ですから。そんなことは誰でも思いつくんじやないですか」

「いいや。誰も思いもしない。保冷車や冷凍庫のある施設にばかり考えがいつていた。現に、犬は道からせいぜい二十メートルくらいしか山の中に入っていない。またその必要もないけどね。犬の嗅覚からすると。でも谷川の中を沢伝いに行けばー」

孝之が沢遊びしていて見つけた洞窟は、ふたつとも青江ダム下流の、巨石がゴロゴロしている岩間にあつた。常幸義叔父のもひとつはそうだった。それはでも上流だった。

「聞き込みなんか放っておいてそっちを先にしようか？」と芳樹はいう。

「え〜っ。そんなことしていいんですかあ〜？」

「構うもんか。どうせ誰も見てないんだし、もう何遍も俺らがやったあとだもん。報告書は適当に書けばいいんだ」

なんだか相当いい加減な男だなあとメグミは思う。噂の通りだ。でも余程のことでない限り、先輩に追随するのは仕方のないことだ。お互い譲らなかつたら仕事にならない。しかしそれがあとになって後悔することになるうとは。

そんなわけで深田に向けていたパトの鼻面をひん曲げて旋回し、臼津バイパスからトンネルを抜けて津久見市街に入り、そこから鋭角に右折して青江に向かうコースを取った。

かつて何度も吉賀係長と通った路を、今度は若い男性を身近に感じながら、芳樹は隣に座っているから肩が触れ合うほどの近さなのだ、クーラーをかけているのに愛らしい小鼻は光っていた。

前に続く(前書き)

差し替えましたのもう大丈夫です。

前に続く

鎮南山山系と姫岳山系を源流とするふたつの谷川が合流する所に青江ダムがあり、そのダム湖から流れはひとつになって、県道204号に沿うようにして津久見湾に流れ出ている。

孝之が描いた図と常幸義叔父が描いた図を手に見ながら、ふたりは上青江の県道の広まった所にPCを停め、バス停の所から小道に入り、そこから道のない咽返るような草いきれの草藪に分け入って、ゴツゴツした岩を辿って沢に下りた。

早速気付かされたのは、身支度がなっていないということだった。イッチョウラのスーツのズボンには、たちまちクモの糸や草の実や埃が纏わり付いていた。

「あゝあ、こらダメだわ。こんなの付けて帰ったひにや、なにいわれるかわかったもんじゃない」ズボンの裾に引つ付いた無数の草の実 バカと呼ばれている を取りながら芳樹がいう。

「運動靴じゃないとダメね」顔を火照らせてメグミも足元を見る。

ローヒールの靴だけど、何度も足を滑らせて転びそうになった。その都度芳樹に助けられた。その際嫌でも体が触れ合い、手を握り合う破目になった。

若いふたりはワーワーキヤーキヤーいいながら、岩畳や岩から岩へと助け合いながら谷川を上り、まず一個目の洞窟ーといえる程のものではなかったけどーを発見した。孝之がいったように、山の斜面が抉れた^{えぐ}ようになった窪みで、中まで浅い水が入り込み、中央にこんもり堆積した砂の島があった。奥行きはせいぜい五、六メートルぐらいしかなく、奥に行くほど天井が低くなっていた。でも間口は広く、両サイドが岩畳になっており、ひんやりしていて、死体を置いておくには最適の場所のように思えたけど、そのような形跡はなかった。

天井を脚の長いゲジゲジが這っていて、キヤーッ！ なにあれ

？ とメグミが黄色い声を上げて宮崎の腕に取り付いた。といっても遠慮がちに軽く触れている。

芳樹は片目をすばめて苦笑いした。かつて付き合った女の中に、スーツの袖口を親指と人差し指で摘まむようにして必死に付いて来る女がいたけど 歩幅が違うから、女はこうでなくちゃいけない。ふてぶてしい女は蹴り飛ばしてやりたくなる。

（んふふふ）

「な、なんですか、ひとが恐がるのがそんなにおかしいですか」

「えっ？ いや、どうして？」

「鼻で笑ったじゃないですか」

「笑ってなんかないよ」

「いいえ、笑いました。いつときますけどわたし、脚が何本もある節足動物が恐いだけで、ヘビなんか全然平気ですから」

「あら、そうなの。それは失礼しました。うん、ぼくもゲジゲジは苦手だなあ。脚が長いのがねえ、なんであんなに長い必要があるんだろ。クモの仲間かなあ……、それより君、ムカデにあの何本もある脚でガシツと？ まれた時の感触って、あれー」

「キヤー！ もうやめてください」

「あははは。ゴメン、ゴメン」

宮崎芳樹はメグミを見ながら、かつてビデオで観た映画『パピオンの』の美しいシーンを思い出していた。カリブ海の島？ の海岸をしなやかに歩くスレンダーなふたり？ の黒人女。

青みがかった白目と、ビー玉のような透明感と輝きのある瞳、今時こんなに輝いた目をした人間はいない。みな不健康に濁っている。それに形よく反り返った唇。真っ白い歯。

（たまらんな、こりゃあ）

「どうしたんですか？ ひとの顔をそんなにジロジロ見ないでください」

「はいはい」

次のはそこから更に少し上流に遡った所の、川床から巨岩を足がかりにして岩盤をよじ登った所に、ポツカリ口を開けていた。

それは一番広い所で大人がひとり足から入れる位の大きさの、岩の裂け目といった感じの洞窟で、中は奥まで見通せないけど、小石を投げてみると、意外と広がりがありそうだった。

でも、ロープがないと、入る時はともかく、出れなくなる恐れがある。それに懐中電灯がないと奥のほうは暗いし、洞窟で恐れなければならぬ有毒ガスを検知する火もない。ふたりともタバコを吸わないのだ。

てなわけで、その洞窟は日を改めてということにして、義叔父の常幸が描いた図面の洞窟に向かった。

それはダム湖より上流で、姫岳山系を源流とする流れのほう、荒々しい巨岩がゴツゴツした山の斜面に、図面では描かれていた。

「その前にメグミちゃんお昼にしない？」と木陰の岩を指して芳樹がいった。

「あの、先輩、それはやめてもらえませんか？」

「えっ？」

「佐藤でいいです。ほかのみんなからもそう呼ばれてますから」

「ああ、それえ。なんで？」

「変に勘繰られるのって、イヤじゃないですかあ（それでも先輩は軽く見られがちなんですから……）」

職場内で付き合う時は、誰にも感付かれないようにするのが鉄則、そしてまたそうすることによって、秘密を共有している喜びを味わえる。みごとにみんなを騙してゴールインすれば、「信じられないうい！」ということになる。

（なるほど、そういうことか）と芳樹は納得。

しかしこの場合は単に、“馴れ馴れしくするな”という意味だった。「女は男で決まるんだ」「口の達者な男は特に注意せにや。男は三年三口といって、口数の少ないおとなしいのがいい」と、バアバにさんざんいわれて育ったメグミである。その一番の見本が傍に

いたから説得力があった。

知らず知らずのうちにそれが身に付いていた、身持ちの硬い女になつていたのである。今まで彼氏ができなかったのもそのせいだった。決して自分の価値を知らないわけでも、引け目を感じていたわけでもなく、実際は誇り高い女だった。

「ねえねえ、もっとこつち来ない」

ふたりは大きな岩の両端に背を向け合つて座つて弁当を食べていた。

「いいんです、ここで」

「ーカナカナカナカナ……」。

と、ヒグラシが鳴いて山はもう秋の風情だった。

食後休憩に川遊びをして、それから藪蚊に悩まされながら、姫岳側の急勾配の雑木林を上がつて、石灰岩の洞窟を見つけた。

入り口から一〇メートルくらいまでは人が立つて歩けるほどの岩の裂け目があり、それがふた手に分かれた所で狭くなって、人の進入を拒んだ。その奥に鍾乳洞があるのでないかといわれている。

そこでもしかし、人が侵入したような形跡は見られなかった。洞窟内ではメグミのほうがお喋りになった。

結局その日は、洞窟探検はそれまでにして、残りの時間を帳尻合わせに聞き込みに歩いた。

翌日の日曜日もやはり休みなし。

ふたりは秘かに装備を凝らして洞窟探検に向かった。

最初は昨日後回しにした孝之の二番目の洞窟から。ロープを使って芳樹が洞窟内に侵入した。メグミは外から補助した。

「どんな具合です？」

「うゝん、これは思ったより中は広いな。それに奥行きもある」
「気をつけてくださいよ。あまり無理しないで。ガスとかは？」

芳樹は懐中電灯のほかにライターとろうソクを用意していた。

「大丈夫なようだ。でも微かに風はあるようだぞ。奥のほうでは、外に通じた裂け目があるのかもーあつ、あゝっ！」

「ど、どうしたんです？」

「め、メグ、ミーちゃん！ ろうソク、ろうソクをもう二、三本投げて」

「佐藤ですってば」

メグミはろうソクを三本新聞紙に包んで落とした。芳樹はそれに火を灯して岩の上に置いて、洞窟内を明るくした。その様子が上から見える。

「火を焚いた跡がある。人が、人がいたんだ。コンビニの袋や、食べ物食い散らかしたあとの、ゴミが散乱している」

「先輩！ 危険ですから、すぐに上がってください。あとは鑑識の仕事です」

「……まあ、待つて。今は人の気配はない。もう少し調べてみよう」
「ダメですって！ 奥のほうに隠れているのかも知れないじゃないですか！ 丸腰なんですよ」

「いや、その心配はないよ。これはーたぶん、アベックの仕業だろう。これ見て」といって芳樹は、木の枝の先になにかを引っ掛けて、メグミのほうに差し出して見せた。

「なんです？ それ？」

「うん、つまり、あれだ、そのう……」

「よく見えない。もうちょっと近づけて」

「ほら、あれ、……薄いゴムでできたやつ、なんつか、そのー、まだ少し中味が残ってるーつつかそのう……」

「キヤーッ！」

メグミは顔をそむけた。

結局アベックが入り込んでいただけのようだった。奥のほうはトイレ代わりに使用されていた。

「信じられない！」

「君が近づけるってゆうから」

「なにもそんなもの見せなくなつて、口でそういえばいいじゃないですか！ 口で！」

「これでもぼくは結構ナイーブなほうなんだ。そんな露骨なことはいえないよう」

「いらないことはペラペラヘビのような舌を出していうくせに」

メグミの怒りは容易におさまらなかった。

さすがの女たらしの宮崎芳樹も手を焼いた。

可愛い女の子に、棒の先に乗せた毛虫を近づけて恐がらせる、少年の心理が働いたことは否めない事実だった。彼は自分でもいうように、少年のような天真爛漫なところがあった。

そこが女にモデル要因でもあったのだが、佐藤メグミには通用しなかった。

「わたしもう聞き込み捜査をしますから。あと五つの洞窟は捜索隊に任せますから」

そういつてサッサと、世界の外といわれる八戸^{やと}、河野^{こうの}の辺境集落に向かった。

「ちよつと待つてよ、ちよつと。メグミちゃん」

いつの世も男女関係は恋したほうが負けである。

月曜日の朝、突然、大分の合同捜査本部から召集がかかり、全捜査員が 応援は別 有り合わせの車両に乗り合わせて、大分に向かった。

さいわいまたメグミと芳樹はミニバトを借りて、管轄外に大きな顔で乗り入れた。

というのも、もしほかの連中と一緒に、覆面車や護送バスなどに乗り合わせていたら、会議の帰りに、ある所に寄り道するなどという勝手はできなかった。

そのことに関しては、宮崎芳樹は頑として譲らなかった。メグミも洞窟探検という抜け駆けをした手前、そう強くは抗え^{あうが}なかった。そして更にもうひとつ抜け駆けをしていたからである。

「それって、なに？」と芳樹が訊いたのを、「ううん、ちょっとね、気になるから」と、榊原光子に頼まれた似顔絵を、ついでに村人に見せて歩いたのだ。

ふたりは運命共同体になったのである。

「失職したら、君どうする？」と芳樹が訊き、「先輩は？」とメグミが返した。

「ぼくはー そうだな、家業の煎餅屋でも継ぐかな」

「わたしは漁師になる。釣り舟専門の。お祖父ちゃんもお婆ちゃんももう、歳だから」

「両親は？」

「いない」

「えっ？ そうなんだ……」

それ以上訊かれなかったのでメグミは答えなかった。

そんな会話をしながら中央署近くのレストランで昼食を取り、午後一時になったのを見計らってから、そこからわずかばかりの距離にある法律事務所歩いて向かった。

どういうわけか、芳樹が、ダム湖で水死体となって発見された、今井孝雄の手帳に走り書きされた電話番号に電話すると、「根岸法

律事務所ですが」という返事が返ってきたというのである。

ふたりはまだ、捜査会議で発表された、三人目のガイシャの身元が明らかになったことの、興奮から醒めてなかったけど、とりあえず目の前の疑問を明らかにすることに務めたのである。

前に続く

お目当ての「根岸法律事務所」は、法曹関係の事務所が入った小ビルが点在する閑静な中島地区の一角、白亜の三階建てビルの三階にあった。

受付の女性事務員に手帳を見せたものだから、硬い表情で弁護士が応接室に現れた。

「なんですよ？」と、三十代と思しい小太りの弁護士は名刺を取り出しながら、つぶやくようにいった。

「臼杵署の宮崎です」

「佐藤です」

彼らは名刺を持ち合わせてない。手帳が名刺代わりなのだ。

「井川います。所長に御用でしたら、今ちよつと出てますけど」

先ほどの若い女性事務員がお茶を捧げて現れて、「もう帰られる頃です」といつて去った。

芳樹とメグミは顔を見合わせ、所長の帰りを待とうかどうかどうしようか迷った。同じことを二度訊くのも面倒だし。見たところ井川という弁護士は、年齢はそこそこんだろうけど、一目で新米だとわかる初々しさがあった。

とりあえず、冷たい麦茶に手を出した。ふたりとも喉が渴いていたのである。

そこへ年配の女性事務員が顔をのぞかせて、「井川先生、お電話」といった。

「ちよつと失礼しますう」といつて井川弁護士は出て行った。

年配の女性事務員はふたりに会釈してドアを閉め「うう」として、「あらっ？」といった。「ううあなたは？」

メグミも気付いて頭を下げた。

（榊原刑事のおかあさん……）

「お知り合い？」芳樹が訊く。

「うん」

するとここは光子のパパ・城島元検事が辞職して開設した法律事務所だったところなの？ 光子がなんかそんなことをいつていた、母親が引き続いて働いているとか……そうすると、どこかで聞いたことのある名前だと思ったら、根岸というのは、もしかしてー。メグミが思考をめぐらせていると、榊原遼子が近づいて来て前に腰を下ろした。

「えーとあなた、なにちゃんだったかしら？」

「佐藤メグミです」

「ああ、メグミちゃんだったわね。光子に聞いたわ。随分お手柄を立てたんですね」

「いえ、そんなことはありません」

「ほんとにねえ、光子もあなたのようなお友達が傍にいてくれると安心なんだけど」

「遠くへ行っちゃいましたね」

「そうなのよ。警察官になるのだって反対だったのに、刑事でしよう。そして今度は公安だなんて。ほんとに父親に似て……危険なことにばかり……」

「公安部といっても、そんな危険なところじゃありませんよ、おかあさん」

「……子供時分から親に甘えたことのない子でねえ……どんどん大きくなって、どんどん遠ざかって行くばかり……孫を抱かせてもらえる日なんて、くるのかしらねえ……」

メグミは無性にこのおばさんが愛おしくなった。

「心配ないですよ。光子ちゃん、強いから」

「それがいけないですよ！ 男勝りに柔道なんかやって、九州に敵なしだなんておだてられてー福岡に田村という強い人がいるでしょうーあんなの軽量級だからお姫様抱っこしてしまえば、亀を裏返したようなもの、空中で絞め落としてしまえばーなんて大きなこといって、いい気になってるーメグミちゃんのような、可愛

い娘でいてくれたら、どんなによいか――国際交流かなにかで？」

「えっ？」

「ちよつと伺いますが」と宮崎芳樹が口を差し挟んだ。「お宅さまは榊原刑事のおかあさまで？」

「そうですけど？」

「こちらの根岸ともみ先生のことについて、少し伺ってもよいですか？」

「先生がなにか？」

「ええ」と芳樹は口ごもった。そして、「実は、臼杵のバラバラ遺体遺棄事件の容疑者、青江ダムで水死体となつて発見された今井孝雄の――」

といったところに井川拓馬弁護士が戻ってきた。井川弁護士は榊原遼子の横に腰を下ろした。

「今井孝雄がどないしましたんか？」

「ええ。今井孝雄の手帳に、こちらの事務所の電話番号が書かれてあつたものですから」

「えっ？　ほんまに？」

と、井川弁護士は怪訝な顔を榊原遼子に向けた。

「トシちゃんがいってた、妙な問い合わせ電話つて、あなただったの？」と榊原遼子。

「はい」

「どういうことですやろ？」

ふたりは心配そうな顔で宮崎芳樹を、そして佐藤メグミを見た。

「おふたりに心当たりがなければ、根岸先生にお聴きするしかないですね。事前にちよつと調べさせてもらったのですが、根岸ともみ先生というのは、以前こちらで事務所を開いておられた城島先生、つまり榊原刑事のおとうさまであり、あなたの元夫であられる城島元東京地検検事のもとで働いておられたんですよね」

「ええ。そうです」と遼子が答える。

「根岸先生は、希代の謀殺人といわれた青山^{てつ}姪^{おみ}臣の双子の姉でした

ね」

「ええ……」

「そこが解せないのですが、あなた方は本来、仇同士だと思うんですけど、その辺のこだわりはないのですか？」

「別にありません。根岸先生は尊敬できる方ですし、友達でもあります。光子は姉のように慕っておりますわ」

メグミは芳樹にもこういう真摯な面もあるんだと感心した。いつてくれればこれくらいの情報は教えてあげたのに。光子や東浜検事から聞いていたことだ。

「ところで、根岸先生は遠くへ出張なさることはあるんですか？たとえば名古屋や東京なんか」

「どついう意味ですか？ そりゃあ、ありますよう」井川弁護士が答えた。

「最近では？」

そろそろふたりの顔が険悪になった。

前に続く

と、そこへ、ご当人がふらりと現れたのである。まるで立ち聞きしていたかのように。

前触れがなかったわけではないのに、ふたりが唐突感を抱いたのは、あまりにもイメージが違っていたからである。無論それが今話していた根岸ともみ弁護士であることは、ブルーグレイのスーツの襟に光っている弁護士バッジですぐにわかった。

メグミも芳樹もつい見とれて挨拶が遅れた。

「先生、こちらの方々がお待ちかねでしたよ」といって光子の母親が立って席を譲った。

根岸ともみ弁護士のほうも暫らく無言で立ったままふたりを見下ろした。

（キャハッ！ 超イケ面だわ。カッコイイ……）

若いふたりはようやく気付いて立ち上がり、「臼杵署の宮崎です」「佐藤です」といって頭を下げた。

サマースーツの襟からライトブルーの大きなシャツの襟を出したすらりとした長身ー宮崎芳樹と同じくらいだったーの根岸ともみ弁護士は、「根岸です」といって右手でふたりに腰を下ろすよう促した。

その柔らかい声に、メグミは腰を下ろしてからハタと気付いた。

（えっ？ なに？ ああ、そうだった。女性だったんだ……）

なんだか妙な気分だった。芳樹も戸惑っているみたいだった。

彫りの深い外人のような顔立ち。栗色の髪が、面長の端正な顔を流麗に縁取って、前髪が左眼を隠すように垂れている。なのに一瞬イケ面だと思ったのだ。でもよく見ると凄い美女だ。

でも宝塚の男役のように、男を感じない。いや、女性だから男を感じないのは当たり前だ。でも、男前。

（ああもう、ややこしい！）

根岸弁護士は、井川弁護士の横に腰を下ろし、ソファにゆつたりと背をあずけて座った。長いズボンの脚を組んで、軽く組んだ両手を膝の上に置いてふたりを見据えた。

「なにか？」

「ええ……」芳樹は気圧されて、上ずった声を出した。「先生に少々お伺いしたいことがありますて」

「なんででしょう？」

そこへくだんの若い　　と思っただけ三〇はいつてるかもとメグミは思う　　女性事務員が、お茶を捧げて現れて、ボス弁の前に置いた。光子のママはいつの間にかいなくなっていた。事務員はちらちらメグミを見て出て行った。

「ご承知かと思いますが、臼杵事件の容疑者・今井孝雄の手帳にです。ね。こちらの事務所の電話番号が走り書きされていたものですか」

「手帳が？　それは初耳ですね。それはいつ押収されたものですか？　今頃どうして？ー」という感じを受けますけど」

「最近です」

「どこで？」

「それはいえません」

根岸ともみ弁護士は、若いふたりの刑事の中間に視線を据えている。恐い眼だなとメグミは思った。

前髪で顔を隠すのは心の中のかなかを隠そうとする心理の表れだと、いつか吉賀の親父に聞いたことがある。吉賀係長はそんな風には見えないけど、あれでなかなかの勉強家で、心理学を勉強していて、人の風貌や動作に表れる隠れた心理を読み取るのがうまい。

それからすると、根岸弁護士は額半分と片眼を髪で覆い隠そうとしているから、なにか隠したいものがあるのかも　　誰にだってあると思うけれど。ファッションでさえそうだといわれて、嫌な気分になったこともある。

現に自分がストリートパーマをかけているのは、みんなと同じよ

うになりたいという心理によるーといわれても仕方がない。そう
いって子供時分に、バアバに取り縋って泣いたからだ。チリチリの
毛が嫌で嫌でしょうがなかった。

そんなことを考えていると、いつの間にか根岸ともみ弁護士に見
つめられていた。

そして根岸弁護士はメグミにニツコリ笑いかけた。

破顔一笑で、それまでの硬質な顔が、恐い眼が、ウソのように消
えた。口角を上げて得意然とした少年のような顔になった。芳樹の
話では四十過ぎのおばさんだというのに、とうていそうは見えない。
三十前後といっても立派に通用する。笑顔は魅惑的だ。

その笑顔をメグミから芳樹に向けていう。

「それは興味深いことですね。その手帳、拝見させていただくわけ
には？」

「それはできません」

「そうですね。でも、そういわれても、こちらはどいつてよいか。
積極的に宣伝しているわけではありませんけど、一応看板を掲げて
ますからね。以前は無難な、信用ある方からの紹介案件しか受任し
ませんでしたけど、この頃はご他聞に漏れず業界も不景気ですから、
飛び入りのクライアントも引き受けることにしてるんですよ。たと
えそれが凶悪な犯罪者であっても」

「……」

「でも、その今井孝雄なる人物からの依頼はなかったですわ。そう
ですね、井川君」と、隣りの伊ソ弁にいう。

「はい。ありません」と井川弁護士。

「そういわれてしまえばどうしようもない。常套句を口にするしか
なかった。」

「失礼ですが、先生は最近ご出張には行かれましたか？」

「ええ、行きました」

「いつですか？」

「え」といって、根岸弁護士はスーツの内ポケットから弁護士

手帳を取り出して調べた。「先月の頭、七月五日から二三日までに
なってる……」

「どちらまで？」

「名古屋。そしてついでに東京まで足を伸ばしたの」

「ご用向きは？」

「一足先に弟の墓参りにですわ。お盆にはこちらの仕事が忙しくな
るから」

「弟さんというと、双子の弟さんですね」

「よくご存知ね」

「ええまあ」さすがに光子刑事の父親と叔母に殺されたなんていえ
ない。「墓地はどちらに？」

「本当は岐阜刑務所の無縁墓地に眠る母のもとに、と思ったんだけど、
なんだか刑務所に入れるようで可哀想だから、三河湾に散骨し
たの。だから三河湾を逍遙しょうようしながら偲しのんだのよー」といつても、離
れ離れに育ったから思い出なんてなにもないけどね」

言い訳だとしたら、うまい言い訳である。裏を取るのが大変だ。

「東京へはどうして？」

芳樹は執拗に攻める。質問が簡潔なのがいいとメグミは思った。
メモを取らずに頭に書き込みながら、根岸弁護士の表情の変化に注
目した。根岸弁護士は無表情で淡々としている。

「急に学生時代が懐かしくなって、それで滅多に出てこれないこと
だから、事務所のほうが気になったけど、井川君がよくやってくれ
ていたからー！ つい足を伸ばしてしまったのよ」

「あつ、うつかりしてました。足は、そこまでの足はなんだったん
です？」

「名古屋までは大分空港から飛行機で、東京へは新幹線、その外の
移動は電車だったりタクシーだったり」

「自家用車はお持ちですか？」とメグミが口を差し挟んだ。

「いいえ？」

あっけなく否定された。

でも疑えばきりが無いけど、白いセダンには運転手がいたのかも知れない。もし根岸弁護士が飛行機や新幹線を利用したのであれば、その運転手はセダンで移動したとも考えられる。行く先々で合流し、足となった。もっといえばそれで拉致した。共犯者は何人いるかわからないのだ。

しかし仮にベルタならそう何人も運べないだろう。四人も運べない。名古屋の失踪現場に、白いホンダのステップワゴンが路駐されていたことが、一瞬メグミの頭を掠めた。

でも、眼の前の女性弁護士がそんな大胆なことをするだろうか。だとしたら動機なんだろう？

さつき発表された三人目の遺体の主も、城島元東京地検特捜部検事に関係ある人物だった。もし仮に光子のパパが謀殺されたものなら、暗殺に係わった者が次々に報復されていることになる。

でも、根岸ともみ弁護士が報復する相手は、城島一族であるべきである。動機がない。むしろ、光子が犯人であるなら立派な動機がある。けどそんなバカなことは有り得ない。

でもなんだか眼の前の女は不審者と様子が似ている。黒っぽい衣服を着て、男のような髪型で、ヒゲを生やしたら、最上七男の妻らが証言したホストのような男になる。喋らなかつたら……。

（――でも？　――でも？）

芳樹はもう質問のネタ切れのようだ。麦茶を飲んで一息入れている。

メグミは思い切って不審者の絵を根岸ともみ弁護士の前に置いた。これは新聞でもお馴染みの足立明君が描いた絵だから、初めて見るものではないはずである。それでも根岸弁護士はじっと見入った。しかし表情は相変わらず無表情だ。

井川拓馬弁護士もそれに見入った。

そこでふと、もう一枚の絵のことを思い出した。それを見せようかどうしようか迷った。そんなに手の内を見せてよいものかという思いもある。

光子がいう通りに描いたのだから光子が描いた絵も同然。姉のよ
うに慕っているという根岸に見せてみたい気もした。

その気持ちのほうが勝った。

メグミはコピー用紙に描いたそれを広げてテーブルの上に並べて
置いた。

井川弁護士は興味を示さなかったけど、根岸弁護士は明らかに反
応を示した。

じっと見入ったのは同じでも、そこから発散される気のようなも
のがあった。

ゆっくり顔を上げて――前髪から透けて見える左目に心の内が表
れているようで怖い顔だった――「これは？」といった。

「このような人物に心当たりありません？」とメグミはとぼけた。

「……いえ」

「じゃあこれぐらいにして」と宮崎芳樹がメグミを見て切り上げよ
うとした。「先生、大変参考になりました。またなにかありました
ら……」

「ちょっと待って、光子ちゃんのおかあさんに話があるの」とメグ
ミ。

「じゃあ、呼んできましたよか」といって井川弁護士が呼びに行った。
根岸弁護士も出て行った。

入れ代わりに榊原遼子がやってきた。

「参考になったかしら」

表情は硬い。

「ええ。大変に参考になりました」

「だといいけど、それでなにか？」

不安気である。

「ええ、光子ちゃんから電話があって、元気にしてるからって、マ
マに会うようなことがあったら」

「あらっ？」と榊原遼子はテーブルの上の絵を見てつぶやいた。

「そういつて欲しいって」ウソでも方便である。

「これは……」

「この絵がどうかしましたか？」

「ああ、そういうことなの。光子が東京で竜平に会ったのね。それで竜平の似顔絵を。仲が悪くて、ケンカばかりしてたけど、やっぱり兄妹きょうだいだわね。ほほほ

「えっ？」

メグミと芳樹は顔を見合わせた。光子ママを安心させてあげようと思ってついたウソだったけど、とんでもないことになった。

前に続く

帰りは197号線から臼杵に向かった。

10号線から吉野経由で帰って部落の聞き込みにまわる余力はもうなかった。

「早く帰還して報告書類を書き、二〇時からの会議に備えよう。ほかのみんなも、乗り合わせできていたから、そうしているはずだよ」という芳樹に賛成。メグミも報告書類をたんまり溜めていた。

ふたりとも頭の中を整理するのはいっぱいで、帰りの車中は言葉すくなく黙り込んでいた。

鶴崎橋にさしかかった所で、「……どう判断したらいいんだろう」と芳樹がぼそつといった。「アリバイとかの状況からすると、限りなく疑わしいけどなあ……」

「心証は白つてことですか?」

「いや、そこまでは。でも、事件の残虐性と、あの美人弁護士とでは、あまりにもギャップがある。あの笑顔はいいなあ………なんというか、純真な、悪戯いたずらっぽい子供のような」

「ええ、ええ、その素敵な笑顔に悩殺されて、肝心なこと、聞き漏らしましたね、先輩」

「どういうこと?」

「だって、わたし達の事件のアリバイを訊かなかったじゃないですかあ」

「アアッ! ほんとだなあ。あららーなんてことだろ。ーでも、どうして君が代わりに訊いてくれなかったの!」

「実はわたしも悩殺されていたんですう」

「えっ? 相手は女性だよ?」

「先輩には女性にしか見えなかったですか?」

「当たり前だろ」

家族構成を知るために、ちゃんと戸籍照会をしてあった。しかし本当のところ、彼も最初は面喰らっていたのだ。

「でもわたしには時々イケ面に見えたりして」

「なに赤くなつてんだよう」

「わたし、面喰いですから」

完全にメグミのほうで優位に立っていた。芳樹をからかう余裕もあった。

「でも、突っ込みは鋭かったですよ。さすがだなあと思った。彼女時々恐い顔してたもの。なにかあるのは感じますよ。全然関係ないとは思えない」

「だよな。でも困ったなあ……裏を取るつたつて、東京や名古屋だろ。それよりヒョウタンから駒が出て、これがホンマもんになったら、えらいことだぞ」

「ですよねえ、冗談ではなく、枕を並べて討ち死にということに」

「そうなたら仕方ない。君の面倒はぼくが見てやるよ。——おーひよひよ！」

「イヤですっ」

もうひとつ問題があった。

「それよりあの絵だけど。どうして君が榊原刑事の兄貴の似顔絵を持ち歩いてんだよう？」

「彼女に頼まれたから」

「えっ？」

——光子の兄——光子ママは竜平といった——がこの事件に関係しているのだろうか？

絵を見て根岸弁護士の表情が強張ったのは確かだった。光子パパの時代からの付き合いなら、彼女が長男の竜平を知っていて当然だろうけど、驚きようが尋常ではなかった。恐いくらいだった。

今夜にでも光子に確かめようとメグミは思った。（でもビックリするだろうな）まさか自分の母親にまで見せようとは彼女も思いも

よらなかったらう。

しかも、自分らは彼女が姉のように慕っているという根岸弁護士に疑念を抱いているのだ。

そういえば、不審者の絵を見る時、いつも光子はボーとした目で眺めていた。

「榊原刑事の兄貴が絡んでいるとしたら、動機は充分だな。当時のメディアの記事をネットで調べたけど、城島元検事はなぶり殺しにされたーという酷い論調のものもあった」

「でもどうして今になってなんですか？」

「それは……背後関係がようやく明らかになったからかもーそう、あのメッセージのー“老翁も囑目せよ”だ、黒幕の正体は」
「劇場型犯罪で、壮大な復讐劇を演じているというんですか」
「だとしたら……ああーっ！」

急に芳樹が大声を出した。

メグミはビククリしてハンドルを揺らした。

「な、なんなんですか。おどかさないでください」

「これはえらいことだぞ」

「なにがえらいことなんですか？」

「もうすぐ国体が始まるな」

「だからお偉いさん達が焦ってるんですよ。山辺刑事部長が、いいえ、森田本部長までもが、影響を恐れて、ハツパをかけられたじゃないですか。本部長が捜査会議に顔を出すなんて、異例のことじゃないですか」

「そんなもんじゃないかも知れない……」

「どういうことです？」

「初めから連中はそこに照準を合わせているのかも……」
「……」

「国体には日本全国の注目が集まる。開会式には天皇后陛下を始め、勲章ジャラジャラのお歴々が居並ぶ」

「です……よね」

「老翁もくるかも知れない……」

「身分の高い人物——ということですから、そういうことも？」

「……そこでなにが起きるか……」

「なにが起きるんです？」

暫しの沈黙があつて——。

「——おーひよひよ！」

と、芳樹が雄叫びを上げた。

「ああもう、おどかさないで、つてば！」

「——生首を！ 生首を早く見つけ出さないと、えらいことになる」

メグミは、この天真爛漫な軽い男が、どうしてか、下川署長に気に入られている 自分もそうだと自惚^{うぬほ}れてもいた 一端を垣間見た
思いがした。

——案外、賢いやつかも。それが、想像力豊かなお調子者の、単なるバカか。

それにしても、三つ年上の兄がいるといつてたから、竜平は二四歳のはずである。そんな若輩者が、そんな大それたことを——仲間がいるにしたつて、中心には動機のある彼がいるはずである——成し得るものだろうか。

それに根岸弁護士がどう係わっているのか、彼女にそんな義理はないはずである。

メグミは城島——いや、榊原竜平という光子の兄がひよつとしてこの大分にいるのかも知れないと思つた。でなければ光子があんな絵を描かせて、秘かに頼み込んだりしないはずである。

「榊原竜平についても調べなきゃならない。これはもうばくらの手に負えないな」

「ですよねえ……」

ふと思つた。吉賀係長に相談してみようかと。吉賀係長なら咎め立てしたり、騒ぎを大きくしないで、うまく収めてくれるかも知れない。あの親父と下川署長とは仲がいい。

しかし、そういう思いを打ち砕く事態が彼らを待ち構えていたの

である。

「お前ら、こそこそなにしよるんじゃ！」

バーンと手の平で机を叩いて山崎警部は怒鳴った。

傍には柳井警部補も立っていて、ふたりを睨みつけている。デスクワーク中の連中が、いつせいに振り返って見た。

「宮崎！ ゆうてみい！ なにしに法律事務所なんかに寄った！」
太い目を剥いて芳樹を睨みつける。

「……」

「佐藤！」メグミも睨まれた。

けど返す言葉がない。懸念が現実のものとなったのだ。

「……」

（どうしてわかったんだろう？）

脇から柳井係長がいった。

「さっき、根岸法律事務所から電話があつた。若い刑事がふたり聞き込みに来て、不本意な追及を受けた。従業員は動揺している。法律事務所に刑事がくること自体、迷惑千万なのに、こっちの事情も考えず、アポなしでくるとは非常識ではないか——というんだ」

メグミも芳樹もしおたれて言葉もない。

「ほんとうに被疑者の手帳は存在するのか。そこに当方の電話番号が記されているというなら、それを見せて欲しい——とな」

「手帳たアなんか？ 今井孝雄の手帳たアなのことか？ ——おお
！」

とまた警部は机を叩いた。

宮崎芳樹はボソボソと一部始終を語った。そして懷からビニール袋に入れられた黒い手帳を取り出して、課長の前に置く。

室内が緊張に包まれた。驚きと、呆れと、憐れみの顔。恨みがましい顔。特に直接の上司である板井部長刑事は、怒りと腹立たしさ

で赤黒い顔を芳樹に向けている。ほとんど嫌がらせで、搜索隊扱いして芳樹にダム周辺の搜索をさせたことは忘れている。

光子の兄・榊原竜平の件に関しては、芳樹は口をつぐんだ。メグミを庇ったのだ。さいわい、根岸弁護士はそのことには触れてなかったみたいだった。

でも、メグミのほうは、——おっつけそれもバレルだろう。バレなくても、その方面の捜査が遅れることになる。取り返しのつかないことになる。叱られるのなら一時に叱られたほうがいい。どんな処分も甘んじて受けようと思っていた。

芳樹が、その思いを押し留めるような目付きで、メグミを見た。その目は、（よせ！今はいわないほうがいい。衝撃は分散したほうが緩和される）といていた。

メグミは呑み込んだ。光子との約束は“内密に”ということだった。この信義を重んじた。少なくとも、こういう事態に至ったことを光子に報告してからにしよう。

だが早い審判が下された。

「お前ら、会議に出席せんでよろしい。今日は定時で帰れ。明日署長の処分が決まるだろう。わしはもう知らん」

と山崎警部はいった。

みんなの冷やかな視線を浴びてふたりは席に戻った。

報告書類を片付けて、一七時半にメグミは刑事部屋を出た。芳樹はまだみんなに取り囲まれていた。

例によって涙ぐんで交通係に駆け込む。

吉賀巡査部長が執務机で新聞を広げてつくねんとしていた。

「どうした？」

鼻に掛かったメガネの上からメグミを見ていった。

普段は自分より何十センチも背が高い者でも、見下ろすように見る親父だが、老眼鏡を掛けた時だけ、鼻に掛かったメガネの上から上目使いに見上げるのだ。そういう時はひどく年老いて見える。度

の強いメガネ越しではばやけて見えないのだろう。

新聞をたたんで脇に置き、「なにかあったのか？」とメガネを外しながらいう。

「わたしもうクビになるかも知れません」

「そいつは穏やかじゃないな。どうしてじゃ？」

今度はメグミが一部始終を話す番だった。山崎課長の言葉まで付け加えて。

聞き終えると、吉賀は腕を組んで溜息をついた。

「一番やつちやあいかんことをやってしまったな。あいつは一体なにを考えてとるんじゃないー」

「わたしも悪いんです」

といってメグミは、辺りに人がいないのを確かめてから、声をひそめて、洞窟搜索のことや、そして光子に頼まれた絵のこと、根岸法律事務所での事情聴取の模様まで、正確に、洗いざらい話した。

「うゝむ」

吉賀は腕を組んだまま考え込んでしまった。

五分くらいしてーそれがどんなに長く感じられたことかーメグミはもうハンカチを取り出して、汗を拭く振りをして目頭を押さえていた。

「よしわかった」といって吉賀は立ち上がり、メグミの肩を叩いて、「せっかく早く帰れるんだ、ゆつくり休養するんだな」といって立ち去った。

メグミは自分がいた頃の部屋を見回し、自分の席だった机を撫で回して、ガヤガヤ入ってきたかつての同僚の女の子らと少し世間話をしてから、チャリで寮に帰った。

寮に帰ってから再びチャリで出かけた。生協に行つて缶ビールなどを買い込んできたのだ。これが飲まずにいられようか。光子に合わせる顔がない。

寮の食堂で夕食をすませ、シャワーを浴びて、サッパリしたところで、パソコンに向かう。

時刻はもう二時をまわっている。ビール片手にパソコンを開いて、ワードパツとに新たな情報を打ち込む。

ここで気をつけないといけないのは、缶コーラを倒してキーボードを濡らし、パソコンをパーにした者がいることだ。かつての同僚の中にそういう者がいた。

だから飲み物は机の一番端に置くことにしている。用心してウエスを間に置いてもいる。

でも食べ物ー特にオカキなどのクズをキーボードの隙間に詰まらせて失敗した者もいる。「ヨ・よ」を打ち込んでも「ン・ん」にしかならず、たとえば「チョコ」とでも打ち込んだら大変、予期せぬ記事がヅラ・ヅラ・ヅラと表示されるという事態に陥った者もいるから油断できない。

とりもおさずそれはメグミ自身だったのだが、さいわいそれは修復できたけど、小川巡査の場合は、買って一年と経たない三〇万円もしたノート型パソコンが、復旧ならずに買い換える破目になった。

ちなみにメグミのパソコンは、就職祝いに神戸の叔母から贈られたものである。アダや疎か（おろそか）には扱えない。

？「赤間中」^{あかまぢゅう}（六二歳）——右翼系元暴力団構成員。名古屋刑務所を本年の五月一〇日に出所して、七月七日から行方がわからなくなっていた。上野墓地公園で発見された両腕と、赤間の家族のDNAの型が一致して本人確認ができた。

赤間は刑務所の工場で、城島元検事と^{いさか}争いを起こしてケンカ両成敗、両方とも懲罰を受けたが、城島元検事は腹部への革手錠の絞め過ぎで窒息死した。

裁判で赤間のほうが争いを仕掛けたことが明らかになった。赤間と、大野木元大臣の秘書であり、右翼団体主催者の拳銃自決した常

本氏との関係もわかった。

常本氏を中心にして、大物代議士運転手兼ボディーガードの西塔氏と、赤間とは、かつてはヤジロベイの両腕のような存在であった（でも両者に面識はないという）。

そして刑務官の最上七男も、常本氏と、高校の先輩・後輩という関係から、深い付き合いがあった。

西塔と最上は、仲良く寄り添うようにして、乙津泊地と亀塚古墳に、上半身・下半身を遺棄されていた。

これで身元確認のできていない遺体は、臼杵事件の両脚のみとなった。

未発見の残りのパーツは、頭部が四つ、両脚が三つ、両腕も三つ、胴体 及び下半身 が二体ーかな？（ああややこしい！）

？「根岸ともみ」（四一歳）——希代の謀殺人といわれた青山姪おみやの双子の姉。容姿端麗。弁護士。東京大学・法学部卒。独身。名古屋事件・東京事件のアリバイはもっかのところなし。臼杵事件のアリバイも未定。大分にはいた。

？「青山姪臣」「城島竜二元検事」についての情報は不足。ネットで検索の必要あり。

？「榊原竜平」についても情報不足。

そこまで打ち込んで、メグミは一息入れた。ビールが効いて頭がボーとして心地よい。

シャワーは浴びたし、このままひっくり返って眠りたいところだけど ほんとうにもう疲れていた、もうひと仕事残っていた。

光子と連絡を取って謝っておかなければならない。詫びを入れるのは早ければ早いほうがよいのだ。ついでに兄・竜平のことを訊いてもみたい。

そこで携帯メールを打ち込む。

――光子ちゃん。

ごめん！ 大変なことをしてしまいました。

まず、あの絵を、根岸ともみ弁護士と、そして、おかあさんにも見られてしまいました。

実は、今井孝雄容疑者の手帳に書かれた電話番号の中に、根岸法律事務所の番号が記されてあったのです。それで聞き込みに行ったわけです。

根岸弁護士は絵を見て明らかに動揺しておりました。おかあさんには偶然見られたのですが、即座に光子ちゃんのおにいさん、竜平さんだとわかったみたい。

でも心配しないでください。おかあさんはあなたが描いた絵だと思ってますから。

そして次は、悪いことにその手帳は相棒刑事が搜索で見つけたもので、内緒で抜け駆け捜査をしていたものでした。

それがバレて糾弾される破目になり、ふたりともクビが危うい事態になっております。竜平さんのことは伏せておりましたが、わたしがつい、信頼のおけるかつての上司に漏らしてしまいました。

ほんとうにごめんなさい。

とりあえず、それだけお知らせしておきます。

後日談はまたあとで……。

メグミ

送信してから溜息をつき、芳樹と同じように、城島元特捜部検事が担当した疑獄事件や、青山姪臣殺害事件、裁判の模様、刑務所で
の獄死事件などを、ネットで検索したり、当時の新聞を閲覧したりして、興奮して眠れなくなった。

ようやくベットに横になったのが、明けの日の三時過ぎ、その間に芳樹からのメールはあったけど、光子からの返信はなかった。

前に続く(前書き)

前回少し誤認がありました。

刑務官の最上七男とつながりがあるのは常本氏のほうでした。
したがって、こうなります。

――そして刑務官の最上七男も、常本氏と、高校の先輩・後輩と
いう関係から、深い付き合いがあった

前に続く

六時に設定してあるケータイの目覚まし曲で目が覚めた。ヴェル
デイの『凱旋行進曲』である。

新しい着信があつたみたいなので見ると、メールが二件入つてい
た。一件は芳樹からのもので、二件目は五時半に光子からのものだ
つた。

それによると。

――了解。

とだけ書かれてあつた。光子らしいといえらしいけど、あんま
りだ。怒っているなら、そういつて欲しい。そのほうが救われる。
たつたのふた文字ですまそうなんて――とメグミは腹を立てた。そ
のふた文字が、中性子星のように重たく感じられたのだ。

（どうせ友達でもなんでもないんだから、別にいいけど――）
かえってそのほうがよいのかも、とも思う。これから――といっ
て、どういう処分が下されるか知らないけど――彼女の大事な者達
を追及することになるかも知れないのだ。憎まれていたほうが気が
楽だ。

いつものようにパンと牛乳で 野菜サラダを作るのは面倒だ 朝
食をすませ、慌ただしく身繕いをして出勤した。嫌なこと、煩わし
いことは、あとまわしにしたい、などという心理はメグミにはない。
気が重いことほど早く済ませてしまいたいというほうだった。面倒
臭がり屋なのに、そういうところはバアバに似ていた。

その点、宮崎芳樹のほうは、嫌だ、嫌だなあと思いつながらぐずぐ
ずしていて、遅刻寸前に駆け込んだ。メグミがみんなからさん
さん責められたあとにである。

どういうわけか、板井デカ長の姿が見られない。そのことが余程気鬱だったらしく、ホツとしたように芳樹はチラリとメグミを一瞥してから席についた。柳井係長の姿もなかった。

やがて山崎警部が出勤してきて、「宮崎、佐藤ーちょっとこい！」とふたりを呼びつけた。

みんなが興味深く見守る中をしずしずと課長の前に進み出る。

「お前ら今日から本部の下郡警部補しもおぐの指揮下に入って、お犬様と一緒に遺体捜索にかかれ。それなりの衣装に着替えて、一行の到着を待て。いいな」

「はい」

「はい」

とりあえず返事をした。とりあえず安心もした。

みんなは、なんだようーというような顔で処分の甘さに不満を露わにした。

山崎警部はギョロリとふたりを睨んまま、暫らくの間無言の責め苦を与えた。

そして、「きつちよむ警部とおへま巡査部長に失礼のないようにな」といった。

つまり犬以下ということだ。

下郡警部補は細い体の優しそうな親父だった。シェパード犬は二頭とも精悍な顔つきをしていたが、落ち着きがなかった。

「佐藤君か」と下郡警部補はメグミにいった。「洞窟に案内してもらおうか」

リーダーはぼくのほうなんだけど、といった気な顔で、芳樹が警部補を見た。

「君すまないけど、これを持ってついてきて」

その芳樹に紺の作業服に紺の略帽姿の訓練士が、おへま号のリードを渡した。こちらはがっしりした中年男性だった。もうひとりの

若い女性訓練士は車両のほうに行っていた。

なんでこんなやつに使われにやいけんのか、と芳樹はぶすくれている。

ふたりは駐車場の金網のフェンスの所へ行った。どうやらそこでオシッコをさせるようだ。

メスはやつぱりしゃがんです。人間と同じ。構造上からそうなのだろうか。でもバアバは野辺では時々尻を捲って立ちションをした。それが子供心にも体裁悪くて嫌だった。PTA参観にもきて欲しくなくて、神戸に嫁ぐ前の叔母が代わりにきたものである。

車両は鑑識の小型バスで、鑑識さんが運転手を含めて二名、訓練士が男女二名、それに下郡警部補と、芳樹、メグミの、合わせて七名に、犬二頭という陣容だった。

道中、メグミはぼんやり考えていた。頭の中でふたつのことが妙に引つ掛かっていった。同じ人間から同じ言葉が日にちを変えて二度発せられた。これは単なる重複なのだろうか？

「ねえ」と、隣で不機嫌な顔して外を眺めている芳樹に声をかけた。

「なにー」

「手帳には電話番号のほかになにか記されてなかった？」

「ほかにって？」

「だから、なんでもいいんだけど、なにか？」

「だからそれがどうしたのー」

「どうもしないけど、なにか？」

「家計簿みたいな出入金。随分几帳面なやつで、月々の収支をきちんと記録していた」

鬱陶しそうにいう。

「ほかに？」

「借り出したレンタルビデオとかのー」

「そのほかに？」

「しょうもないことだよー」

「しょうもないことでもいいからいつて」

「ナンバーズの予想とかだよ」

「それで？」

「あとは細々したメモ！」

「どんな？」

「そんなこと一々覚えているもんかー」

「どうしてそう投げ遣りなんですか、先輩。ちゃんと考えて！」

芳樹は初めて怒りを込めた目でメグミを見た。

「なんでそんなこと一々訊くんだよ」

「そこになにか手掛かりが含まれてるかも知れないじゃないですかあ」

「そんなことあ、とうにばく自身が吟味して、手掛かりを掴んで、容疑者にまで辿り着いたじゃないか！ それを評価しないで、どうしてばくだけ責められるだよ」

「わたしだつて責められてますよ。危うい立場に立たされているから、必死になつてるんですよが！」

「いいや、君には吉賀の親父様がついている！」

「先輩だつて署長さんの信頼が厚いじゃないですかあ！」
とそこへ。

「ーうるさい！」と、優しそうな警部補が思いのほか大声をだした。

芳樹とメグミは驚いて振り返る。

「なに騒いでるんだ！ 君ら。犬が恐がつてるじゃないか！」

「すみません」とふたりは頭を下げた。

メグミは声を落としていう。

「根岸弁護士は二度、こういったんですよ。——それを拝見させていただくわけには？ ——そこに当方の電話番号が記されているというなら、それを見せて欲しい、って。つまり手帳をですよ」
「それが？」

「ですから、根岸弁護士が見たいものが手帳に書かれている――ということになりませんか？」

「考え過ぎだよ。単なる言葉の重複だよ」

「いつから先輩そんなにマイナス思考になっちゃったんです？ 能天気なバカ……あ、いえ、……これ、わたしがいったんじゃないですよ、前の課のみんなが……」

「どうせぼくは刑事課でも能天気なバカで通ってるよ。そのバカが考えてもそう思えるんだから、君も相当な能天気だね、バカとはいわないけど」

「わたしの考えのどこが能天気なんですか！ 根岸弁護士の知らない情報を今井孝雄が知っていた――てことも考えられるじゃないですかあ」

「たとえばどんなことだよ」

「そんなこと知りませんよ」

「それ見ろ！」

「だからそれを今訊こうとしているのに先輩が不貞腐れて投げ遣りになってるのでしょうが！」

「ぼくのどこが不貞腐れて投げ遣りなんだよう！」

「――うるさい！」

とまあ、大変な道中だった。

前に続く

山は一層秋気を帯びていた。

名残惜しむかのように、アブラゼミやクマゼミなどが、喧しく喚き立てている。午後になるとヒグラシに取って代わるのだけど、今を盛りに彼らは短い生命を燃焼しているかのようなのだ。

一行はふた手にわかれて、残る五つの洞窟に向かった。

地図を片手にメグミは、安堂富美代訓練士とおへま号、それに下郡警部補ほか鑑識係員一名を案内して、ダムの際堤の上を歩いて渡り、碁盤ヶ岳山系の急峻な山道を登った。

宮崎芳樹のほうは、徳本又吉訓練士ときつちよむ号、そして鑑識係主任の村田巡查部長とで、ダムの後方の道路から車でまわり込んで、谷川を挟み、メグミらとは反対の位置になる――姫岳山系のケモノ道に分け入った。

犬には原臭として今井孝雄の靴のニオイを嗅がせてある。谷川の中でニオイを消したにしても、山に入った時点で、臭気を残しているはずである。でもまだ犬はなんの反応も見せなかった。

別ルートからとも考えられるから、それは気にしないでメグミらの一行はずんずん第一目標に向かって進んだ。犬はシカやキジなどが姿を垣間見せた時だけ騒ぎ立て、イノシシなどの臭気に鼻息を荒くした。

やがて、メグミらは 芳樹のほうも 地図通りに第一目標の石灰岩の洞窟を発見した。しかし犬は道中がそうであったように、なんの反応も見せなかった。中に入ってみても、そういう形跡はない。次に向かう。

第二目標は崖の下にあった。高さは一メートル足らずだけど、どこまでも奥深い洞穴だった。ただし人間が入り込めるのは一〇メートルくらいまで。その奥に鍾乳洞がありそうだった。

だが、そこでも犬はなんの反応も見せなかった。ハンドランプで

隈なく調べても、それらしき形跡は見られなかった。

一行は落胆の色を深めた。

そしてとうとう、尾根にあった三つ目の洞窟――これは井戸のように縦に深かった――どこまで深いのか見当もつかない。犬の反応もなく、あきらめた。

芳樹らのほうに期待しながら山を下りた。

谷川を挟んだ向こうの道路に、一足先に下りて待つ芳樹らの姿があった。芳樹が力なく顔の前で手を振った。

空振りに終わった現実を受けとめざるを得なかった。ふたりにとつては重々しい現実だった。

「考えとしちゃあ、悪くはなかったんだけどなあ……」と慰めるように下郡警部補がいった。「これでもう、この一帯の搜索は諦めにやならんだろうな。考えとしちゃあ悪くない」

「そうなる」と今井は、なにしにバイクでこんなとこにやってきたんでしょかねえ」と村田鑑識主任がいう。丸い頭と四角い顔をしていた。

メグミは目を細めて青い空を見上げた。

――万事休すだ。

せつかく吉賀係長が庇ってくれたのだろうけど、自分らが犯した罪は計り知れなく重い。

柳井警部補と板井デカ長が、朝一番に大分の合同捜査本部に出向いたとか。さぞかし山辺本部長に大目玉を食らったことだろう。それをそのまま持ち帰ってきては、誰が庇いきれるであろうか。

仮に根岸弁護士が事件に関与していたのなら、まだなんの手掛かりも得られないうちから、手の内をさらしたことになる。証拠隠滅の機会を与えたことになる。

わざわざ電話を寄こしたのは、余程自信があるのか、余程今井の手帳に書いてあることを知リたかったか、どちらかだ。

本部のほうから再度事情聴取に行っているに違いないけど、成行きから、手帳を見せてしまいかも知れない。実際その通りだった。

メグミは溜息をついた。

一行はダムの上の駐車場で落ち合い、そこで晩がけの昼食となった。管理事務所には誰もいないようだった。バスの中や、日陰に陣取って、それぞれ弁当を広げた。

メグミと芳樹はコンビ二弁当だった。堰堤の上でダム湖を見ながら、そして下流の、自分らが搜索した洞窟がある辺りを眺めながら食べた。

芳樹が口に物を入れたまま、箸でダム湖の堰堤の中程の水門を指して、「あつこに浮かんじよった」といった。

「なにが？」

「なにがて、今井の水死体がだよ」

「えーっ！」

そうだった。ここは今井孝雄の水死体が発見された場所だったのだ。メグミは名古屋にいてその時の臨場感がない。新聞で見る事件記事のような感覚だった。

途端に幕の内弁当のサバの塩焼きが不味まずくなった。女たらしのくせに、デリカシーのない奴だ。

「君はどう思う？ 追い詰められて自殺したか、口封じに殺されたか」

まだそのはつきりした結論は出ていないのだ。メッセージ入りのカプセルを自分で飲んだのか、吞まされたのか。

しかし捜査本部としてはカプセルを吞まされてダムに、この堰堤の上から突き落とされたと見ている。一味にとつて、警察が張り付いている今井は危険な存在だった。呼び出されたかなにかして。車で横付けだから、犬が臭気を感じしないのは当たり前ーというのもその理由のひとつだった。

ちなみに宮崎芳樹が今井の手帳を発見したのは、ここから西河野に通じる林道をくねくね上った山の中腹の、バイクが放置されていた辺りの藪の中である。

そこからここまで歩いてきたのなら――二キロは充分あるだろう――犬の追跡を受けるはずだけど、臭気はそこでふつりと途切れていたのだ。

谷間の陽は陰るのが早い。まだ一四時過ぎだというのに、急速に翳つて、姫岳の中腹を這い上がりうとしている。ヒグラシがもの悲しく鳴き始めていた。

食後休憩を三〇分くらい取ってから、「ようし、今日はもう帰還するぞ」と下郡警部補がいった。

「ちよつと待ってください！」と、慌ててメグミが駆け寄った。

「まだあるのか？」と下郡警部補。

「ええ。前にわたし達が調べたところですけど、気になるのもう一度お願いします」

「時間があるから、構わんけど、君らが調べてなんともなかったんなら」

「いえ、人が入り込んでいた形跡はありました。多分アベックだろうとは思いますが、念のために」

「遺体を置いてあったような形跡はなかったぜ」と芳樹が横から口をだした。

「でも、なにかに包んでいたか、入っていたかもしれないじゃないですか。ドライアイスと一緒に」

「よしわかった。案内してくれ」と警部補は即座にいった。

前に続く

岩盤を登るところからきつちよむ号ー通称「きつちよむ警部」の尖った耳が、左右に向きをせわしなく変え、そして岩盤に鼻を押し付けるような仕草をした。

「どうしたの？ なにか感じる？」と安堂富美代訓練士がいう。

犬は顔を上げて、風を嗅ぐように鼻をひくひくさせた。

一行は固唾を吞んで犬を注視した。

一行といつても、芳樹らの組は、下流の洞窟と、そして無視していたずっと下流の、従妹の輝子が、「あつこにはカンジンが住んじよってすかんの、女の子に悪さする」といった洞窟のほうにも向かっていた。

犬は岩を搔いて猛烈な勢いで登り始めた。

そして洞穴に向かって激しく吠え立てたのである。

下郡警部補は携帯電話で鑑識の村田主任に電話して、彼らの組を呼び寄せた。

鑑識の連中が鑑識作業中に、下郡警部補と芳樹とメグミは、犬二頭を率いる訓練士とともに、洞窟の奥の探索に向かった。

トイレ代わりにしていた窪みを過ぎてから洞穴はふたつに分かれ、左側はすぐに行き止まりになったが、右側はぐねぐねと狭い空洞を五、六メートルくらい進んで行き止まりになった。

でも犬らは上を向いて吠え立てた。天井まで三メートル強の高さがある。芳樹が岩をよじ登って天井近くの横穴に体半分を突っ込んで、叫んだ。

「広い空間があります！ ハンドランプを！」

メグミがよじ登って手渡しする。

芳樹がそれで照らしてまた叫んだ。

「これはすごいや！」

這えば人が楽に通れる横穴から一・五メートルばかり下に、四畳半くらいの広さの平坦な岩畳の部屋があった。

天井は先細りになって高く、わずかな光と、岩を伝って水滴が滴り、部屋の中央の窪みを流れて、片隅の亀裂に流れ落ちていた。そこから時は折風が吹き上げてきた。

そこできつちよむ警部とおへま巡査部長が、勝ち誇ったように前足を踏み鳴らして、雄叫びを上げたのである。彼らには新たにゴム長靴の中を拭ったタオルを嗅がせてあった。

とうとう遺体の置き場所を突き止めた瞬間であった。

メグミと芳樹は思わず抱き合って喜んだ。これでどうにか首が繋がった！

下郡警部補は冷静に内部の点検をしている。

岩壁の所々にロウソクの燃え残り、滴ったロウの跡がある。岩畳の上に遺体になにかに入れられるかして、並べられていたのだろう。解体・エンバーミングもここで行われ、中央の溝を流れる水で、解体器具や血抜き、吸い出された臓物などを洗い流したのかも知れない。

下郡警部補は携帯電話で山辺刑事部長にこの様子を伝えた。

「ですが、残念なことに、遺体はどこかに移されたあとのようであります。遺体は――」

（遺体は今井孝雄がどこかに移動した！）

芳樹の顔を見ると、芳樹もそう思っているようだった。

（しかし、行確班が張り付いていた？）と芳樹の目が語っている。

「失尾したあとに」

「いいや、そのあとは大掛かりな搜索が行われ、検問もあって、そんなことはできなかったはずだ」

「夜なら」

「夜にこんなところろろろできるもんか。それに主だった道路は深夜も検問した」

芳樹を見つめるメグミのビー玉のように澄んだ眸が、右左に目まぐるしく動いた。

（移動した場所は今井しか知らなかった。その場所が手帳に書かれてあった。連中はそれを知りたがった。少なくとも根岸ともみ弁護士は知りたがっている）

その思いは口にださなかった。

台風が近づいていることもあって朝から天候は荒れていた。

大分中央署の大会議室にビシツと集まった捜査員が、ざっと四、五十名。その中に宮崎芳樹と佐藤メグミの姿もあった。

もう、「あん色ん黒リイの見よ」なんていう無粋な者はいない。

本部幹部にも、臼杵署に毛色の変わった女性刑事がいることは周知していた。

挨拶を終えて、居並ぶ幹部の中央に着座した山辺刑事部長も、捜査員らの中にその姿を認めて口元を綻ばせた。

向かつて右隣が下川署長で、左隣が中央署長と東署長の青シャツ組だった。

捜査員サイドの臼杵署メンバーの先頭から山崎警部が立ち、遺体置き場発見の経緯を、前のボードに張られた図面を指し棒で指しながら説明した。

「この洞窟からは都合四名分の遺留物が、つまり、複数人の体液、二名の指紋、三名の毛髪――そのひとつは女性のものと思われる、二〇センチあまりの長さの茶色い直毛でした――それに複数人の排泄物等が採取されております。ただいま割り出しを行っておりますが、今井孝雄の毛髪もその中に含まれておりました。

体液については、精液・唾液・血液・汗等の分泌物であります。

バラバラ遺体のものも当然含まれております。

そこでエンバーミングや解体が行われたことは、疑いの余地はありません。岩壁に祭壇のような跡もありました。いよいよカルトの仕業の疑いが濃厚となつてまいりました。

遺体がいつ持ち込まれ、持ち出されたのか、もつかのところ不明であります。近隣の捜査・搜索を徹底して行っております。不審者や不審車両などの情報が五〇件近く寄せられておりますので、その真偽を確かめに奔走しておるところでもあります。

——ここまでで、なにかご質問がございましたら？」

すぐに手が上がって中年刑事が質問した。

「精液も複数人のものですか？」

「いえこれは単一のものでした」といって山崎警部はまたボードの所へ行つて、指し棒で洞窟内の略図を指した。「この入り口の部屋——これはこのように長方形にほぼ一二畳はある空洞でして、中ほどのこの部分に、焚き火の跡があり、コンビ二袋やコンビ二弁当、菓子類、菓子パンなどのビニール袋・及び発泡スチロール容器、清涼飲料水の空き缶等が散乱しておりまして——これらにつきましては、領収書から津久見市内のコンビ二が特定されております——それらのゴミの中に、使用済の避妊具が混在しておりますて」

「奥の部屋ではないんですね」

「はい」

「ということは、遺体との交接ではなく、その女性との」

「まあ、そういうことになりますな」

その手の異常者の性の対象は遺体である、とその捜査員はいいたいのであるうけど、多くの捜査員が顔を顰めた。引いている女性刑事の姿もちらほら見られる。

「女性にはその手の異常者は見られない、男性特有の獲得形質だと思うのですが、そんな陰惨なところに女性がいたというのは驚くべきことですな」

「女性と、断定しているわけではありません。のような毛髪ですけど、今時それぐらいの長さの髪の毛の男は珍しくありませんからね」

それもまた恐い話であつた。私語が沸き起こる。

別の捜査員が間の抜けた声で訊いた。

「随分前からその地域の搜索はなされておられたのに、ここへきて急に発見なされたのは——なにかの、情報によるものですか？」

山崎警部は太い目を剥いて、ウンチを漏らした幼児のように白黒させて、下川署長の横顔を見たりした。下川署長は種牛のようにのさばってニヤニヤしている。山辺刑事部長は厳しい顔つきである。

「……ま、まあ、そんなところです……」

「今井孝雄には四六時中、行確班が張り付いていたというお話ですから、そうしますと、失尾したあとの、数日間の間に今井孝雄が遺体をどこかに移動したということになりますか？ それとも一味の別の者が？」

「そのところはまだわかりません。よろしかったら先へ行かせてもらいます。あまり時間を取ってもなんですから……」

といって警部はみんなの視線から逃れるように、席に戻った。

しかし、それからがまた大変だった。いきなり今井容疑者の手帳が現れるわけであるから。その真相が本部幹部にまで上げられているのかどうかもわからないのだ。

当然次のような突っ込みが別の捜査員から入った。

「その手帳ですが、それもまた急な発見のようですが？」

まさか捜査員のひとりが立ちシヨンをしていて、崖の中途の藤蔓に引っ掛かっているを見つけ、秘かに所持していたなんていえたものではない。

「ええ、それが、思わぬところから出てまいりまして、……藪の中からですね」

「それが今井孝雄のものだとしてわかったんですか？ 名前かなにかが？」

「いえ、そういうものはありませんでしたけど、やはり、指紋によつてですな」

臼杵署の捜査員らは見苦しい言い訳にみんな下を向いている。その中に針のムシロのふたりがいた。

「その中に記された電話番号から、根岸ともみ容疑者に辿り着いたわけであります。根岸ともみというのは、ご承知のように、すぐそこに法律事務所を持つ弁護士ですが、名古屋事件・東京事件の時に現場近くについて――まあ、その辺は、あとから担当の方々からご説明があるうかと思いますが、大方そのような経緯でございました。

これから、できれば目撃者の品川老人――この方は認知症の気がございまるのであまり当てにはなりませんが――そして足立明君にも、面通しを試みようかと、そう思っておるところであります。

無論、新たな遺体の隠し場所の搜索には、地元消防団などの協力を得ながら、広域的に展開しております」

前に続く(前書き)

また前のほうに誤認がありまして、改稿しております。

本当にこの記憶力はなんとかならなものか。

できれば、差し歯をする前に、頭蓋骨を差し替えたいくらいです。

前に続く

一五分間の休憩の後、下川署長の隣から本部・捜査一課長の高城警視が立って、容疑者・根岸ともみ弁護士についての説明を始めた。「山梨県の出身で、東大法学部卒という申し分のない経歴の人物でありますが、これに一卵性双生児の弟がおりまして、これが名高い犯罪者でありました。」

まずはこの弟のことから予備知識として頭に入れておいてもらいたい。弟の事件と我々の事件と直接的には関係ないものの、ある人物を介して、微妙にリンクしている」

高城警視はボードに、「青山姪臣」と書いた。そして、その横に「城島竜二・東京地検特捜部検事」と書いて、そのまた横に「根岸ともみ」と書いた。

「みなさんは、十数年前、東京地検特捜部検事が起こした殺人事件について覚えているでしょうか。その時のガイシャが、この青山姪臣——てつおみと読みます——根岸ともみの双子の弟です。希代の謀殺人と騒がれましたね。数々の疑獄事件の関係者の死に係わっていたことが明るみになった。」

双子といっても、両者は一緒に育ったわけではありません。プリズンベビーであり、一年間ほど、施設内で受刑者の母親から授乳・育児を受け、それから乳児園に預けられた。そこから別々に里子に出されております。

敬虔なキリスト教徒の根岸家に引き取られた根岸ともみは、養子となつて十分な愛情と教育を受けて育った。そして弁護士になり、弁護士としての評判は悪くない。弟の姪臣のほうはというと、里親と折り合いが悪く、里親を転々として、最後には施設に入れられて施設で育った。

施設でも他人との正常な関係が持てず、様々なトラブルを起こしている。中学・高校と抜群の成績ながら、社会に出ると、社会生活

不適応者でも受け入れられるヤクザになった。その辺りで、ある政治家の庇護を受けるようになっていた。

頭は驚くほど切れ、独学で薬理学と法律を学び、専門家も舌を巻くほどの知識を利して、巧妙大胆な謀殺を欲しいままにしていた。

城島検事も標的にされ、愛妹の城島民子は凄惨な拷問の拳句、強盗殺人の容疑者にも偽ぎせられて、検事は検事で、妹を救い出すために多額の金を要求されて破産状態、追い詰められたふたりは青山姪臣を殺してしまった。

裁判では、もみあつて拳銃で撃たれようとしている兄を助けるために、妹が無我夢中で包丁で刺した――これを違法性阻却事由となる緊急避難行為と認定、妹・民子は無罪に――しかしこの時はもう兄の潔白を叫んで妹は留置場で自殺していた――兄の城島元検事を殺人罪等で有罪にした。

それからあとの、刑務所内での不幸な事故のことは、知らない者は誰もいないね。謀殺説もあるけど――

高城警視は長広舌を終えて腰を下ろした。
場内は静まりかえっている。

やがて、捜査員サイドから質問者が立った。

「刑務官の最上も、運転手兼ボディガードの西塔も、受刑者だった赤間も、城島元検事の死――事故であれ、謀殺であれ――に関係しているのは確かですけど、謀殺人を弟に持つとはいえ、どう考えても復讐劇のように見える我々の事件に、根岸ともみ弁護士が関与しているというのは、ちょっと飛躍のように思いますが、だとしたら動機はなんなんでしょうか？」

高城警視は座ったまま答えた。

「わからない。でもアリバイがない。先ほどもあったように、今井の手帳に電話番号が記されてあった。事件現場で目撃された不審人物と様子が似ている」

「それだけですか？」

「それだけだ」

「なにか余程の強い動機がないと、こんな大それた事件は起こさないと思いますけど。ぼくはよく裁判所や検察庁舎で彼女を見かけることがあるんですけど、とてもそんな風には見えませんけど」

「美人だからじゃないのか」誰かがチャチを入れた。空気を読めないやつはいるものだ。

高城警視はそれに答えている。

「君のいうのはもつともだ。強い動機は必要だ。もしかしたらその答えは、本来なら仇同士であるはずの、根岸ともみと城島ーいや、榊原親子が仲良くしていることにあるのかも知れない。実をいうと、もうひとつあるんだ」

といって、中央署の榊藤警部を指名した。

指名されて、榊藤警部が文字通り中央に陣取った連中の先頭から立った。

「城島検事には竜平という長男がおります。これは上野ヶ丘高校から東大理学部に進み、もつかのころ真面目に大学院で生命科学を学んでいるようでありました。親思いの優しい子だということでした。」

ところがそう思っているのはバカな母親だけで、警視庁から今朝届いた資料によりますと、実際は、親元を離れて東京でのアパート生活を始めてからは、相当乱れた生活を送っていたようです。

そして、驚いたことには、東京事件の容疑者にもなっていて、極秘に追尾していたようですけど、ここ一週間ばかり前から失尾しているとのこと。我々も急遽捜査員を東京に派遣したばかりですが、向こうからもやってくるようです」

警部が腰を下ろすと、ガヤガヤ私語が始まった。

それから榊藤警部が再び立って、上野の森の両腕遺棄事件の進捗状況を報告し、次に指名された東署の大津部警部は、乙津泊地及び

亀塚古墳遺棄現場から割り出した不審者や不審車両などを報告した。捜査線上に浮かんでは弾けて消える、それらの泡沫候補を、ひとつひとつ潰していくしかないのである。

「あとは臼杵事件の身元確認だな」と刑事部長がいえば、「城島元検事に関係した人物で、ほかに姿を消している者はいないんですかねえ。わりとわかりそうなものだけ」と中央署長がいう。

捜査会議は一〇時に始まって、一二時に終わった。

前に続く

臼杵署に戻ってからまた小会議が開かれ、また編成を新たにした。それによると、メグミと芳樹は遺体捜索から、本業の不審者及び不審車輛の聞き込み――不審車両については、大分東署が手配している不審車で、三菱ランサーカーゴ 15年式・ホワイト、フルスモーク だった――に戻された。

その不審車は、国道22号線や国道197号線上に秘かに設置されたフクロウの目――遺棄事件が起きた前後の時間帯のNシステムの画像解析から割り出されたもので、ここへきて急にその車に不審車のレッテルが張られたのは、ナンバープレートがほかの車両のと取り替えられていたことが発覚したからである。

「我々の重大なミスでした。車両ナンバーから持ち主を特定、事情聴取に及んだのでありますが、坂ノ市の旭メディカルにお勤めの方で、身元は確か、非の打ち所のない人物でもあり、アリバイ等に不審な点もございませんでしたので、チェック済みになっておりました。思い込みから、その車の――ホンダのオデッセイでしたけど、ナンバーまで確認しなかったものですから。」

ところがこのほど本人から連絡があり、ナンバープレートが違うというんです。自分の車のナンバーを知らない者は結構いるもので、試しに署員に聞きましたら、半数以上が正確に知っておりませんでした。その方の場合もそうでした。

それがたまたま――その方はたまにナンバーズを買うそうでした。その際は自分の車の番号で買うことにしていた――ジャスコの宝くじ売り場で買おうとして、そこで、こんな番号だったかなあというんで、車検証を見たら、よく似ているけど、違っていたというんですわ」

合同捜査会議の席で、東署の天津部警部は細い目をいよいよ細くしてそういった。

「じゃあ、その不審車両の持ち主は？」という当然の質問に対して、警部は、「それが……行方が知れないんです」といった。

「なにえ、そる早よいわんかえ」と誰かがつぶやいたのを皮切りに、会議室内は騒然となったのだった。

しかし、幹部のお叱りを受けたのか、大津部警部は気の毒なほど、素直に喜べない複雑な顔をしていた。

その不審車と同車種・同型の写真のコピーと、そしてその車の持ち主の写真を持って、メグミと芳樹は、時間的關係から近場の――せいぜい乙見ダムに向かう県道を聞き込むつもりで署を出たのであるが――。

「ちよつと、寮に寄って行つていいですか？」

「なに？ 傘でも取りに行くの？」

「ううん、ちよつと」

荒れていた風雨は午後から治まっている。ほとんど気にならない程度の霧雨である。

メグミは秘かにあるものをネットで購入していた。それを取りに帰ったのである。

車に戻ってメグミがしおらしくいう。

「先輩にプレゼントがあるんですけど……」

「え？ いきなりなに？ 仕事中だぜ」

「仕事中じゃいけませんか」

「いやいやいや、そんなこと――仕事中だろうとなんだろうと、貰えるものならなんでも。特に佐藤君のものなら」署内ではそう呼んでいる。「吐いたツバでもいただきますって」

「きつちやな。そういつてあっちこっちの女性にツバつけてるんでしょう」

「滅相もない。ぼくはこう見えても、結構ピュアなだけだなあ。どうも人は見かけで判断するから困る」

「見たまんま――って人もいますよ。でも、これはそんな気をまわ

すようなものじゃありませんから」といってハンドバックから小さな長四角の箱を取り出して芳樹に渡した。

「開けてみて」

芳樹が開けると、中から細長い容器が出てきた。

「なんだよこれ？ 香水みたいじゃないか」

「香水ですよ。ランコム・メンレネルジー。五千円ちょっとしたんだから」

「え？ そんなにした香水をぼくに？」

「ええ。ちよっとニオイ嗅いでみて」

「ニオイって、……うん、いい匂いだ」

「わたしにも、……わゝ、ホントだ。クラクラときちゃう」

「これをぼくにつけろって？ そんなにぼくの体臭って、気になる？ 厭な臭いする？」

「違いますよう。先輩の体臭なんて、全然。——でもこないだ、微かにクリのおいがしたけど、なんだろう？……生のクリとか食べましたか？」

「……えっ？ ……いや」

「実は、名古屋事件の容疑者が、この香水を使用していたんですよ」

「ええッ！ マジかい」

「死体を運んだりするから、臭いが付くでしょう、消臭剤も勿論使用してたでしょうけど。それを誤魔化す意味もあるんじゃない」

「まいったなあ。そんなこと秘密にして、君もなかなかの者なんだね」
「だから先輩、このニオイを嗅いだ時は、デンジャラスな時だと思ってください。もっと早くに取り寄せてれば、根岸法律事務所に事情聴取に行く時、先輩に振りかけていたんだけど」

寮の前の公道に停めたPCの中で、そんなやりとりをしている様は、端から見れば、若いふたりがいちゃついているように見えたことだろう。実際、夕食時に食堂のおばさんに揶揄やゆされている。

車を発信させてからメグミはいった。

「機会があれば、根岸弁護士にこの二オイを嗅がせてみたいものですね」

「その機会は意外と早くくるかもよ」

「え、どうして？」

「いつてたじゃないか、目撃者に面通ししたいって、課長が」

「でもそのためには、根岸弁護士を任意で引っ張らないと、そんな口実、ありますか？」

「それもそうだな。相手は法律の専門家だし」

「でも、カオルちゃんになら、カオルちゃんは遺棄者と遭遇した可能性が高いですから、もしか反応を示すかも」

芳樹はメグミの横顔を見ていった。

「こういう時って、アメリカ人なんかだと、ブラボー！とかなんとか叫んで、やたらキスしない？ ネットキングってえの？」

「しませんよ、恋人どうしじゃないんだから。それにわたし、こう見えても、日本人ですから！」

「あつ、ゴメン！」

メグミはアクセルを踏み込んで市役所前を突っ走った。回転灯を灯して、サイレンをかき鳴らしてーというわけにはいかない。

署の横から通りに出て、右にまわり、城址公園の下を走って、個人美術館の所の信号から、急に右に折れた。

「ど、どこ行くの？」

「ちよつと寄り道」

「寄り道って、もう一五時をまわってるぜ」

「思い出したことがあるから」

今井孝雄のアパートの前でつんのめるように止めた。

前に続く

臼津葬祭場で初めて今井孝雄に事情聴取した時、「窓辺の小屋根の上に猫が一匹いただけで」といったのを思い出したメグミは、それを確かめるために、アパートの裏手にまわった。

ブロック塀を隔てて入母屋造りの民家が並んでいて、確かにそのうちの一軒の、二階屋の小屋根が、今井の部屋に近接していた。

「先輩、あの屋根に飛び移れませんかねえ」それを見上げてメグミがいう。

「今井の部屋からかい？」

ブロック塀の上には忍び返しのフェンスがあり、合わせて一八〇センチはあろうかという高さ、しかも、忍び返しの部分には三段の有刺鉄線が張りめぐらされているから、アパートの敷地内から出るには表の門を通るしかない。

だから門の前の道路に停めた車から、あるいは斜め前のアパートの一室から、行確班が見張っていたわけである。二階に上がる外付き階段の横が、屋根付きのバイクや自転車置き場で、今井のバイクもそこに置かれてあった。建物の前が車の駐車場になっている。一応今井も軽ワゴン車を持っていて、そこに駐車してあったけど、犯行に使われた形跡はなかった。

「あれじゃ、無理だろ。飛び移れないこともないだろうけど、その衝撃で瓦が傷んだり、音で家人に気付かれるんじゃないかなあ……じわつと下りられる距離ではないみたいだぞ」

「まだあの部屋は空き部屋なんですよね。大家さんにいつて中から見て見ましようよ」

「そんな風なら誰かが気付いてるさ。気付かないわけではない」

「でも、見てみましようよ」

「またにしよう、もう時間がない。聞き込みに行かなくちゃ」

「報告書なんて、適当に書いとけばいいっていつてたじゃないです

「ああ、誰も見てないんだからって」

「でもぼくらは色々と問題を起こしてるし、これ以上問題を起こしたらー」

「問題って、なにが問題なんですかあ。疑問を明らかにしようとするのがどうして問題なんですかあ。それを見過ごすことのほうがもつと問題じゃないですかあ」

「だからそういう問題じゃなく、いわれた通りにしないことが問題なんだよ。問題は問題としてなにも今日解決しなくなつて、明日にしたつて、問題ないじゃないか！」

「だからここにいたはずの今井がどうして遺体を移動できたのかという問題を解決することを後回しにして他所の署の使い走りみたいなことを優先することのほうがよほど問題でしょうが！」

「そんな問題をいつてるんじゃない！今は上のゆうことを聞いておくべきだといってるんだ。そしてぼくは少なくとも君より七つ年上だし、刑事の経験も三年は長いしそのぼくがそう判断しているから君はぼくのいうことを聞くべきなんだ」

「あつ……」

気がついたら、フェンス越しにすぐ傍で、隣りの家の住人が見ていた。

ふたりは照れ臭そうに頭を下げる。

還暦は過ぎていそうな老人が、剪定バサミ片手に、庭の手入れの出で立ちでニヤニヤしている。

「家の屋根がどうかしたつて？」

「い、いえ。この娘こが、あの部屋むろから」といつて芳樹は今井の部屋を指す。「お宅の屋根に飛び移れないかなんて、変なこというものですから」

「ああ、その子のことは知ってるよ。交通のオマワリさんだろ。制服姿が初々しくて、お人形さんのように可愛かったけど、へえー、今は刑事さんかい」

「この子でもその子でもありません。わたし、れっきとした二十歳

過ぎた大人ですから」

「んふふふ。まあ、よかったらこっちきて、気のすむように調べてみたら。早く事件を解決してもらわないと、気味悪くてねえ」

いわれて芳樹とメグミは隣の家敷地を調べた。別段変わったところはない。

「屋根から変な音とかなかったですか？」と芳樹が訊き、「犬とかは飼っていないですよえ」とメグミが訊いた。

「うん。ばあさんとふたり暮らしたからねえ。ばあさんはすぐ傍に爆弾が落ちててもわからん。わしも近頃は耳が遠くて。猫は飼ってるけど犬はね」

——その猫は喋れんのかね？

と吉賀の親父がいった猫だなどメグミは思った。同じことを訊いてやるうかとも思ったけど、今はそんなジョークをいう気分ではない。芳樹が自分を子供扱いにしたのだ。

七歳——といえば、小学一年生と中学二年生の違いではないか、中学二年生と……二十一歳の大人？……との違い？

それは大変な違いだった。自分と従兄弟の中学生・孝之との違い、メグミはようやく芳樹の気持ちを理解した。それなのに随分生意気な口を利いてきたものだ。

「今井がこっちの敷地に下りることができたら、夜半に悠々と出かけ、素知らぬ顔で戻ってくるができるな。その間ばくらはバカ面下げて、表から一心に見張ってたわけだ」

「でも先輩、下りるのは飛び下りればいいですけど、帰りはー飛び上がることはできませんよ」

芳樹が顎でフェンス際の脚立を指した。

「あいつを引き伸ばしてアパートの壁に掛け、そこからならこちらの二階の小屋根へ。前もって窓を開けておけば、小屋根から窓枠に取り付いて……」

電撃のように芳樹の脳裏を走ったのは、家宅搜索の時、釣りの趣

味がない今井の部屋から釣り道具が見つかったことだ。そして番線！
思わず芳樹はメグミの頭を掴んで、その日向ひなたのにおいのする髪に
キスをした。

「キャッ！ な、なにするんですか！」

「なにや？」

と板井部長刑事はいった。

「確か今井の部屋には釣り道具と、先がフックのようになった8番線があつたんでしたよね」

宮崎芳樹は――当然名古屋に出張中だったメグミも――家宅捜索に加わってなかった。

「それがどげえかしたんか？」と板井は煩^{わづ}そうに芳樹を見た。

傍には山崎課長も柳井警部補もいた。というか課長の席の前だった。三人が揃っているところを見計らってから、芳樹が声をかけたのである。

でないと、陰険な板井にいい加減にあしらわれる恐れがあつた。

一応彼の顔を立てておく意味もあつた。

芳樹は昨日のことをかいつまんで話した。三人がいつせいにメグミのほうを見たことから――メグミは席に着いて報告書を書いている――芳樹があらひのままを語っているのがわかる。

「それで、自分らは、お隣の家のお立を拝借して、アパートの壁に立て掛け、ようとして、長さが足りないことに気付いた。忍び返しのフェンスが邪魔してですね。ところがそんな面倒なことはいないでも、隣りの家の大家根に上がれば、大家根から二階の小屋根に上がるのは簡単そうだった」

「ホントかい？」と柳井警部補が驚きの声を上げた。おあつらえ向きにそんな脚立が……」

「ええ。ヤマモモの木を剪定するのに使用していたそうですけど、高枝切りバサミを使用するようになってからは、ほとんど使用することなく据えたまま放置してあつた」

「そつえば確かにヤマモモの木があつたなあ……」と警部補。脚立にまで目が行かなかったのは不覚だった。

板井巡査部長は目を白黒させていう。

「だけとお前、そんな重いものをー」

「それがアルミ製で軽いんですよ。おあつらえ向きに、足を乗せる所に、リングが付いていた。壁に掛けたりする時のものでしょう」

「そいつを釣り針で釣り上げたというのか」山崎警部が意気込んでいった。

「実験したわけじゃないですけど。なにしろ聞き込みのほうが気になつて」

「バカいつてんじゃない！ そんな大事なことを差し置いて」と警部補。

「先を曲げた番線はタモのような役目をしたというのか」と警部が太い目を剥いた。

アパートの二階窓から脚立を釣り上げて、それを掛けて隣りの家の二階の小屋根に移り、小屋根から一階の大屋根には容易く下りられる、大屋根からはまた脚立を立て掛けて庭に下りた。そして脚立をたたんでヤマモモの木の所に戻しておいた。

帰りは逆のコースで、大大家根には先程の番線を隠し置いていたのだろう、それを使って元の形にたたんだ脚立を、そつと元の位置に吊り下ろした。少々位置がずれていたって、地面の妙な所に穴が開いていたってー次の機会に踏み固めておけば、普段使っているわけじゃないから、わかりやしなかった。

二階の小屋根からアパートの二階窓に取り付くのは、そう難しいことではない。何度も評議したことだった。だが、飛び移るのはそうとうな衝撃を与える。そんな様子は見られなかったことから、その考えは退けられたのだった。

だが、鑑識が調べれば一も二もなくハッキリする。山崎警部は大量令を発した。

板井巡査部長は、こいつら一体なんなんだと、芳樹を睨み、佐藤メグミのほうを見た。

鑑識はすぐに答えを出した。隣りの家の庭から夥しい数の今井孝雄の靴跡をあぶり出し、土をかけていても誤魔化せない。脚立からは靴に付いていたのと同じ微物も検出された。

大分東署と同じような大失態が明らかになった。失尾したことも加えて、容疑者の行動確認の甘さが露呈された。

それに加えて、例の不審車情報が続々と寄せられるようになり、夜半にアパートをまんまと抜け出した今井孝雄が、その不審車で悠々と活動していたことが徐々に明らかになった。

だがもつと深刻な事態が勃発したのである。

あの目撃者のふたりが、ほぼ同時に姿を消してしまったのである。未帰宅老人と未帰宅児童の報が、県内はおろか、日本全国を駆け巡ることになった。

それは芳樹とメグミが例の香水でカオルちゃんこと、祇園洲の住人の、品川薫老人を試そうかという矢先のできごとだった。

彼らより一足先にその実験を試みた者がいたのだ。そして不幸にして、品川老人は一本歯も露わに、指さして騒ぎ立ててしまったのである。

その者は同じように足立明君の前にも現れた。衣装が違っていたから、明君のほうは何の反応も示さず通り過ぎた。

だからその者は立ち去ろうとした。そして何気に振り返った時、じつとこちらを見ている明君に気付いた。

明君のほうも、何気に振り返っただけで、はからずも両者は顔を見合わせる形になったのである。

距離が変わり景色も変わっていた。その者の肩から上の背景が木立から空に変わっていた。明るい空を切り取るように傾げたその首から頭にかけての様子に、明君はビクツとして立ちすくんでしまったのだ。

翌朝――といっても午前一〇時は過ぎていたが、津久見島の岸壁

に品川薫老人の水死体が流れ着いていた。

臼杵湾の中央にお椀を伏せたような形で存在する島である。キャンプに来ていた者が釣りをしているが発見した。

一方、足立明君のほうは全く消息が掴めない。首に下げていた携帯電話の電源は切られているのだろ。

メグミは忙しい最中、一日に何度ケータイを取り出して見たか知れない。見なくても肌身離さず持っているからわかるのに。

懐かしい榊原光子からの電話でさえ、恨めしく思った。話している最中に明君からかかって来やしないかと。

「大変なことになったね」と例によって低い声でいうのさえ、腹立たしかった。

「根岸弁護士に会ってみるといいよ」と光子はいった。そして、「メグ、ひとりで行動する時は拳銃を携帯するように」といった。

相手が誰であろうと、危険を感じたら迷わず容赦なく撃てと付け加えた。余計なお世話だ。公安と違って余程の事がないと、刑事は拳銃の携帯許可は下りない。

光子の忠告を聞かずにメグミは丸腰で根岸ともみに会いにいった。明らかに逸脱行為だ。うまくいって芳樹から香水を取り上げて、彼には内緒で出かけた。彼を巻き込むことはできない。

メンズコスメを振りかけて根岸法律事務所のアポを取っていたから当然根岸ともみはいた。

前に続く(前書き)

前回の間違いを正します。

7歳ー1といったら小学一年生と中学二年生の違いではないか、
中学二年生と…二一歳の大人…との違い…？

それは大変な違いだった。自分と従兄弟の中学生・孝之ほどの違
い…

前に続く

応対の女性事務員は怪訝な顔をした。

所長のデスクで、根岸ともみ弁護士と話している光子刑事のママが、振り返って硬い会釈をした。

軽く応じてメグミは応接室に案内されて行く。なにか空気がピンと張り詰めている。

それはそうだ。臼杵市で大変な事件が起きており、その所轄刑事が乗り込んできたのである。根岸弁護士が怪訝な顔をしたのは、若い女性刑事が単身乗り込んできたからだろう。

あとからやってきて、ゆつたりとソファーに体を預けた根岸弁護士はしかし、心持眉根を寄せ、両方の口角を上げ気味にして「微笑んでいるようにメグミには見えた」^{あた}「穏やかにメグミを見据えた。すでに香水の匂いがプンプンしているはずである。コーヒーを置いて行った女性事務員が、あとを振り返ったくらいである。だが根岸弁護士はそんな素振りは見せない。

そこがおかしい」と吉賀係長ならいうだろう、香水が男性用だろうと女性用だろうと、刑事がそんな匂いをプンプンさせていたら――この前きた時はそうではなかったのに――なんらかの反応を見せるほうがむしろ自然である。

あえて素知らぬ顔をしているのは、すでに防御を張っている、微笑で誤魔化そうとしていることになる。

「今日はひとりで？」

「はい。なにぶん忙しいものですから」
「なにか？」

「はい。ぶしつけですけど、先生は昨日はどちらにおられましたか？」

「アリバイですか」

「そうです」

「それなら、わざわざ臼杵から出かけてこられるまでもなく、中央署の刑事さんから、すでに尋問を受けましたけどね」

「そうですか。でも、わたしはまだ伺^{うかが}っておりませんから」

根岸弁護士の彫りの深い顔から、表情が消えた。

「午前中は事務所にいて、午後には日田市のほうに、係争中の案件の調査に行っておりまして」

「お車で、ですか？」

「いえ、電車でした。大分発が13時25分の特急ゆふ4号で、日田着が15時11分。帰りは特急ゆふ5号。日田発が18時41分。大分着が20時24分です」

これは手帳にメモらないと覚えきらない。じっと見つめる根岸弁護士視線を感じながらメモを取る。

「日田ではどなたに？ 証明してくれるような人はおりますか？」

「ええ。熊谷実という方に。でももう中央署か、日田署かの刑事さんが向かつてるんじゃないかな」

「一応身元をお伺いしてよいですか？」

「構いませんけど」といつて根岸はその熊谷実の名刺を見せた。

メグミは住所・氏名・電話番号をメモる。肩書きはなかった。

「大分駅に着いてからはどうしました？」

「マンションに帰ってから、それから、一歩も出てないわね」

「証明する方はいますか？」

「いませんわ。独り身ですからね」

「駅からマンションまでは？」

「買い物がてら歩いて」

「歩いてって、歩いたら中島まで随分あるんじゃないやありませんか？」

「そうでもないの。二〇分とはかからない」

「買い物はどちらで？」

トキワはもう閉まっているはずだった。パルコも。中央商店街はどうか知らなかった。

「シティーで食料品を」

シティーがどこにあるのかも知らない。でも、けれんみのない返答であった。

（違うのかなあ……）

例の魅惑的な微笑で見つめられてメグミは顔が火照るのを感じた。「相棒の刑事さんは今日は？」

「ええ、ちよつと」

「刑事さんはふたりで行動するはずだけど？」

「ええ、ちよつと」

実家に急用ができたと芳樹にはウソをいつている。上のほうにはふたりとも足立明君の搜索をしていることになっている。

なんの手掛かりも得られず、大急ぎでさくらちゃんから借りたライフを飛ばして臼杵に向かった。

さくらちゃんというのは、生協の店員をしている吉賀係長の下娘で、メグミと同じ年だった。買い物をしているうち、上司の娘といたので自然に仲良くなった。ふたりとも、ほかに友達がいなかったこともある。

（どうして榊原光子は根岸弁護士に会うようになって、いったんだろう？）

光子も、姉のように慕っているという根岸を疑っているのだろうか、とメグミは思う。心証としては五分五分だ。でもアリバイが確かめられたら――そうあって欲しいと思う。心が芽生えていた。きつと、光子もそうに違いない。なにかそういった状況がある、でも信じたい、自分に確かめてもらいたいのだ。

と、坂ノ市の飛鳥会館のところでいきなり内ポケットが震えた。マナー・モードにしてあったケータイの着信振動である。

開いて見ると、メールが一件の表示、メールを開けると――。

――おねえさん、助けて！

足立明君からだった。

前に続く

メグミは車を道路の端の広まった所に止めて、大急ぎで返信メールを打った。

――今どこ？

すぐに、返信がきた。

――はやく！ こわいよう、ころされちゃうよう。

それからは、若い二人のメールの早打ち競争のようだった。

――だから、どこなの？ 今いくから。

――やまのなかのこや。

――どこの山？

――ここきたことある、えんそくで。

――どこ？

――くろくいさんキャンプじょうにいくみち。

――の、どのへん？

――とうげからキャンプじょおうに向かうとちゅゆのわきみちをみぎにはいったとこのこや。

――そこにだれがいる？

――いまはいない。

――わかった、すぐいくから、なにかあつたらまたメールして。

九六位山キャンプ場なら知っていた。ここからそう遠くはない。キャンプ場とは名ばかりで、眺望はよいけどキャンプする者などほとんどいないという話。海拔四〇〇メートルくらいの高さ。行ったことはない。

九六位峠なら何度か通ったことがあった。県道21号大分臼杵線にある。メグミは新しくできた道路をあまり知らないで、坂ノ市からTOTOの前を通る旧道を走って向かった。

車を走らせながら宮崎芳樹に電話する。ワンプッシュで通じるようにしてある。

しかし、“電源を切っているか、圏外にいるか”——と例の音声がいう。

捜査本部に電話しようとしたが、止めた。言い訳のしようがない。勝手な行動をしていたことがバレたら、今度こそクビが危ない。クビにならなくても、刑事課からは追放されるだろう。コンビの芳樹の責任も問われるかも知れない。

ここはもう単身乗り込むしかない、メグミは覚悟を決めた。今更悔やまれるのは、拳銃を携帯してこなかったことだ。光子の忠告を守っていれば——いや、そうなると、携帯理由をいわなければならぬ——どっちみち、それは叶わぬことだった。

そもそも、単独行動したのがいけないのだ。

ここで頼れるのは芳樹だけ。もう一度かけてみた。やはり、空しい音声。電源を切っていることはあり得ないから、電波の届かない所にいるのだろう。

（肝心な時に役に立たないんだからもう！）

途中で広い交差点に差し掛かった。案内板には左折が宮河内インターになっていたので、迷わず左折した。随分遠回りしたことになるけど、そこからは早かった。

広い道路をすっ飛ばして、インターまで行かないうちに、臼杵方面という表示板があったので、すかさず左折した。

県道21号に出てからは知った道なので安心、広内から狭く急なくねくねした山道を上って、九六位峠に出た。そこまで一台の車ともすれ違わない。日中でも気味悪い所だ。そこでも、芳樹に電話しただけ出ない。

そこから左折した。右折すると坂ノ市方面という案内があり、鋭角に下ると臼杵市に向かう。

この辺りの山林からはよく白骨死体が見つかる。谷が深く切れ込

んでいて、白山・若山に向けて林道が縫うように走っているから、死体を遺棄するには持つてこいの場所だった。県道21号自体がメツタに車が通らないだけに。

そこからくねくね左折道路に注意しながら進む。まだセミが鳴いている。時刻は一時をまわっていた。午前中という約束だったから、それを過ぎると芳樹のほうからかかってくる可能性はあった。それに期待してマナー・モードになっているのを確かめた。

メグミは武器になりそうなものを、車内を見回して捜した。さすがに女の子の車である、ボックスも開けて見たけど、そんなものはなかった。

いよいよとなったら、棒切れでも石ころでも武器にして闘おう。命懸けで明君を守らなければならない。と思えば震えがきて、もうから心臓がバクバクした。口を開けると、お尻が飛び出しそうだった。命の危険に晒されることなんてー警官になりながらー考えてもみないことだった。

最初の右折は、道路ともいえない、小さな坂道だった。ほとんど獣道のようなーパスした。小屋があるくらいだから、ある程度の広さの道だと思った。

次の道はもつと急な坂道だったしこれも狭いーパスした。

大きくカーブした所に、二メートル幅くらいだけど、いかにもそれらしい道が斜めに上っていた。昔なら馬車道。そういう中央が盛り上がった轍わだちの跡の凹みさえあった。木材を運び出す時の道だろう、山小屋があってもおかしくない。

ほとんど離合もできない狭い簡易舗装道路を走ってきたわけだけど、その湾曲した部分だけ車を停めて置けそうなスペースがあった。離合退避場所に相違いない。

反対側になるけど、そこに車を停めて、また芳樹に電話した。やはり、例の音声。いざとなったら心細くなった。最初の意気込みはどこへやら、捜査本部に応援を要請しておいたほうがよいのではないかと、思う。

そこでまた、吉賀係長を頼った。ほとんど泣きそうな声で、今までのことを手短に語った。

「バカ！ なんちゅうことを！」初めて吉賀が荒声を出した。「そこを動くな！ いいか、そこで待機しろ！ 動くんじゃないぞ！ わかったな！」

「でも、明君が！」

「いいから、そこで見張っておれ！ ドアをロックして、見張っておれ！ 車から出るんじゃないぞ！ わかったな！」

耳が痛いほど怒鳴られて、メグミは泣き出した。

そこへ、キャンプ場方面から白いワンボックスカーが道いっぱいになって走ってきた。

メグミは手を振って止めた。

窓には黒いフィルムが張ってあって中がよく見えない。

ツーツと助手席のガラスが下りて、若者が顔を現した。

「なんですか？」

前に続く

吉賀巡査部長から連絡を受けた刑事課の刑事――といっても山崎警部ら三名は覆面車に飛び乗り、サイレンをかき鳴らして九六位山に向かった。

勿論、交番を含めたパトカー全車両が回転灯を灯し、サイレンをワンワンいわせながら、賑やかに続いた。

県道21号を数珠繋ぎになって進み、主だった分岐箇所一台ずつ配しながら、末広ダム辺りまでくると、そこからは峠まで一本道、サイレンも回転灯も消して、忍びやかに坂道を上った。

そのあとからも続々と、各地に展開していた組が指令を受けて馳せ参じた。宮崎芳樹も最後部からミニパトで追い駆けた。彼は世界の外にいたのである。

佐藤メグミとは――メグミは佐伯から10号線を通って野津経由で河野にいる自分と落ち合う予定だった。それがとんでもない抜け駆けをしていたわけである。あきれてものもいえない。

早稲^{わせ}を機械で刈り取っている農民が時ならぬ喧騒に驚いている。次から次にやってくるから、何事かえと、物見の年寄りまで家から這い出た。

大分市サイドからも、戸次・吉野・大在・坂ノ市の交番のパトが道路封鎖に向かっていた。東署・南署・中央署からも援軍が続々と向かってきていた。

九六位山を取り囲んで袋のネズミにするつもりだった。

いよいよ見えない敵が姿を現す。誰も彼もが興奮していて、足立明君や佐藤メグミの安否まで思いが及ばなかった。

芳樹と、署に残っている吉賀だけが、胸苦しい不安に急所を噛まれている。まだ少女の面影を残すメグミの顔がチラついた。カリブ海のような青い目が一――。

一番手の班長車が、約十五分で現場到着した。

吉賀がいった通りの所に黒いライフが停まっていた。

山崎警部と柳井警部補、それに運転手の後藤刑事が車から降りて、それを取り囲む。

だが、中には誰も乗っていないかった。辺りを見回しても佐藤刑事の姿はない。

そうこうしているうちに後続のパトカーが続々と到着した。制服姿の防犯係長の上田警部補が敬礼しながらやってきた。

「この上ですか？ 佐藤刑事も？」

「ああ。そうらしい」山崎警部は後藤刑事に向かっていう。「キャンプ場のほうを見て来い」

「はい」後藤刑事は班長車に乗り込んで向かった。

上田警部補に顎で命令されてパト二台がそれに追尾した。

「これじゃあ、車では無理ですね」

「そう遠くはないところに小屋があるはずだから、見つけたら包囲して、知らせてくれ」

「はい！」

上田警部補を先頭にして、警官らは革帯から拳銃を取り出して安全装置を外し、背を屈めるようにして雑木林の中の坂道を上って行く。

後ろから、「課長！」と、柳井警部補が押し殺した声でいった。

「なんだ」

「見てください。これは血じゃないですかねえ」

見ると道路脇の湿気た土に黒いシミが幾つもある。草に付いているのは明らかに赤みを帯びた血だ。土も草も踏み散らかされて、明らかに争ったような形跡がある。

「あつ！」

「どうした？」

「これ？」

といって警部補はライフの黒いボディーを指した。運転席の後ろの辺りに、刷毛はけで掃いたような跡があり、掌紋のようなものもあった。

「これは……細いから女性の手ですね。……これは男の手の平のようです。ホシの掌紋ですよ、指紋もある。佐藤刑事のは、これは血紋ですよ！ かなり負傷してますね」

それから血の付いた瓦礫や髪の毛が付いた棒切れなどが見つかった。そして佐藤メグミの携帯電話も近くの草むらから見つかった。そういう状況から、佐藤刑事が何者かと争い、負傷して、拉致されたことは明らかだった。

山崎警部は、緊急配備と、鑑識班の出動と、応援部隊の増強を、合同捜査本部に要請した。

しかしながら、深夜にかけて行われた付近一帯の捜索からは、佐藤メグミも、足立明少年も発見されなかった。緊急配備の網にも一味の車は引っ掛からなかった。

不思議なことに、小屋らしきものさえなかったのである。携帯電話の発信元も足立明少年の携帯からではなかった。従ってメールを打ったのが明君かどうか怪しいことになった。

そして鑑識が調べたところでは、佐藤メグミは重症を負っており、靴跡から相手は少なくとも二人以上であることがわかった。相手のひとりも負傷しているはずだった。掌紋・指紋は複数あつて、佐藤メグミの血紋以外は、必ずしも犯人のものかどうかはわからない。

翌日行われた捜索でも佐藤メグミの行方は掴めなかった。

根岸弁護士に会った直後だけに、佐藤刑事は罫に嵌められたのではないか、という見方もあつた。けど、根岸弁護士が、品川老人と足立明少年の殺害・拉致に係わっていないことは、アリバイが証明した。その時彼女は日田にいたのである。

それでも、彼女に尾行が付いたことはいうまでもない。限りなく

怪しいのだ。

そんな時、希代の謀殺人・青山姪臣^{てつ おみ} 根岸ともみの双子の弟をよく識^しる、警視庁の本母警部^{ほんぼ}が、合同捜査本部に姿を現したのである。

そのゴツイ顔と巨体は、イタ高のゴンタクレで鳴らした権藤警部が可愛く見えるほどだった。

16（前書き）

ほかの小説と間違えたので、さしかえるまで、しばらくお待ちください！

さしかえましたので、お読みください。
短いですけど、とり急ぎ。

小学生児童に続いて現職の刑事まで何者かに拉致されるという報道が、秋季国体で盛り上がりかけていた大分県民に冷水を浴びせ、東京・名古屋と、広域的な劇場型犯罪のエスカレートぶりに、日本全国の注目が集まった。

捜査員が犯罪に巻き込まれ、犠牲になるなどということは、法治国家の根底を揺るがし、国家の威信に係わることであり、あつてはならないことだった。

いかなる犯罪組織も、この条理はわきまえていて、これを踏み越えることはない。だから公然と存在しているのであり、彼らにとつても 警察力を増強され兼ねない 許されざる異端であった。

この異端はもっかのところカルト以外には考えられなかった。

しかし、これだけの事件が、警察庁によって広域重要指定事件に指定されないのは、不思議なことだった オウム事件もそうだったけど。

拉致された佐藤メグミは拉致現場に夥しい血液を残していた。車のボディに、刷毛で掃いたように付着していた血液などからみて衣服にも相当量沁み込んでいると思われ、致死量に達しているのではないかと、仲間内では懸念されていた。

詳しい事情を説明すべく、相棒の宮崎芳樹が家族の元に派遣された。

蒲江の実家には、家族がみんな集まっていた。日中でも暗い居間に暗い影をなしていた。

みなもう涸れたような目をショボショボさせていた。小さい子供らがい出したように泣いた。

身を切られるような思いでいることは痛いほどわかった。

芳樹は事情を説明しながら、何度も、「心配しないでください。彼らはこれまで、女子供には手をかけていませんから」と繰り返し続けた。

そんなことはなんの気休めにもならないと、いつてる本人が思っているのだけど、家族はそれに縋り付いた。瞳を光らせて芳樹を見た。

「心配ねえち。じいちゃん、ばあちゃん」

そういつて頻りに慰めているのは、神戸から急遽帰郷してきた、和佳子というメグミの下の叔母だった。

「うん。そうちゃ。メグミはシンの強い子じゃけん」と、津久見の弥栄子もいう。

メグミに似た高校生の女の子と中学生らしき男の子もいた。

芳樹は逆に励まされたような気持ちになって、その家をあとにした。

（そうちゃ。あいつは賢い……）
と、呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6168p/>

バニシング・ツイン

2011年11月21日19時25分発行